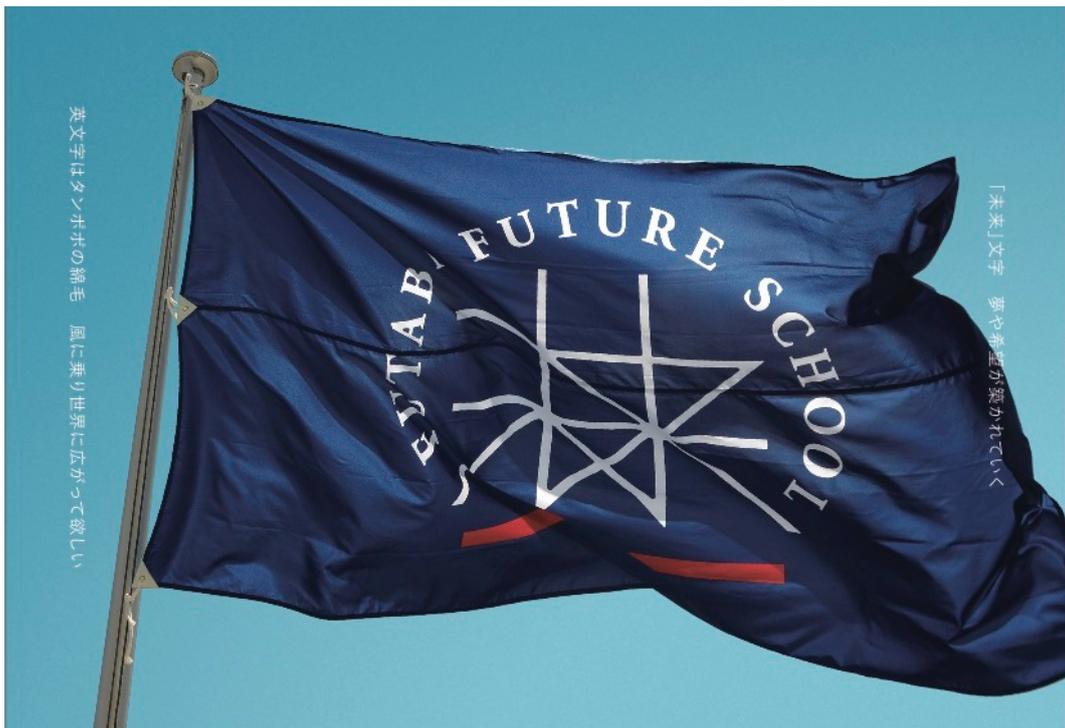




令和5年度指定
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業

研究開発実施報告書
第2年次



福島県立

ふたば未来学園中学校・高等学校

「学びの変革」の実現に向けて

福島県教育庁高校教育課長 高橋 喜智

令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究開発実施報告書の発行にあたり、御挨拶申し上げます。本事業については、令和5年度に文部科学省に採択され、事業拠点校である福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校を中心に、事業協働機関及び国内外の事業連携校の御理解と御協力のもと、様々な取組を推進できましたことに心より感謝申し上げます。

本県は、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故からの復興・創生に向けて、今後も様々な課題を乗り越えていかなければなりません。また、Society5.0の到来や国際情勢の急激な変化等、将来を予測することが極めて困難な社会となっております。正解が1つとは限らない社会の中で、一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せであるWell-beingを実現するには、子どもたちに自らの力で豊かな人生を切り拓き、多様な他者とともに豊かな社会や地域を創造する力を育む必要があります。復興・創生の過程という困難な状況の中で培われてきた他者との対話や協働を通じた学びを、「福島ならではの」教育として更に充実・発展させてまいります。

このような状況を踏まえ、本県教育委員会では、令和4年度からスタートした第7次福島県総合教育計画において、本県教育の柱として、「学びの変革」を掲げ、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びを推進しております。このような「学びの変革」を実現させるための施策の1つとして、世界で活躍する人材育成を推進するため、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校を事業拠点校とした本事業に取り組んでおります。

本事業は、「原子力災害からの復興を果たし、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの育成」という研究開発構想のもと、事業協働機関や国内外の事業連携校と連携しながら、先進的なカリキュラムの研究開発を行い、高校生に高度な学びを提供する仕組みである「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」の形成を目指すものです。

1年目には、事業拠点校及び管理機関を中心に、各連携先と「福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」を形成しました。事業協働機関の1つである東北大学とは、先取り履修及び単位認定に向けた協議を開始し、東北大学の講座を本県高校生が大学生とともに履修し、その成果を合同発表会で披露する取組が行われ、条件を満たした生徒には、「オープンバッジ」が発行されました。

さらに、各校の探究学習等を通じて、個性化・個別化した興味関心をさらに深化・高度化させていくための機会として、高校生国際会議を開催するために、2年目である今年度は、事業拠点校と事業連携校の生徒や教員が集まり、「福島県WWL高校生国際サミット」キックオフミーティングを開催しました。それに加え、東北大学、早稲田大学、認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ等の事業協働機関の御協力のもと、「ふくしまアドバンスト・ラーニング探究ゼミ」を開始し、定期的に交流が行われています。今後は、海外の生徒等との交流に向けて、準備を進めてまいります。

最後になりますが、本事業が「学びの変革」を実現し、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの育成につながることを心より期待しております。

目次	
巻頭言	
巻頭言	
第1章	研究開発概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2章	管理機関の取組
	2.1 AL ネットワークの構築
	2.2 より深い学び
第3章	拠点校の研究開発の内容・活動実績
	3.1 地域創造と人間生活(高校1年次)
	3.2 未来創造探究(高校2年次)
	3.3 未来創造探究(高校3年次)
	3.4 海外・国内研修
	3.5 外部発表・交流
	3.6 社会起業部の活動
	3.7 未来研究会
第4章	連携校の取組
	4.1 県内連携校の取組
	4.2 県外連携校の取組
第5章	外部連携
	5.1 外部連携
	5.2 外部連携実績
	5.3 早稲田大学との協働
	5.4 カタリバ
第6章	実施の効果とその評価
	6.1 ルーブリック評価
	6.2 ルーブリック評価の定量的分析(アクセンチュア株式会社)
	6.3 8期生の個別評価
	6.4 3年間を通した各取組に関する評価
	6.5 進路や生き方・在り方に関する評価
	6.6 学校アンケートによる評価
	6.7 設定した目標の達成度
第7章	研究開発の成果と課題
	7.1 研究開発成果概要
	7.2 コンソーシアム組織との協働
	7.3 今後の課題
	7.4 カリキュラム・アドバイザーによる総括
関係資料	資料1 教育課程表
	資料2 ルーブリック表
	資料3 運営指導委員会
	資料4 生徒探究テーマ一覧

2. 1 福島アドバンスト・ラーニング・ネットワークの構築

- 1 福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク（以下、「福島ALネットワーク」）について
 - (1) 事業拠点校：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
 - (2) 県内事業連携校：福島県立福島高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立会津高等学校、福島県立会津学鳳高等学校・中学校、福島県立磐城高等学校
 - (3) 県外事業連携校：宮城県仙台二華中学校・高等学校、山形県立東桜学館中学校・高等学校
 - (4) 事業協働機関：福島国際研究教育機構（F-R E I）、東北大学、早稲田大学、福島大学、福島イノベーション・コースト構想推進機構、認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ

- 2 管理機関主催会議及び研修会について（令和7年2月14日現在）
 - (1) 第1回福島ALネットワーク推進会議（オンライン開催）

期日：令和6年5月21日（火）10：30～12：00

内容：令和5年度及び令和6年度の取組について
令和5年度における東北大学等との連携について
アドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成について
本会議の設置要綱について
本事業で育成するグローバル人材像について
探究的で文理融合した高度な学びについて
※AP：アドバンスト・プレイスメント（先取り履修）について
高校生国際会議について
 - (2) 第1回福島ALネットワーク推進会議実務担当者会（オンライン開催）

期日：令和6年6月26日（水）10：00～12：00

内容：令和6年度東北大学との連携について
第1回事業拠点校・事業連携校連絡協議会について
令和6年度学問論演習の受講について
令和7年度学問論演習について
 - (3) 第1回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（ハイブリッド開催）

期日：令和6年7月8日（月） 14：00～16：00

内容：WWLコンソーシアム構築支援事業の概要について
本事業で目指すカリキュラム開発について
高校生国際会議について
東北大学との連携について
 - (4) 第1回運営指導委員会（オンライン開催）

期日：令和6年9月10日（火） 16：00～17：30

内容：令和6年度上半期の取組について

令和6年度事業実施計画について

「令和7年度開催の高校生国際会議を今後の探究学習にどうつなげるか」について

運営指導委員による指導助言

- (5) 第2回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（ハイブリッド開催）
期日：令和6年10月24日（木） 14：00～16：00
内容：令和7年度高校生国際会議について
令和6年度高校生国際会議キックオフミーティングについて
高校生実行委員会について
成果検証のためのアンケートについて
- (6) 令和7年度福島県WWL高校生国際サミット（仮称）に向けてのキック
オフミーティング（対面開催）
期日：令和6年12月7日（土） 10：30～15：40
内容：趣旨説明
チームビルディング（自己紹介・個人の探究テーマ発表など）
ランチミーティング
講演「福島について対話をする世界の高校生」（早稲田大学国際学
術院・大学院アジア太平洋研究科 松岡俊二教授）
グループワーク
- (7) 第2回運営指導委員会（オンライン開催）
期日：令和7年2月6日（木） 16：30～17：30
内容：令和6年度事業実施状況について
事業拠点校における実施状況について
高校生国際会議について
東北大学との連携について
「WWL事業の研究成果報告会に向けて測定したい卒業生アンケ
ートの実施について」
運営指導委員による指導
- (8) 第3回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（対面開催）
期日：令和7年2月10日（月） 10：30～12：00
内容：令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業活動報告
令和7年度福島県WWL高校生国際サミットについて
令和7年度WWLコンソーシアム構築支援事業について
- (9) 教員研修会（対面開催）
期日：令和7年2月10日（月） 13：30～16：00
内容：講演「これからの『高校生の学び』とは？～グローバル×デジタル
×人生100年時代に向けて～」（ベネッセ教育総合研究所 教育イ
ノベーションセンター長 小村俊平氏）
グループ対話（哲学対話）

第1章 研究開発概要

令和7年3月31日

事業完了報告書（暫定版）

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福島県福島市杉妻町2番16号
 管理機関名 福島県教育委員会
 代表者名 教育長 大沼 博文

令和6年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
令和6年4月1日（契約締結日）～令和7年3月31日
- 2 事業拠点校名
学校名 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
学校長名 郡司 完
- 3 構想名 原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成
- 4 構想の概要
拠点校が所在する福島県双葉郡は東日本大震災および原発事故という、人類が経験したことがないような複合災害にみまわれ、解決困難な様々な課題に直面した。原子力災害からの教訓の伝承や放射能汚染からの環境回復などの福島固有の社会課題と差別・偏見のメカニズムや持続可能な社会の実現などのグローバルな課題を重ね合わせ、その解決に向けてより探究的で文理融合した高度な学習プログラムの研究・開発・実践・検証を国内外の連携校や大学・福島国際研究教育機構などの研究機関と協働しながら進める。「福島ならではの」教育の充実を通して、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと変革する「学びの変革」を実現する。この「学びの変革」を通じて、地域の「創造的復興」や全国・海外で協働しながら福島の創造的復興を担う内発的イノベーションを起こすグローバル人材の輩出に繋げ、教育と復興の相乗効果を創出する。
- 5 教育課程の特例の活用の有無：有
 (1) 学校設定科目「地域創造と人間生活」を新設しており、地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成する。（総合学科の必修科目「産業社会と人間」を代替する）
 (2) 教科・芸術1の中に学校設定科目「演劇I」を新設し、演劇の幅広い活動をとおして、演劇に関する見方・考え方を働かせ、表現コミュニケーション能力の向上、生活や社会の中の演劇への理解、演劇文化と幅広く関わる資質・能力を育成する。

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目		実施期間（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ALネットワークの体制整備	外部アドバイザーとの連携	随時連携（カリキュラムアドバイザー）											
	事業協働機関との連携	東北大学（AP）											
		福島ALネットワーク推進会				講座開講準備 受講生徒調整			講座開講（学問論演習）			成果発表会	
		早稲田大学（文理融合科目開発）★：ふくしま学（楽）会 ☆：1F地域塾											
事業拠点校、事業連携校との連携		○福会 ○仙山 ○福			○山			○山 ○会 ○学	○福 ○仙山	○福 ○安 ○学 ○磐 ○仙山		○福 ○安	連絡協議会

		◎拠点校：事業連携校へ学校訪問 福：福島高校 安：安積高校 磐：磐城高校 ●事業連携校：拠点校への学校訪問 会：会津高校 学：会津学鳳高校（県内事業連携校）										
事業内容に応じた連携		随時連携（認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ）										
運営指導委員会の開催	依頼・委嘱		第1回								第2回	
事業評価の実施		評価資料の収集、分析										検証委員会（予定）
財政支援												次年度予算確保（県費）

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究・開発・実践に取り組む体制の整備状況
 以下の構成員からなる福島ALネットワークを組織し、福島ALネットワーク推進会議を管理機関に設置した。本事業の構想目的・年度計画の策定・事業の運営、達成状況の評価・見直しのため、各機関責任者及び担当者による定期的な会議を開催した。また、事業連携校においては、SSH校の学校もあることから、引き続き、連絡協議会で県外連携校の取組を共有する機会を設け、令和5年度以上に事業拠点校や各事業連携校で行われる発表会に相互に参加できる体制づくりに取り組んだ。

【福島ALネットワーク】

- 管理機関：福島県教育委員会（福島ALネットワーク事務局）
- 事業拠点校：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
- 事業連携校：
 - [県内事業連携校5校]
 福島県立福島高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立会津高等学校、福島県立会津学鳳中学校・高等学校、福島県立磐城高等学校
 - [県外事業連携校2校]
 宮城県仙台二華中学校・高等学校、山形県立東桜学館中学校・高等学校
 - [国外事業連携校3校]
 国連国際学校（アメリカ・ニューヨーク）、エルンスト・マッハ・ギムナジウム（ドイツ・ミュンヘン）、ブロックハウス・ベイ・インターメディエット、（ニュージーランド・オークランド）
- 事業協働機関：東北大学、早稲田大学、福島大学、福島国際研究教育機構（F-REI）、福島イノベーションコースト構想推進機構、認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ

- b. 管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況
 管理機関と事業拠点校で定期的に打ち合わせや情報交換を行った。また、情報共有を円滑にするために、メールでのやり取りの際には、事業拠点校の関係者にもその都度、共有するようにした。運営指導委員会では、本事業における目標や進捗状況を確認し、イノベーションでグローバル人材の育成に向けた意見交換を行った。また、本事業の円滑な実施に向けて、カリキュラムアドバイザーからの指導・助言を頂いたり、検証委員会を組織化したりすることに取り組んだ。また、事業拠点校・事業連携校連絡協議会では、福島ALネットワーク推進会議で決定した方向性を受け、事業の内容や計画を共有し、高校生国際会議に向けた体制作りに取り組んだ。Google Classroomを活用し、関係生徒及び教員との連絡体制を整えた。さらに、事業拠点校と事業連携校の担当教員が相互訪問し、情報共有を図った。

管理機関・カリキュラムアドバイザーと事業拠点校	通年
運営指導委員会	第1回： 9月10日（火） 第2回： 2月6日（木）
事業拠点校・事業連携校連絡協議会	第1回： 7月8日（月） 第2回： 10月24日（木） 第3回： 2月10日（月）
事業拠点校と事業連携校	のべ12回

- c. 管理機関の長、事業拠点校の校長が果たした役割
 本事業を推進するために、福島県教育委員会教育長は「福島ALネットワーク」を形成するとともに、福島県教育委員会内に福島ALネットワーク事務局を設置した。事務局は事業連携校や事業協働機関に協力を要請し、高度な学習環境を整備し、全県の学びの変革に位置付けた形で本事業を推進する体制を整備した。また、福島県の学びの変革推進の方向性との調整や事業協働機関との調整を行い、カリキュラムアドバイザー等を目指

揮して事業拠点校・事業連携校へ指導・助言を行い、本事業を推進した。

事業拠点校の校長及び副校長は、スクールポリシーと方向性を合致させながら事業拠点校におけるカリキュラム開発を進めるとともに、管理機関や事業連携校に必要な情報を提供し、事業連携校のカリキュラム開発を支援した。「福島ALネットワーク」の体制整備に向けて、カリキュラム開発拠点校の立場から積極的な連絡調整を行った。先取り履修や教育課程の見直しに向けた協議を行った。また、事業連携校の生徒にも参加を依頼した成果発表会を実施した。さらに、令和7年度の高校生国際会議に向けた国外事業連携校との連絡・調整やプロジェクト型海外研修を実施した。

d. 専門的見地から指導・助言に当たる運営指導委員会の開催実績や事業の実施状況を検証するための組織（検証組織）等が検証のために収集した資料の状況等

(1) 運営委員会の構成

氏名	所属・職	備考
鈴木 寛	東京大学公共政策大学院教授	教育政策、公共政策の視点
田熊 美保	経済開発協力機構（OECD）教育スキル局 教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030の視点

(2) 開催実績

回	日時	内容
1	令和6年9月10日（火） 16:00～17:30 オンライン開催	<ul style="list-style-type: none"> 令和6年度上半期の取り組みについて 令和6年度の研究開発実施計画について 協議「令和7年度開催の福島県WWL高校生国際サミットを今後の探究学習にどのようにつなげるか？」
2	令和7年2月6日（木） 16:30～17:30 オンライン開催	<ul style="list-style-type: none"> 令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業実施状況について 令和7年度事業実施計画について 協議「WWL事業の研究結果報告会に向けて測定したい卒業生アンケートの実施について」

(3) 検証委員会の構成

氏名	所属・職	備考
中田 スウラ	放送大学福島学習センター所長	
藤井 篤之	アクセンチュア株式会社 ビジネスコンサルティング本部 ストラテジーグループマネージング・ディレクター	

(4) 開催実績

回	日時	内容
1	令和7年3月実施予定 オンライン開催	<ul style="list-style-type: none"> 令和6年度の取組について 評価・検証指標に関する指導・助言 令和7年度事業実施計画・実施状況について

(5) 検証資料

実施主体	評価対象	検証資料
ふたば未来学園高校	ふたば未来学園高校 本校舎生徒全員（305名）	ふたば未来学園 人材要件ルーブリック
ふたば未来学園高校	ふたば未来学園高校 本校舎生徒全員（305名） 保護者（271名） 教職員（98名）	ふたば未来学園 学校評価アンケート
ふたば未来学園高校	ふたば未来学園高校3年生（114名）	「3年間を通じた各取組に関する評価」
ふたば未来学園高校	ふたば未来学園高校3年生（114名）	ふたば未来学園 人材要件ルーブリック
アクセンチュア	ふたば未来学園高校 本校舎生徒全員（305名）	ルーブリック評価の定量的分析
管理機関	ふたば未来学園高校2年生（6名） 福島高校1年生（3名） 会津学鳳高校1・2年生（4名）	東北大学「学問論演習」事後アンケート

e. 管理機関が、事業拠点校等の卒業生の卒業後の進路とイノベティブなグローバル人材としての成長の過程を追跡把握する仕組みを構築し、必要な情報を収集する状況

管理機関は、事業拠点校において、令和6年度卒業生についても、高校卒業後も連絡を取り合えるメールアドレスを把握し、アンケートや成長の過程を取材・インタビューを行う体制を整えた。また、卒業生が事業拠点校に定期的に訪問しており、その際に大学での学びや成長について、事業拠点校の教員や認定NPO法人双葉みらいラボの職員と共有する体制を整えた。

f. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる留学生等の日本での学習や生活を支援する体制

管理機関は、留学生等の学習や生活について、福島県生活環境部国際課や公益財団法人福島県国際交流協会と連携している。福島県国際交流協会には、外国人相談窓口があり、生活の相談や申請に関する手続き等について、多言語に対応できる体制が整っている。また、日本語の学習や地域のイベント、各市町村の国際交流協会と取り組んでいることについて情報提供を行っている。さらに、本県の観光交流課と連携して、台湾の学校交流を進めている。

g. 本事業による取組が学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況
これまでも事業拠点校では「未来創造探究」を教育課程のコアと位置づけて、全校体制で取り組んできた。また、未来研究会（校内研修会）などでの探究学習に関する情報共有や指導体制の振り返りを行ったり、学年毎あるいはゼミ毎の打合せを多く設定するなど機動力のある会議体で情報共有の機会を多く持ったりすることで、探究学習を学校全体で取り組む学校文化づくりを作り上げてきた。これまでのSGH事業と地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）の成果をまとめ、探究学習で蓄積した指導資料をさらに活用するために、「未来創造探究ポータルサイト」を立ち上げた。これまで探究の授業で使用した教材の共有化や生徒発表動画など普段の探究の指導で活用するデータをふたば未来学園共有の「コモン（共有財産）」と位置づけ、先生方により活用しやすいようにするために、ポータルサイトを作成した。ポータルサイトの内容は今年度も新たな教材を入れ、アップデートを行った。また、令和6年度はふたば未来学園高校開校10年目を迎え、過去の10年間を振り返りながら次の10年を考える未来研究会を行った。その中で、本事業で探究学習に関する深化を行うためのコンテンツは十分にそろったものの、相互の連関が弱かったり、内容が多すぎて生徒が消化不良気味になったりしているのではないかという議論も出てきた。これからの10年を考える上で、内容の精選とコンテンツの相互連関を強める意識が校内の分掌を超えて進めるべき課題という意識が生まれた。生徒の意識については、本事業で他校での発表の機会が増えたことで、探究学習により前向きに取り組む生徒が増えている。また、校内の先輩の取組を見ることで、探究学習が「学校文化」として定着している状況ともいえる。

h. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を受け入れた場合、国名や人数等
公益財団法人AFS日本協会の「アジア高校生架け橋プロジェクト」としての受入実績は令和6年度は、ゼロである。ただし、AFSのAFS年間プログラム（2023年）通常生としては、タイとイタリアから留学生を1名ずつ計2名受け入れている。

【財政等支援】

a. 管理機関が本事業の運営にかかる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として計画段階よりさらに計上したもの

管理機関は、「福島県東日本大震災子ども支援基金」を財源に、事業拠点校及び事業連携校の生徒に対するカリキュラムに位置付けた海外研修経費の一部を補助した。また、昨今の物価高を踏まえ、管理機関負担額を増やした。

b. 管理機関が事業に必要な取組に対し、人的又は財政的な支援や教職員を育成するために研修やセミナー等を実施した状況

（1）人的・財政的支援

管理機関は、教育課程担当指導主事を配置するとともに、カリキュラムアドバイザーを配置した。事業拠点校には、英語によるライティングスキルやプレゼンテーション技法指導のために、グローバル・イシューの内容面の指導も可能な英語教員を加配した。また、イノベーションの基盤となる創造力の育成のために、教員採用試験の特別選考枠で採用した演劇の専門家を引き続き配置した。

（2）研修やセミナー

事業拠点校や事業連携校に対して、イノベーティブな人材育成に資するカリキュラム開発や探究学習の指導方法などについて、事業協働機関の認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボと連携して、国や海外の研究成果や事例、課題等を報告することを通じて研究開発を支援し、同取組を県内の教員研修等で共有した。さらには、本県の事業として、大学教授・地域人材・大学生等の外部人材を積極的に活用しながら、リーダーの資質をもつ高校生や英語による発信能力をもつ高校生の育成、探究学習・SDGsの視点を踏まえた教育の充実を図る取組への支援や、事業拠点校の取組を学びながら自校の体制やカリキュラムを構想する教員向けの研修プログラムを実施した。

【ALネットワークの形成】

a. 構想目的・年度計画の策定、事業の運営、達成状況の評価・見直しのため、管理機関の長と事業拠点校における本事業の運営責任者、主要な協働機関の関係者等をメンバーとするALネットワーク運営組織の実績

（1）福島ALネットワーク推進会議

管理機関に設置した。主要な機関の長により、事業の内容や計画・進捗に関する情報を共有するとともに、専門的かつ総合的な観点から、先取り履修等の取組の方向性を決定した。

○期 日：令和6年5月21日（火）10:30～12:00（オンライン開催）

○出席者：事業拠点校、事業協働機関（東北大学、福島国際研究教育機構（F-REI）、早稲田大学、福島大学、福島イノベーション・コースト構想推進機構、認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ）、管理機関、カリキュラムアドバイザー

○内 容：報告

報告1）令和5年度及び令和6年度の取組について

報告2）令和5年度における東北大学等との連携について

協議1）アドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成について

協議2）本事業の設置要綱について

- 協議3) 本事業で育成するグローバル人材像について
 協議4) 探究的で文理融合した高度な学びについて
 ※アドバンスト・プレイスメント (先取り履修) について
 協議5) 高校生国際会議について
- (2) 福島ALネットワーク推進会議実務担当者会
 ○期 日: 令和6年6月26日(水) 10:00~12:00 (オンライン開催)
 ○出席者: 事業拠点校、事業協働機関(東北大学)、管理機関、カリキュラムアドバイザー
- (3) 先取り履修に係る協議会
 アドバンスト・プレイスメント(以下、AP)実施の準備段階に係る事業協働機関との調整や計画立案、実施後の実施状況、成果及び課題を共有することで、APが円滑かつ適切に遂行できるように協議を行う予定である。
 ○期 日: 令和7年3月予定(オンライン)
 ○出席者: 事業拠点校、事業協働機関(東北大学)、管理機関、カリキュラムアドバイザー
- b. ALネットワーク運営組織により、本事業が円滑及び適切になされるよう、管理機関 の間で十分な情報共有体制を整備し、新たな共同事業の開発、有効な事業実施を実現したこと
 令和5年3月に締結した事業協働機関の東北大学との教育連携に関する協定に基づき、同大学と先取り履修に係る協議を行い、令和6年度は、東北大学の「学問論演習」を事業拠点校と事業連携校の3校が受講する取組を開始し、高校生が受講可能な講座を8講座に拡充した。約半年間、大学生と高校生が一緒に受講した後に、成果発表のためにポスターを作成し、選ばれたグループは、口頭発表を行った。受講者全員が、オープンバッジを取得予定である。
- c. ALネットワーク運営組織が、校内外の大学、産業界、その他国際機関等との連携・交流を通じて、当該プログラムの修了生の、国際的な分野を結ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学等の促進に寄与したこと
 管理機関において、海外の大学進学の支援や高校在学中の海外留学への支援を以下のとおり実施している。
 ○ ふくしまの高校生海外留学応援事業
 福島県出身の世界的歴史学者である朝河貫一博士にならい、世界で活躍する「ふくしま人」を育成するため、朝河貫一博士ゆかりのアメリカの大学への入学及び学費を支援する事業である。その中で、留学準備プログラムにおいて、アメリカの大学へ進学を希望する高校生に対し、留学のための進路指導や大学での学びに必要なカレッジスキル(学習技術)の育成を行っている。
 ○ 官民協働海外留学支援制度 トビタテ!留学JAPAN 新・日本代表プログラム 拠点形成支援事業「ふくしまの未来を担うグローバル人材育成事業」
 産学官が共創した「ふくしまの未来を担うグローバル人材育成事業」地域協議会を主体に、高校生などが自ら計画を立て、海外で主体的に行う探究活動を支援する事業を開始し、令和7年度に向けて、派遣留学生の募集を行っている。
- d. ALネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況とともに、本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況
 ○管理機関: 担当者3名、カリキュラムアドバイザー
 ○事業拠点校: 管理職、企画研究開発部
 ○事業連携校: 管理職、教務部、探究に関する部署
- e. ALネットワーク運営組織において、国内外の大学、企業、国際機関等と協働し、国内外の高等学校等との連携によるテーマと関連した高校生国際会議等の開催準備状況
 福島県の高校生が学びの共同体である「ふくしまアドバンスト・ラーニング(AL)探究ゼミ」を形成し、世界各地の高校生とともに、世界共通の課題である「災害や厄災をしなやかに乗り越える力(レジリエンス)」をテーマに学校間を超えた「チーム協働探究」を行い、令和7年度福島県WWL高校生国際サミットにおいて、「2065年の福島や世界の創りたい未来」についての提言を行うことを目的に、事業協働機関の早稲田大学や認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボと協働し、「令和7年度福島県WWL高校生国際サミット」キックオフミーティングを開催した。本サミットは、令和7年8月に開催する予定で、それまでに「ふくしまAL探究ゼミ」を定期的に開催することとしている。
- f. 事業成果の社会普及のため社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施(あるいは計画)について
 (1) 事業拠点校における成果発表会(未来創造探究生徒研究発表会)
 高校3年間の探究活動の集大成となる「未来創造探究 生徒研究発表会2024」を令和6年5月2日(木)に開催し、地域の方や県内外の教育関係者など約110名の方々にお越しいただいた。分科会では、コンテスト部門、対話交流部門、ポスターセッション部門(スライド・ポスター)の3部門で行い、高校3年生の全プロジェクト93プロジェクトを発表した。また、県外事業連携校である宮城県仙台二華中学校・高等学校や山形県立東桜学館中学校・高等学校、県内事業連携校の福島高等学校、会津高等学校にも発表会に参加いただき、学校間を超えた発表会の形となった。さらに、本校卒業生にも声をかけ、「卒業したって探究は続くんです」プログラムを行い、卒業生7プロジェクトのポスターセッションを行った。令和5年度運営指導委員の田村学氏、事業協働機関の早稲田大学の松岡俊二教授などから助言をいただいた。
 (2) 全国高校生フォーラム
 文部科学省主催で全国のWWL事業関係校対象のフォーラムに、事業拠点校、県内事業連携校である

磐城高等学校及び県外連携校である山形県立東桜学館中学校・高等学校が参加し、ディスカッションやポスターセッションが行われた。

(3) ふくしま演劇教育シンポジウム

事業拠点校での探究活動を中心とした「地域創造と人間生活」（学校設定科目）における演劇教育の実践について、これまで研究・開発してきた10年間の実践報告並びに作品公開を行い、研究成果を広く校内外に発信するために、令和6年7月31日にシンポジウムを事業拠点校みらいシアターで開催した。約50名の教育関係者や地域住民にお越しいただいた。シンポジウムでは生徒の演劇発表や平田オリザ氏による基調講演「これからの復興における演劇教育の役割」、座談会を行い、演劇教育の役割と重要性について、県内外の教育関係者に広く発信できた。

(4) WWL事業 研究成果報告会（令和7年度実施予定）

WWL事業の3か年の成果にとどまらず、開校10年間で蓄積した探究学習の指導方法などの成果報告を令和7年12月5日（金）に実施予定である。

g. ALネットワーク運営組織が、構想目的の達成に資する取組を計画しその効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供を行ったこと

○事業協働機関の東北大学における大規模公開オンライン講座（MOOC = Massive Open Online Course）の情報提供

h. ALネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等があれば記載すること。

○事業協働機関の東北大学との協定書

「福島県教育委員会と東北大学高度教養教育・学生支援機構との教育連携に関する協定書」

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年「地域創造と人間生活」における地域探究学習、国際理解学習、「総合的な探究の時間」における地域探究学習	4回	6回	3回	5回	1回	4回	5回	3回	2回	3回	3回	1回
2年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	5回	3回	2回	1回	4回	5回	3回	2回	3回	3回	1回
3年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	5回	3回	2回	1回	4回	5回	3回	2回	3回		
研修（生徒）	1回							3回	2回	2回	1回	3回
発表会、交流会等	1回	2回	1回	3回	2回	2回	3回	3回	1回	3回	1回	1回
研修（教員）	2回		1回					1回	1回	1回	1回	

(2) 実績の説明

【研究開発・実践】

a. 設定したテーマ（SDGs、経済、政治、教育、芸術等）について

事業拠点校では、原子力災害からの教訓の伝承や放射能汚染からの環境回復などの福島固有の社会課題と差別・偏見のメカニズムや持続可能な社会の実現を進めるために、学校のカリキュラムの柱である『地域創造と人間生活』（学校設定科目）や『未来創造探究』（総合的な探究の時間）を中心に研究開発を進めた。
 <ゼミ編制と対応するグローバルな社会課題>

- ① 原子力災害・伝承探究ゼミ：原子力災害の教訓の後世・世界へ伝承、トランス・サイエンス
- ② 共生社会探究ゼミ：ソーシャル・インクルージョン、差別・偏見のメカニズム
- ③ 地域社会・経済産業探究ゼミ：社会イノベーションによる新たな地域産業の創出
- ④ 人間科学・文化・芸術探究ゼミ：シビック・アイデンティティ、ウェルビーイングの追求
- ⑤ 自然科学・地球環境探究ゼミ：放射能汚染からの環境回復、持続可能な社会の実現
- ⑥ スポーツ医・科学探究ゼミ：アスリート育成パスウェイ

これらの課題を解決するために、同じ課題を共有する事業協働機関や海外連携校と協働しながら、特別講義や学習会、フィールドワークなど多様な取組を行ってきた。高校2年次から始まる本格的なゼミ活動の中で、事業協働機関の大学の先生より特別講義をいただいたり、ゼミごとに読書会などゼミの特性に応じた活動を進めたりすることができた。

b. イノベーティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を、国内外の大学、企業、国際機関等との協働により行ったこと

カリキュラム開発については、主に下記の機関とともにカリキュラム開発を行った。

○東北大学

「未来創造探究」においては、理系分野の探究を中心に探究成果発表会などにお越しいただき、東北大学の教授から直接アドバイスをいただいた。

○早稲田大学

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターとの連携を継続し、ふくしま学（楽）会を年2回開催

した他、事業拠点校の生徒と地域住民と大学が協働する学びの場を作るために1F地域塾を年4回のペースで開催した。

○ 福島大学

「未来創造探究」における指導・助言をいただく他、未来創造探究生徒研究発表会での審査員でも助言をいただいている。また、2年次の探究学習を深化させるために「専門知講義」の授業で福島大学の先生から講義をいただいたり、生徒の発表を聞き「壁打ち」をしていただいたりすることで生徒の探究をより磨きをかけていただいた。また、データ・サイエンスや原子力災害に関する伝承のあり方に関する専門地講義を福島大学「地域×データ」実践教育推進室と連携しながら授業を設定した。

○ 福島国際研究教育機構（F-REI）

福島を始め東北の復興を実現するために令和5年度に開設されたF-REIとは設立記念シンポジウムや各種シンポジウムで事業拠点校の生徒が代表発表およびトークセッションを行った。令和6年3月にはF-REI主催の大学生・高校生を対象とした座談会に事業拠点校の生徒8名が参加した。12月には事業拠点校の生徒23名（AFS留学生1名含む）F-REI主催のふくしま未来創造プログラムに参加し、山崎光悦理事長による特別講演や成果発表会に参加した。

○ 認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ

認定NPO法人カタリバと2017年より協働し、「未来創造探究」のカリキュラム開発に取り組んでいる。カリキュラム開発では主に事業拠点校1、2年次に担当コーディネーターと伴走スタッフを配置し、教員と協働して授業設計、教材作成、生徒伴走、地域コーディネートなどに取り組んでいる。また、令和6年度は単なる視察の受入にとどまらず、探究学習をはじめとした取り組みのノウハウを県内外への波及を目的として「探究研修センター」としての機能を強化した。令和6年度は「探究スタートアップラボ」で全国13校、約70名の教員、「ふくしま探究スタートアップラボ」では、福島県内の7つの高校から約30名の教員が本校に来校し、研修を行った。

○ 福島イノベーションコースト構想推進機構

福島イノベーションコースト構想推進機構（以下、イノベ機構）とは、開校当時より連携を行ってきた。イノベ機構の組織である福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会と連携し、双葉郡の小中学生との協働の場づくり（中高生交流会やふるさと創造学サミット）を行った。また、双葉郡内の教職員向けの研究会を開催した。

c. 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況について、また、その実施にあたって外国人講師等を活用した実績について

「未来創造探究」の授業では、ALTと協働しながらティームティーチングを行い、高度な語学習得をめざす授業を行うことができた。また、海外研修に参加するチームの英会話指導や英語での発表、英語論文のアカデミック・ライティング指導など、事業拠点校の英語力向上の様々な機会を創出することができた。論理・表現Ⅱの授業では生徒の探究のアブストラクトを英語で作成する授業を指導し、他県で開催のWWL高校生国際会議での発表につなげることができた。

d. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したことについて

○ ドイツ研修

事業拠点校では、開校初年度からドイツ研修をカリキュラムに位置づけている。高校1年次ドイツ研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、平成28年度からミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校と交流を行っている。それ以来、同校とはオンラインも含めた交流を毎年継続している。事業拠点校では「未来創造探究」として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のみではなく、全世界が共有すべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の課題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩とするためにドイツ研修を実施した。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びに繋げた。

令和6年度は広島研修のプログラムとドイツ研修のプログラムを合同で行い、教訓の伝承をどのように行うかというテーマで事前指導プログラムを計画した。広島研修では広島国泰寺高校でのエネルギーに関する学習プログラムに取り組み、基町高校では「原爆の絵」に取り組む高校生と言語によらない伝承のあり方について議論を行った。また、福島県白河市にあるアウシュヴィッツ平和記念館でドイツにおける伝承のあり方について学習した。

○ ニューヨーク（以下、NY）研修

NY研修もドイツ研修同様に開校当初よりカリキュラムに位置づけている。本研修は、地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたいという意志を持った生徒を選抜し、原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかを考える研修となっている。NYでは国連日本政府代表部との意見交換やUNIS-UNでの各国の高校生が参加する生徒国際会議 UNIS-UN（会場：国連総会会議場）に参加し、各国の同世代とグローバルな課題について議論を行い、交流する。（2024テーマ：EQUAL RIGHTS EQUAL HEIGHTS: Climbing the ladder of gender equality） ※2025年3月にNY研修を行う予定である。

e. 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて

事業拠点校の教育課程は総合学科の特徴を生かし、3系列の特色が出る教育課程となっている。スペシャリ

スト系列・トップアスリート系列の教育課程については、各系列の専門教科の時数を確保しながら、幅広い進路選択が可能となるよう選択科目を多く配置した教育課程となっている。また、スペシャリスト系列（商業・農業・工業・福祉）のすべての1年次生が受講する学校設定科目「スペシャリスト基礎」と、トップアスリート（バドミントン・サッカー・野球・レスリング）系列の生徒が受講する学校設定科目「トップアスリート概論」を設定し、専門領域に閉じることなく広く専門性を生かした実社会での課題解決やスポーツ医・科学等を学び、より高度な学びにつながるカリキュラムとなっている。アカデミック系列の教育課程については、各教科科目を幅広く選択できる編成となっている。地歴公民科では理系の生徒にも「倫理」を選択可能とし、トランス・サイエンス（科学と人間社会の関係性）やエコシステム（自然と人間の関係）を課題解決のカギ・見方考え方として定義した。また、文系の生徒には「応用数学」でデータ・サイエンスを取り入れた授業を選択科目として設定した。

f. 学習活動が、構想目的の達成に資するよう工夫したことについて

「未来創造探究」の授業において、地域との連携機関を広げるだけでなく、より高度な探究を進めるために大学との協働できる場面を多く設定した。また、ドイツ研修やNY研修では選抜された生徒の参加であるため、海外研修での学びを学校全体の学びに広げるために、全体発表の機会や報告書の作成等を行った。海外研修の事前・事後指導で開発した研修プログラムの手法を通常の教科学習にも広げるなど、学校全体で学びの最大化に努めた。

g. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組を実施（または計画）したこと

○東北大学との連携（『学問論演習』への参加）

東北大学の講義を先取り履修するために東北大学と協議を重ねた。令和6年度は、大学1年生が受講する『学問論演習』に事業拠点校6名及び事業連携校7名が参加し、令和5年度には1講座のみであった対象講座が、令和6年度は8講座に拡大し、オンライン授業や対面授業で参加した。令和6年度もオープンバッジ（デジタル証明書）の発行のみで完全な大学の単位習得ではないが、令和7年度は大学の単位修得や新たな講座の受講に向けて引き続き協議を進めていく予定である。

○探究学習をより高度化するための外部人材の活用

これまでの探究では、生徒の探究テーマに応じて外部人材を教員が見立てて紹介する形を取っていた。境界知（地域のことをよく知る「地域知」を持つ地域の方や研究分野についての「専門知」を持つ大学教授などを含めた知）との接続については、外部発表会の際にゲストに来ていただいて際にミニ講義という形で授業をしてもらったり、直接アポを取って個別に指導をしていただいたりする形が多かった。生徒のニーズと教員の専門性がぴったり合致するのでより探究を加速させる要因にもなっていたが、個別対応が多かったため、他の生徒の学びにあまり繋がらないなどの問題点も多く出ていた。そのため、令和6年度は高校2年次を対象にゼミごとに専門家を招き、調査のためのアクションを行っている2年次前半期というタイミングに合わせて専門知講義を行った。また、1時間を講義の時間に充て、残りの1時間は講義を受けてのディスカッションや生徒の探究発表に対するアドバイスなどの時間に活用した。

h. より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境を整備したことについて

○東北大学『学問論演習』（前述のとおり）

○大規模公開オンライン講座（MOOC = Massive Open Online Course）の周知・活用

東北大学MOOCコンテンツや東京大学の「高校生と大学生のための金曜特別講座」など大学のオンライン講義の活用を広く生徒に周知した。令和5年度に「トップアスリートの食事の秘密」（講師：寺田新）の講義があったが、令和6年度は、寺田先生に直接本校にお越しいただき、専門地講義をしていただいた。

○早稲田大学との連携

事業拠点校と早稲田大学浜通りリサーチセンターが協働し、事業拠点校の生徒と大学教員などの専門家や地域の方が協働で地域の課題について学ぶ「ふくしま学（楽）会」や「1F地域塾」を引き続き共催し、多様な主体で議論を行い探究の質的向上につなげている。また、生徒が地域との協働を加速させることで「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果創出にもつなげる。

i. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、日本人高校生と留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制を整備したこと

事業拠点校では国が実施している留学生2名（タイ・イタリア）を受け入れた。学習面・生活面ともにホストファミリーと連携しながら、サポート体制を整えた。留学生とともに学習する環境は、事業拠点校の生徒の語学学習やグローバルな視野の獲得のために相乗効果を生み出している。また、国外事業連携校であるブロックハウス・ベイ・インターメディアエット・スクール（ニュージーランド・オークランド）から2名の短期留学（2週間）を受け入れた。事業拠点校から国外事業連携校への短期留学の実績はまだないことから、留学生の送り出しについても検討していきたい。

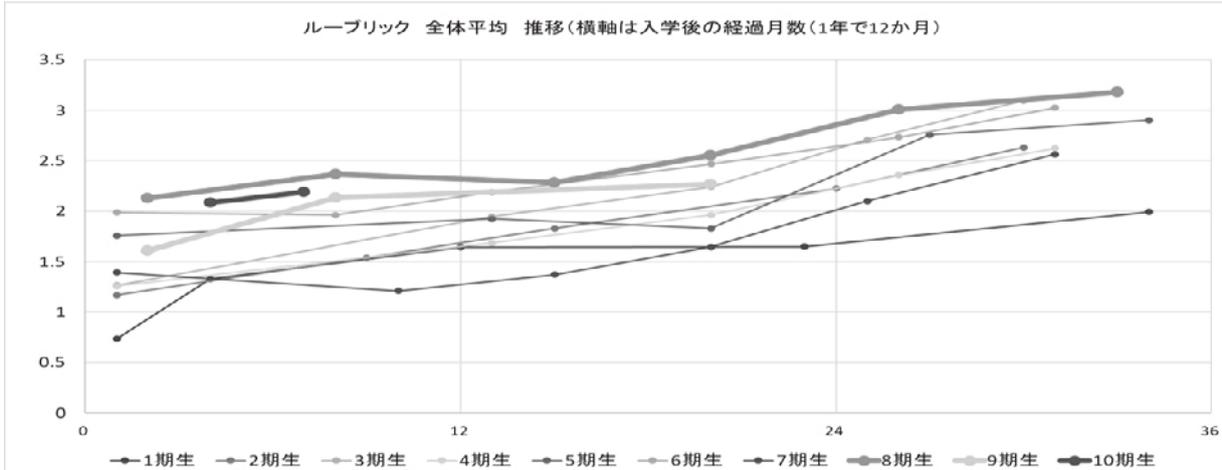
8. 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況について

事業拠点校では開校以来、人材要件ループリックで「変革者」の資質・能力を具体化してきた。

- (A) 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する能動的市民性
- (B) 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する協働的ネットワーク構築力
- (C) 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、世界に新たな価値を創造する力

事業拠点校が掲げる以上の3つの人材像はWWL事業の趣旨・目的で掲げるイノベティブでグローバルな人材像と合致する。そのため、引き続きルーブリックを活用しながら、能力の測定を行った。



1年次生は12個の資質・能力のうち、A 社会的課題に関する知識理解 (2.16→2.15) を除いてすべての項目での自己評価の上昇が見られた。特に伸びた項目は 他者との協働力 (2.18→2.39)、次いでB 英語活用力 (1.36→1.56) の項目となった。ルーブリックの数値の平均値が初期から高く (2.08・過去2番目に高い学年)、力を着実につけている。Eの項目が伸びた理由は1年次前半に取り組んだ演劇・コミュニケーション教育の成果と考えている。

2年次生は12個の資質・能力のうち、すべての項目での自己評価の上昇が見られた。特に伸びた項目はC-1 思考力 (2.14→2.30) とD 表現・発信力 (1.96→2.18)、J 自分を変える力 (2.31→2.49) であった。ルーブリックの上昇傾向はあるものの、伸び率は例年より低い。

3年次生においても12個の資質・能力のうち、すべての項目での自己評価の上昇が見られた。また、ルーブリック評価の平均値では卒業時の数字 3.18 は過去8年間の中で最も上位の数値である。特に伸びた項目G 前向き・責任感・チャレンジ (2.08→3.47)、次いでA 社会的課題に関する知識・理解 (2.034→3.28) やF マネジメント力 (2.02→3.15) が伸びた。B 英語活用力 (1.50→2.25) は過去の学年よりも高く、初めて2点台を超えた。

ここまででは、事業拠点校におけるイノベティブなグローバル人材の育成状況であるが、今後は、ALネットワーク全体の評価アンケートを行うことを予定している。令和7年度以降は事業連携校においても、共通項目でグローバル人材の資質・能力育成に関する調査を進めていきたい。

b. ALネットワークが果たした役割

○管理機関

- ・各種会議の開催、事業協働機関との連絡調整
- ・高度な学びに関する情報提供
- ・東北大学の先取り履修に向けた東北大学との協働
- ・管理機関主催の研修会の実施

○事業拠点校

- ・文理融合した高度な学問分野との接続を強化したカリキュラム開発・研究・実践・検証
- ・プロジェクト型海外研修の実施
- ・成果発表会の開催
- ・他県開催の高校生国際会議への参加
- ・「学びの変革」に資する取組の実施

○事業連携校

- ・各校の取組の共有
- ・海外研修の実施
- ・カリキュラム開発
- ・高校生国際会議に向けた取組への参加

○事業協働機関

- ・東北大学、早稲田大学、福島大学：高度な学びの提供、探究的な学びの取組
- ・会津大学：留学生との協働学習
- ・認定NPO法人双葉みらいラボ：事業拠点校との連携、教員研修の実施
- ・福島国際研究教育機構 (F-REI)：高度な学びの提供

○カリキュラムアドバイザー

- ・「学びの変革」のための指導・助言
- ・各種会議での指導・助言

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況

①短期的な目標 (WWL指定3年以内=令和5~7年度)

文理融合した高度な学問分野との接続を強化した探究カリキュラムを通常の授業で具体化し、次年度より始める。WWL初年度より議論を続けてきた、主体的に学ぶ生徒像として「自己調整能力」の育成するためのカリキュラムについて、絶えず検証をしながら進めていきたい。

東北大学と連携したAPの導入については、令和6年度は東北大学における「学問論演習」の開講講座の拡充をすることができた。東北大学の連携については、「学問論演習」以外の領域についても引き続き連携を深めたい。

②中期的な目標 (WWL指定5年後=2028年まで)

中期的な目標に掲げる「福島ALネットワークの波及とネットワークの拡大」を実現するために、さらに管

理機関と事業拠点校との連携が必要であるとする。また、福島ALネットワークを東北地区に広げるためには、他のALネットワークを運営する管理機関や拠点校との情報交換を行い、ALネットワークにおける情報共有や知見を得るようにしたい。教員研修では福島県内の探究ネットワークを構築し、積極的に発信ができていく。

③長期的な目標（10年後＝2033年まで）

長期の目標で地域や全国・海外で世界と協働しながら活躍する人材の輩出を掲げ、双葉郡復興を実現することを目指している。また福島国際研究教育機構（F-R-E-I）が本格運用されていないが、F-R-E-I主催のトップセミナーや研修事業での連携を深めることができた。また、本校の卒業生が大学で学んだ後に研究職をめざして大学院への進学をしたり、大学卒業後に双葉郡で就職したりする事例が年々増えており、開校以来コアカリキュラムとして進めてきた「未来創造探究」での学びの成果が現れてきているという手応えを感じている。

9 次年度以降の課題及び改善点

次年度以降の課題として以下の5つを掲げる。

①中高6年間で運動したカリキュラムの開発とさらに探究の高度化

探究学習については、開校以来10年間の実践と経験を積み重ねてきた。探究の指導方法についても、「4つのロールと23の関わり」を提案し、他校の教員研修にも活用していただいている。探究学習をさらに充実したものとするためには、探究学習の技法を更に磨くだけではこれ以上の高度化・深化は期待できない。日々の教科授業の「探究」的な学びの実現にとどまらず、部活動やHR活動、特別活動など学校の教育活動全体が探究のプロセスを体験できることを内蔵しなければいけないと考えている。つまり、生徒が見通し（Anticipation）を持って行動（Action）し、その結果を振り返る（Reflection）という一連のプロセスがなければ、生徒が主体的に学びをするプロセスとならない。カリキュラムを考える上で、どうしても「教員が生徒に〇〇させることで、△△する」といった教員が主語になったカリキュラムを立てがちである。あらゆる教育活動で行うためには、教務部や進路指導部など他の学校組織との目線合わせと打ち合わせが必要である。そのような体制づくりに向けて令和7年度の計画を進めていく。

また、令和6年度から高校1年次でデータ・サイエンス講座を導入した。文系・理系を問わず、高度な探究を行うには、データの収集や解析、分析が必要であり、令和5年度の弱点を強化することができた。探究学習を中心としたコンテンツ作りはかなり充実しているが、効果的な実践を行うには有機的なつながりを作っていく必要がある。有効なコンテンツで物量戦をするのではなく、「ふたば未来らしさ」を追求するなかで、精選をしていくことを進めたい。

②文理融合・教科横断的なカリキュラムの開発

文理融合・教科横断的なカリキュラムの必要性や有効性についてはかなり定着しているが、実際のカリキュラムに落としこむ段階でまだ教員の肚落ち感が足りないように感じている。各教員で自分の教科に関する教材研究や「生徒が学びたい授業」づくりに日々奮闘しているが、文理融合や教科横断をしようとすると二の足を踏んでしまう教員が多い。当初は教科横断的な授業やクロスカリキュラムを意識的に組み入れることで、教育課程上の授業時間数を減らしていくという考え方もあるが、時期尚早であるため、自分の教科に「軸足」を置きながら、他教科とどのような内容であれば他教科との連携が図れるかを試してみる、「プチ連携」から始めたい。教科指導の中で重要なことは「学問の面白さ」が生徒に伝わることである。令和5年度から「自立した学習者」を育てるにはという議論が続いているが、自ら学びたいには、学ぶための理由が必要である。「単に受験に必要だから」を超えて、「学ぶことそのものが面白い」ことを伝えられるのはやはり教科の先生の指導が重要であり、そこからも日々の教科の授業が重要である。学ぶことと力がつくことの関連性について、さらに令和7年度に研究開発を進めたい分野である。

③地域復興と教育の相乗効果を生み出す探究学習

先述のカリキュラム開発にも関連するが、本事業の開発テーマである「原子力災害からの復興を果たし、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの資質・能力の育成」を目標に掲げながら、「原子力災害からの復興」とは何かというテーマから遠ざかっている感じがある。グローバル人材が強調されている分、事業拠点校がこれまで取り組んできた「地域課題解決」と今のWWL事業の関係をもう一度整理する必要があるだろう。これは常に事業拠点校のスクールポリシーは何かを確認する作業でもある。

教員のウェルビーイングを高める方策は一般的には多忙化解消だが、ビルド&スクラップするには、教育効果の検証が必要である。令和7年度には1期生～8期生までの卒業生が社会に出てどのような力を活用しているのかなどの卒業生アンケートを実施する予定である。ふたば未来学園高校での学びの中で、「探究は何を育てたか？」を中心テーマとしながら、令和7年度の成果発表会に向けて分析を進めていきたい。

④検証委員会の活用

探究的で文理融合した高度な学習プログラムの研究・開発・実践・検証を行う上で、事業拠点校及び本事業の取組がどのような教育的効果があるのかを教員自身で振り返るだけではなく、その検証項目の妥当性も含めて教育評価の専門家による検討が必要であると考えている。令和7年度は、本事業の最終成果報告を発表する年であるため、探究学習の教育的効果をエピソードベースではなく、エビデンスベースで示せるように検証のための項目を整えていきたい。

⑤福島ALネットワークの有機的なつながりの形成

高校生国際会議を開催するために、事業拠点校及び事業連携校が連携し、同じテーマで探究活動を行う取組は強化されてきているが、それぞれの探究活動をさらに高度化・深化させられるように、大学等の事業協働機関とどのように連携するか検討が必要である。

第2章 管理機関の取組

2.1 福島アドバンスト・ラーニング・ネットワークの構築

- 1 福島アドバンスト・ラーニング・ネットワーク（以下、「福島ALネットワーク」）について
 - (1) 事業拠点校：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
 - (2) 県内事業連携校：福島県立福島高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立会津高等学校、福島県立会津学鳳高等学校・中学校、福島県立磐城高等学校
 - (3) 県外事業連携校：宮城県仙台二華中学校・高等学校、山形県立東桜学館中学校・高等学校
 - (4) 事業協働機関：福島国際研究教育機構（F－R E I）、東北大学、早稲田大学、福島大学、福島イノベーション・コースト構想推進機構、認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ

- 2 管理機関主催会議及び研修会について（令和7年2月14日現在）
 - (1) 第1回福島ALネットワーク推進会議（オンライン開催）

期日：令和6年5月21日（火）10：30～12：00

内容：令和5年度及び令和6年度の取組について
令和5年度における東北大学等との連携について
アドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成について
本会議の設置要綱について
本事業で育成するグローバル人材像について
探究的で文理融合した高度な学びについて
※AP：アドバンスト・プレイスメント（先取り履修）について
高校生国際会議について
 - (2) 第1回福島ALネットワーク推進会議実務担当者会（オンライン開催）

期日：令和6年6月26日（水）10：00～12：00

内容：令和6年度東北大学との連携について
第1回事業拠点校・事業連携校連絡協議会について
令和6年度学問論演習の受講について
令和7年度学問論演習について
 - (3) 第1回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（ハイブリッド開催）

期日：令和6年7月8日（月） 14：00～16：00

内容：WWLコンソーシアム構築支援事業の概要について
本事業で目指すカリキュラム開発について
高校生国際会議について
東北大学との連携について
 - (4) 第1回運営指導委員会（オンライン開催）

期日：令和6年9月10日（火） 16：00～17：30

内容：令和6年度上半期の取組について

令和6年度事業実施計画について

「令和7年度開催の高校生国際会議を今後の探究学習にどうつなげるか」について

運営指導委員による指導助言

- (5) 第2回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（ハイブリッド開催）
期日：令和6年10月24日（木） 14：00～16：00
内容：令和7年度高校生国際会議について
令和6年度高校生国際会議キックオフミーティングについて
高校生実行委員会について
成果検証のためのアンケートについて
- (6) 令和7年度福島県WWL高校生国際サミット（仮称）に向けてのキック
オフミーティング（対面開催）
期日：令和6年12月7日（土） 10：30～15：40
内容：趣旨説明
チームビルディング（自己紹介・個人の探究テーマ発表など）
ランチミーティング
講演「福島について対話をする世界の高校生」（早稲田大学国際学
術院・大学院アジア太平洋研究科 松岡俊二教授）
グループワーク
- (7) 第2回運営指導委員会（オンライン開催）
期日：令和7年2月6日（木） 16：30～17：30
内容：令和6年度事業実施状況について
事業拠点校における実施状況について
高校生国際会議について
東北大学との連携について
「WWL事業の研究成果報告会に向けて測定したい卒業生アンケ
ートの実施について」
運営指導委員による指導
- (8) 第3回事業拠点校・事業連携校連絡協議会（対面開催）
期日：令和7年2月10日（月） 10：30～12：00
内容：令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業活動報告
令和7年度福島県WWL高校生国際サミットについて
令和7年度WWLコンソーシアム構築支援事業について
- (9) 教員研修会（対面開催）
期日：令和7年2月10日（月） 13：30～16：00
内容：講演「これからの『高校生の学び』とは？～グローバル×デジタル
×人生100年時代に向けて～」(ベネッセ教育総合研究所 教育イ
ノベーションセンター長 小村俊平氏)
グループ対話（哲学対話）

目指すべき姿

個人と社会のWell-being(一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せ)の実現

第7次福島県総合教育計画 検索



育成したい人間像

急激な社会の変化の中で、
自分の人生を切り拓くたくましさを持ち、
多様な個性をいかし、対話と協働を通して、
社会や地域を創造することができる人

学びの方向性

「福島ならではの」教育の充実

○「福島らしさ」をいかした多様性を力に変える教育

- ・福島の課題を題材とした学び。
- ・他者との対話と協働、新たな技術や方法、価値の創造、多様性の尊重等を学ぶ、多様性を力に変える教育。

○福島で学び、福島に誇りを持つことができる「福島を生きる」教育

- ・福島の良さ(豊かな文化や歴史、自然環境、第1次産品等)をいかした学び。
- ・生まれた場所や将来働く場所は異なっても、福島県で学び育つ過程で、福島県に誇りを持つことができる教育。



▲哲学対話



▲川の生き物調査

実現に向けて

第7次総合教育計画の施策の展開

学びの変革の推進

「福島ならではの」教育とSDGs

〈学びの変革〉

- 全ての子どもに必要な力を育成するため、一方通行・画一的な授業等から、「個別最適化された学び」、「協働的な学び」、「探究的な学び」へと学び方の変革を進めること。
- 子どもたちが、学ぶ意義を、学ぶ過程で自ら見いだしていけるような学びを進める。

探究的な学び
個別最適化された学び
協働的な学び

〈学校の在り方の変革〉

- 「子どもたち一人一人に必要な力を確実に育成していく」という本来の学校の役割を果たすことができるよう、学校・家庭・地域が広く認識を共有し、学校の在り方の変革を進めること。
- 働き方改革等により質の高い教育活動を展開する。



学びの変革を柱として、6つの施策を展開

- ① 本計画に基づく施策を展開することで、SDGsに掲げられた誰一人取り残さない包摂性のある持続可能な教育環境を目指します。
- ② 本計画に基づき子どもたちを育成することで、福島県の復興・創生のみならずSDGsの17の目標の達成につなげます。
- ③ SDGsの視点を踏まえた探究的な学びを推進します。

SDGsの視点をいかし、「福島ならではの」教育を推進



施策1	「学びの変革」によって資質・能力を確実に育成する
施策の方向性	様々な教育活動の中で対面とオンライン、紙とデジタル等組み合わせ、画一的な一方通行の授業等から個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと変革し、子どもたちに必要な資質・能力を確実に育成します。
施策2	「学校の在り方の変革」によって教員の力、学校の力を最大化する
施策の方向性	働き方改革の推進や教員の養成・採用・研修の充実等により学校の在り方を変革し、教員が主体的に学び、やりがいを持って働くことができる持続可能な教育環境を構築することで、教員の力、学校の力を最大化します。
施策3	学びのセーフティネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる
施策の方向性	誰一人取り残すことなく、全ての子どもたちが、可能性や個性を伸ばすことができるよう、子どもたちの状況に応じた教育機会の提供や支援を行うことで、多様性を力に変える土壌をつくります。

施策4	福島で学び、福島に誇りを持つことができる「福島を生きる」教育を推進する
施策の方向性	福島県で学んだ子どもたちが福島県に誇りを持つことができるよう、学校と地域の連携・協働や地域をフィールドとした探究的な学びの推進等により、「福島を生きる」教育を目指します。
施策5	人生100年時代を見通した多様な学びの場をつくる
施策の方向性	健康マネジメント能力など生涯学び続ける力の育成に取り組むとともに、多様なニーズに応えられる社会教育施設の充実や、地域に根ざした文化芸術資源の有効活用等により多様な学びの場をつくります。
施策6	安心して学べる環境を整備する
施策の方向性	子どもたちが、どの地域の学校でも安心して学ぶことができるよう、少人数教育の充実、施設・設備の整備に取り組めます。

「学びの变革」実現のためのストラテジー

(令和6年度 福島県教育委員会 主要施策)
- 「学びの变革推進プラン」を進めていくための令和6年度主要施策 -

「福島ならではの」教育の充実を通じて、急激な社会の変化の中で自分の人生を切り拓くたくましさを持ち、多様な個性をいかし対話と協働を通して社会や地域を創造することができる人材を育成し、個人と社会のwell-beingを実現する。<第7次福島県総合教育計画の推進>

1 「学びの变革」実現戦略

(1) 教育DXの推進

- NEW クラウド環境を活用したゼロトラストネットワークの構築
 - NEW 「活用力育成シート」のデジタルコンテンツ化の推進
 - NEW 「自分手帳」のデジタル化(体育・食育・健康・心の健康)の構築
 - NEW 県立高校における指導用端末と校務用端末の一本化
 - NEW 自動採点システムの導入による学びのデータ蓄積の推進
 - NEW ICTを活用した文理横断的な探究的な学びの強化(高等学校のDX加速化)
 - NEW (株)LITALICOとの連携による個別支援計画作成等総合的教育ソフトの導入
 - NEW 対話型AIを活用した英語四技能の育成(ふくしま英語力向上事業)
 - NEW(一部) 計画的な1人1台端末の更新
- 254,552千円
- 8,470千円
- 149,993千円
- 35,762千円
- Life is Tech株式会社と連携した高等学校における情報教育の充実

(2) エビデンスに基づく学力向上施策の展開

- NEW(一部) 教科担任制加配の配置増
 - ふくしま学力調査の結果を踏まえた学力向上施策の推進
 - 学力向上支援アドバイザー及び研修支援チームによる授業力向上支援
 - NEW 「活用力育成シート」のデジタルコンテンツ化の推進【再掲】
 - ふくしま幼児教育研修センターにおける研修の充実と幼児教育振興計画の策定
- 69人(R5)→125人
- 70,239千円
- アドバイザー10人
- 11,370千円

(3) グローバル社会で活躍できる人材の育成

- NEW 県内企業等と連携した高校生の短期海外研修等支援制度の構築
 - NEW 英語教員に対する年間を通じた研修の実施による授業力向上
 - NEW 対話型AIを活用した英語四技能の育成(ふくしま英語力向上事業【再掲】)
 - World Wide Learningコンソーシアム構築によるグローバルリーダーの育成
- 19,573千円
- 12,028千円

(4) これからの時代に対応した新たな学びの充実

- NEW 脱炭素社会の実現に向けた産業人材の育成
 - NEW 地元企業や大学等と連携した超スマート社会を担う産業人材の育成
 - NEW ICTを活用した文理横断的な探究的な学びの強化(高等学校のDX加速化)【再掲】
 - 福島イノベーション・コースト構想を支える人材育成の推進
 - 全国産業教育フェア福島大会開催へ向けた準備
- 4,682千円
- 15,353千円
- 85,414千円
- 14,548千円

4 「多様な学び」と「学び」を通じた地域の活性化

(1) 若者の地域定着の推進

- 地域課題探究を推進するための県立高校と地域のネットワーク構築
 - 地域貢献できる人材育成を推進(統合校地域人材育成推進事業)
- 42,810千円
- 4,992千円

(2) 文化・スポーツの振興

- NEW 「大・ゴッホ展」開催へ向けた準備
 - サッカー男子インターハイの固定開催
- 19,000千円

(3) 県有施設の活用促進

- NEW 長期未利用財産の活用促進
 - 県立高校再編空き校舎対策の推進
- 15,000千円
- 5,780千円

2 「学校の在り方の变革」実現戦略

(1) 働き方と勤務の在り方の改革

- NEW 「教職員働き方改革アクションプラン」に基づく取組の推進
 - NEW 県教委から発出する文書を分類し学校現場に送付する文書を半減
 - NEW 課題解決型の業務改善を通じた働き方と勤務の在り方の変革
 - NEW 自動採点システムの導入による学びのデータ蓄積の推進【再掲】
 - NEW 心理学的なアプローチ等を通じた教職員不祥事根絶対策の推進
 - 全公立学校へのスクールサポートスタッフの配置継続
 - 部活動指導員の配置促進
- 1,267千円
- 519,585千円
- 中123人、高86人

(2) 多様性を力に変える学校への变革

- NEW 不登校児童生徒支援センターへのメタバースや探究学習コンテンツの導入
 - NEW (株)LITALICOとの連携による個別支援計画作成等総合的教育ソフトの導入【再掲】
 - NEW 第13回日本アグーナリィ(国内外の障害のあるスカウトの集い)の福島県開催
 - NEW(一部) SSR(サポーター・ルーム)の設置増
 - 個別支援教育コーディネーターの配置と生徒の居場所作り
 - 県立特別支援学校の計画的な整備推進
 - 特別支援教育アドバイザーを特別支援学校地域支援センターに配置
 - NEW ふたば支援学校に双葉地区支援員を配置
 - 入院児童生徒支援員の配置による長期入院中の児童生徒に対する学びの支援体制構築
- 1,166千円
- 24校(R5)→30校
- 7,669千円
- 10人
- 1人
- 2人

3 变革を支える基盤の整備

(1) 学びを支える環境の整備

- 地域学校協働本部事業の推進
 - アウトリーチ型家庭教育支援チーム等による支援体制整備
 - NEW クラウド環境を活用したゼロトラストネットワークの構築【再掲】
 - NEW 計画的な1人1台端末の更新【再掲】
 - 中学校における休日の部活動地域移行に向けた支援
- 175,940千円
- 2,513千円
- 131,790千円

(2) 「福島ならではの教育」を支える教師人材の育成・確保

- 教育プログラムとしての普通科コース制(教育コース)の充実
 - 福島大学と連携した教師人材の養成、採用、研修の強化
- 1,496千円

(3) 学び続ける教師を支える環境整備

- NEW (独)教職員支援機構と連携した「新たな教職員の学び」の構築
 - NEW 学び続ける教師を支える研修プラットフォームの構築
 - NEW 課題解決型の業務改善を通じた働き方と勤務の在り方の変革【再掲】
- 2,000千円
- 4,402千円

第3章 拠点校の研究開発の内容・活動実績

3.1 地域創造と人間生活（高校1年次）

3.1.1 課題を知る学習

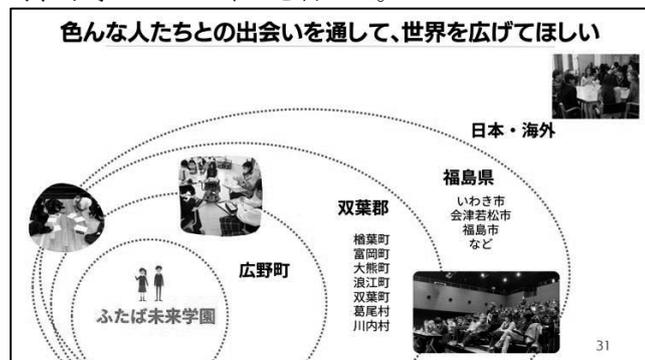
本校の地域創造と人間生活では、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えて在りたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③では海外で実際に活動している方をゲストにお呼びし、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、未来創造探究に繋げてきた。中高一貫の完成年度となった今年は、これまでの取り組みを丁寧に振り返り、演劇と探究の接続を丁寧に行った。

(1) 実施内容

① 地域創造と人間生活 オリエンテーション

日時：4/16（火）

入学者への課題として「自分史」に取り組みせ、オリエンテーションでは「人生グラフ」を作成し、グループ内で自分のこれまでの人生を振り返り、共有した。その後、双葉郡の紹介と共に、本校が設立された経緯や、この授業で身につけてほしい力について言及し、本校の演劇を通じた地域課題学習について、なぜ演劇をやるのか等、丁寧にレクチャーを行った。



② コミュニケーション・ワークショップ

日時：4/11（木）、4/23（火）、5/21（火）

講師：NPO 法人 PAVLIC、わたなべなおこ氏 他

入学後すぐに、クラスの信頼関係作りのためのコミュニケーション・ワークショップを丁寧に実施した。演劇ワークショップ経験者が多いアカデミック系列のクラスと、高入生が多いトップアスリート系列とスペシャリスト系列が混在しているクラスとで、ワークショップのメニューを変えて行った。2、3回目は1学年の学習合宿の中で実施し、自然の中で炊飯を行ったり、共に寝泊まりしたりしながら更にクラスの仲間との親睦を深めた。

③ 双葉郡8町村バスツアー

日時：6/4（火）オリエンテーション

6/14（金）バスツアー（終日）

講師：

1組	双葉町 檜葉町	明石重周 (J-Village) 森山和久 (双葉町役場)
2組	富岡町	青木淑子 (富岡町3.11を語る会) 森崎 陽 (リプルンふくしま) 本校OB
3組	双葉町	宇名根良平・山根光保子 (一般社団法人ふたばプロジェクト)
4組	大熊町	木村紀夫 (大熊未来塾) 増子啓信 (大熊町立学び舎ゆめの森)

5組	浪江町	菅野孝明 (一般社団法人まちづくりなみえ) 網谷信行・玉野真喜 (相馬双葉漁業協同組合)
----	-----	---

行程：

1号車 双葉町・檜葉町

【午前:双葉町】

東日本大震災・原子力災害伝承館 ～ 伝承館バスツアー (請戸小、大平山霊園、双葉駅、双葉町産業交流センター)

【午後:双葉町→檜葉町】

双葉高校見学 (校舎内に入る) ～ 駅西住宅 ～ 南小学校 ～ 双葉高校 J-Village 見学、講話

2号車 富岡町

リプルンふくしま ～ とみおかアーカイブミュージアム ～ さくらモールとみおか ～ 富岡高校見学 ～ 富岡の海 ～ とみおかワインドメヌ (展望台) ～ パリ五輪出場選手 (富岡高校卒業生) を応援する横断幕お披露目式に出席

3号車 双葉町

双葉高校 ～ 双葉駅周辺 (Overalls 壁画アート) ～ 双葉高校 ～ 双葉町産業交流センター (昼食) ～ 東日本大震災・原子力災害伝承館見学 ～ 請戸小 ～ 大平山霊園 ～ 双葉駅

4号車 大熊町

Link る大熊 ～ 新夜の森スクリーニング場 ～ 中間貯蔵施設内視察 ～ 大野駅周辺 ～ 大川原の田んぼにて井関耕平さんのお話を聞く ～ 大熊インキュベーションセンター ～ 大熊町立学び舎ゆめの森

5号車 浪江町

大平山霊園 ～ 請戸小 ～ 棚塩産業団地 ～ 陶芸の杜おぼり ～ 道の駅なみえ (昼食) ～ 請戸漁港 ～ 請戸海岸

概要：

現在の双葉郡を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを毎年実施している。今回は、クラスごとに合計5コースに分かれて、1日かけて双葉郡を回った。事前準備では、このツアーを Futaba Quest (双葉郡でその地にある歴史・文化・価値観を知り、新たな自分に出会う冒険) と名づけ、今回のツアーで自分なりの地域に対する「問い」を持ち帰ってくるように伝えた。トップアスリート・スペシャリスト系列からなる1～3組は、ツアーの中でそれぞれに双葉高校や富岡高校を訪れ、それぞれ元校長先生や卒業生の講師の方々から当時の話やふたば未来への想いを聴く機会を設けた。

本校には、福島県外出身者も多数在籍している。バスツアーやフィールドワークを通して、地域の人々と出会い、対話し、共に時間を過ごすことで少しでも双葉郡に興味・関心を持つきっかけとなればと考えている。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来故郷を初めて訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の故郷を嬉しそうに眺める様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、それぞれに震災後13年という長い年月を感じたようだ。ツアー後、クラスで振り返りを行い、ポスターを作成し、双葉祭で展示した。

1組 双葉町・楡葉町コース

東日本大震災・原子力災害伝承館

自分小さかった頃に起こった出来事だし、東日本に住んでいなかったというのがある震災について全く分かっていなかった。でも伝承館で当時の状況を詳しく知って大変さや復旧までの道のりを改めて知ることができた。

震災のことは少しは知っているつもりだったが、現実を見ると、まだまだ何も知らないことだらけでした。

駅西住宅・双葉南小学校

駅前には建物がたくさん建っており、昔のような活気を取り戻そうと町の人々を見てとても感動しました。

一部が避難解除になっていたけれど、ほどんどが震災当時のままの状態の家が多くてびっくりしました。

大平山公園

震災直後に地元の人からの声で、小学生や先生方が逃げ遅れずに避難することができて良かったなと思いました。ハザードマップから外れているところでも、津波が来ないとは思っていませんでした。

双葉南小学校の校内を見て衝撃を受けました。上履を履いたまま、下履きに履き替える暇もなく必死で逃げたり、黒板に3/11の日付が残っていたり、リアルにすべてが残っていました。

双葉町役場
森山和久さん

ランドセルや靴、教科書などがそのままになっていて、取りに戻らなかった、戻れなかったんだなと思いました。

Jヴィレッジ

明石さんはアルゼンチンのパチストユータなど、とても有名な選手が練習したピッチが復興のための軽トラックになってしまったけれど、そこから前を向いて取り組む姿勢がすごいなと感じました。

あまり人が戻ってきていない。私にできることに制限がかかってしまったと感じた。それでも今双葉町と向き合っている人がいるのに、自分たちが何もできないということはあり得ないと思った。

④ 映画「1/10fukushimaをきいてみる2023」鑑賞 日時：6/25(火)

講師：古波津 陽さん(映画監督) ※オンライン

バスツアーの後に、震災後の福島に関するドキュメンタリー映画を鑑賞した。「1/10Fukushimaをきいてみる」シリーズとして、10年間映画を作り続けてきた古波津監督の作品を鑑賞し、観賞後にオンラインにてアフタートークを行った。バスツアーでお世話になった方も映画の中でインタビューを受けており、地域の方々の想いに対する生徒の理解がより深まった。また、映画と演劇は同じ「表現」であるという視点から、これから演劇創作に入ろうとしている生徒たちに古波津さんから激励とアドバイスをいただいた。

⑤ 演劇班取材 日時：7/9(火)

講師：3.1.2 演劇のページに記載

クラスごとに演劇のための取材を行った。生徒たちは事

前に調べ学習を行い、新聞記事などで取材相手の情報を得た上で取材に臨んだ。各クラスの演劇ワークショップ講師が司会となり、対談形式のインタビューを行うことで、リラックスした雰囲気を作りながら取材を行うことができた。



⑥ プチ探究

夏休み明けから始まる未来創造探究に向けて、そのトレーニングとして演劇創作と並行して、プチ探究を実施した。まずは探究のサイクルを体験してもらうため、自分の「気になるもの」を決めて、何かしらアクションをして、結果を振り返り提出するという課題を出した。1回目は6月に実施し、2回目は夏休みの宿題として実施した。テーマは自由とし、動画とGoogle Formによる提出とした。夏休み明けには表彰式を実施した。

- ◆ベストパッション賞
 - 「スニーカークリーニングしてみた」
 - 「今住みたい家を設計して3D化してみた」
- ◆ベストクリエイター賞
 - 「食べ友GET だけ」
 - 「イカしたよく飛ぶ紙飛行機」
 - 「子ども食堂について探究して、チラシをデザインしてみた！」
- ◆ベストラーニング賞
 - 「パティシエを真似て、マカロンを作ってみた！」
 - 「美しくハモりたい！」
 - 「バズる方法とは」
 - 「〇×ゲーム 何×何マスが面白くなる？」
- ◆ベSTRリサーチ賞
 - 「自分だけのメイクを見つけよう計画」
 - 「英単語覚えてみた」
 - 「人狼で勝てるようになるためには」
- ◆ファーストペンギン賞
 - 「昔のゲームについて調べてみた！」

(2) 成果

双葉郡バスツアーをクラスごとでの活動としたことで、8町村全てをまわることはできなかったが、ツアーを通してクラスの親睦を深めることができ、クラス内の心理的安全性が高まったという意味では成功と言える。その成果もあり、プチ探究ではこれまで以上に自由で個性的な探究を見ることができ、生徒たちの興味・関心を知ることができた。

(3) 課題と展望

生徒たちそれぞれがこの地で学ぶ意義を考える上で、内進生と高入生、郡内出身者とそうでない生徒等、それぞれの背景に配慮して生徒たちの中学までの学びの特性に合わせた授業内容の工夫が必要である。引き続きそれぞれの地域の方々にご協力いただきながらより深い学びとなるようプログラムを設計していきたい。

3. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒は演劇を通して発見した地域の課題や学びを、その後展開される未来創造探究（探究活動）を通じて探究することになる。

今年度は演劇プログラムも10年目を迎え、「演劇教育シンポジウム」を開催し、これまでの本校での取り組みを振り返った。

(1) 目的

- ① 演劇ワークショップを通して、多様な価値観を持つ他者と意見の違いを乗り越えて合意形成を図るトレーニングを行う。
- ② 地域やクラスの様々な立場の声に耳を傾け、震災と原発事故の教訓、双葉郡・福島県ならではの課題を演劇にする。また、その課程において物事を多面的に分析する力を身につける。
- ③ 地域の課題から対話劇をつくり、それを地域の方と観劇し、対話をすることで、地域に対する興味・関心を育て、その後の未来創造探究につなげる。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	7月9日(火)	5・6	取材	○
2	7月10日(水)	終日	演劇創作①(終日)	○
3	7月17日(水)	午前中	演劇創作②	○
4	7月18日(木)	午前中	演劇創作③	○
5	7月19日(金)	終日	演劇成果発表会	○
6	7月31日(水)		ふくしま演劇教育シンポジウムでの代表発表	○
7	夏休み		プチ探究	
8	8月27日(火)	5・6	演劇振り返り/リッチピクチャー作成	
9	9月3日(火)	5・6	プチ探究表彰/リッチピクチャー共有会	
10	9月13日(金)	LHR	哲学対話①	○
11	9月17日(火)	5・6	哲学対話②	○
12	9月24日(火)	5・6	探究オリエンテーション	

(3) 講師

【演劇ワークショップ・演劇創作および講評】

平田オリザ(青年団主宰 劇作家・演出家)

わたなべなおこ(劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)

森内美由紀(俳優)、宮崎悠理(俳優)、河野悟(俳優)

植浦菜保子(俳優)、村田牧子(俳優)、館そらみ(脚本家・演出家)

北村耕治(俳優)、菊池佳南(俳優)、榎原毅(俳優)

小林真梨恵(俳優、ダンサー)

【哲学対話】

後藤美乃里、志水太樹、川向思季、朝倉絵理子、浅野萌、尾崎絢子

(4) 対象生徒

1学年生徒160名 25班編成

(5) 授業内容(抜粋)

演劇創作(7月)

今年度は、内進生と高入生それぞれの特性に合わせて、クラスごとの班編成と演劇創作の工夫を試みた。内進生の多いアカデミック系列のクラスは、中学で演劇に慣れているため、探究的な学びに必要な「論理的思考力」「批判的思考力」を意識した作品づくりを行った。一方で高入生が多く、演劇を作ること自体が初めてとなるス

ペシャリスト・トップアスリート系列のクラスでは、少しでも発表に対するハードルが下がるように、生徒たちの心理的安全性を大切に、まずは班ごとに協力すること、表現を楽しむことをゴールとした。

演劇成果発表会(7/19)

本校みらいシアターにて成果発表会を行った。担任教員によるオープニング芝居に客席が大いに盛り上がった

後、全員が全ての作品を鑑賞した。取材にご協力いただいた方々と、演劇のタイトルは以下の通りである。

タイトル	取材者(取材先)
1-1・3班「たたく物を干すまで」	花井理奈さん (東京電力㈱東本社)
1-1・5班「伝説」	
1-2・1班「伝説続ける、次の世代へ」	西山栄子さん
1-2・2班「西山さんと福助」	
1-3・1班「運命の出会いへつと人編へ」	網谷信行さん/玉野真高さん (群馬双葉産業㈱組合)
1-1・1班「まごころの仕事」	花井理奈さん (東京電力㈱東本社)
1-1・2班「昔の自分と今の自分」	
1-1・4班「海乳」	宗像さん (演劇3.1.1を語る会)
1-2・3班「宗像賢治編話」	
1-2・4班「宗像さんの今と過去」	熊川裕吉さん (東日本大震災・原子力災害伝承館)
1-2・5班「熊川さんのボランティア」	
1-3・2班「まさの海乳」	網谷信行さん/玉野真高さん (群馬双葉産業㈱組合)
1-3・4班「網谷さんの海乳」	
1-3・3班「3.11 あがきで」	
1-3・5班「こけら」	
お遊戯	
1-4・1班「それでも前へ」	木村由美さん (大無未来塾)
1-4・2班「差別と希望」	藤岡 翼さん (大無未来塾)
1-4・3班「楽しく生きる」	武内 優さん
1-4・4班「届けるキウイ」	阿部真太郎さん
1-4・5班「アスの生き方」	井原祥平さん
1-5・1班「船魂の影響力」	木野正登さん (後援者) 富川泰介さん (東京電力㈱東本社)
1-5・2班「知の魂」	
1-5・3班「橋を建てる船客を乗り越える」	
1-5・4班「東電の歩み」	
1-5・5班「避難」	
閉会式 表彰・記念撮影	

生徒ならではの瑞々しい視点で描かれた作品もあり、時には笑いが起きたり、息を呑むほど芝居に集中したりしながら、あっという間に25作品を発表・観劇し終えることができた。演劇を通して、全てにおいて単純な悪者などはおらず、あくまで各々がそれぞれの立場で物事を見て誰かを想って動いて、それが噛み合ったりすれ違ったりするために対立が起きてしまうのだということを学ぶことができた。そのことに気づくよう、生徒たちの創作に丁寧に向き合ってくださった講師陣の力は大きい。

今年度も、取材にご協力いただいた多くの方が本番を観にきてくださり、丁寧なフィードバックをいただいた。さらに客席では生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、地域の方々同士の対話が生まれる場面もあった。

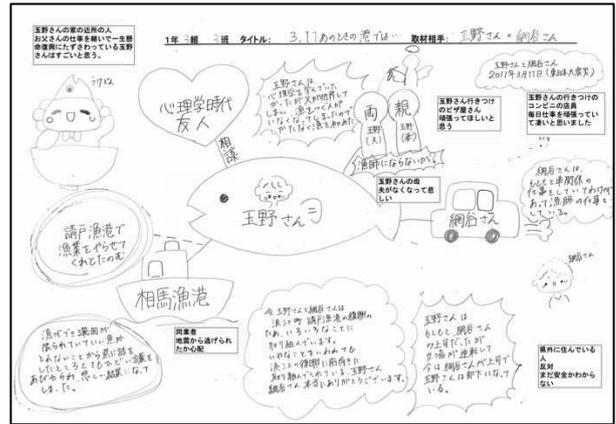


哲学対話とリッチピクチャー作成

夏休み明けに改めて、「リッチピクチャー (右上図)」の手法を用いて自分たちが作った演劇を構造的に分析した。更に、より内容を整理するために、演劇では描ききれなかった部分の情報を補足させた。翌週に共有会を行い、自分たちの演劇を構造化し他の班に発表した。

また、哲学対話を通して演劇プログラム全体のリフレクションを行った。少人数のグループで哲学対話を行うことにより、話しやすい雰囲気の中で演劇プログラムを通して感じたことを言語化し、振り返ることができた。演劇プログラムの1つ1つに取り組む中で、慌ただしく過ぎてしまっていた「なぜ？」という問いを、過ぎた

後にもう一度取り出し、丁寧に扱い、皆でじっくり考える時間となった。



(3組3班のリッチピクチャー)

ふくしま演劇教育シンポジウム (7/31)

本校設立当初から続く演劇の取り組みを振り返り、ゲストに平田オリザ氏、大熊町立学び舎ゆめの森校長の南郷市兵氏、NPO 法人 PAVLIC のわたなべなおお氏をお迎えして「ふくしま演劇教育シンポジウム」を開催した。

本校の演劇を用いた教育の取り組みについて、今年度のプログラムを振り返り、生徒の代表作品をいくつか披露し、平田氏による講評の様子をご覧いただき、その後は基調講演として「これからの復興における演劇教育の役割」について平田氏にお話しいただいた。

続いて、ゲストと本校演劇教員による座談会を行い、県内の演劇教育の重要性について意見を交わした。県内外から多くの観覧者が訪れ、シンポジウムは大盛況となった。



(6) 振り返りと評価

「地域課題を演劇にする」という一見固くなりがちなテーマにも、演劇の良さである「フィクション」を軽やかに取り入れ、自分たちの表現に昇華できていた。

演劇は、舞台に立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成り立たないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は今後の未来創造探究でも活かされるだろう。

(7) 次年度実施への課題

内進生と高入生それぞれに質の高い学びとなるよう、演劇創作までの過程も含めてプログラム内容をよりクラスごとに個別最適なものにしていくことが、相互のより深い学びに繋がると考える。演劇を通して他者の人生に触れ、そこでの学びが探究に有機的に繋がっていくよう、次年度に向けてプログラムの内容や流れを更新していく。

3. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、自分史や人生グラフを作成し、共有することで自己理解と他者理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる(Global Citizenship Education)。今年度は授業外でも海外との交流が盛んに行われた。

(1) 米国高校生との交流(スペシャリスト系列)

① 期間 令和6年9月～令和7年2月

GLOBAL CLASSMATE(BY KIZUNA ACROSS CULTURES)に採択され、高校1年次スペシャリスト系列の生徒33名が、アメリカのカリフォルニア州にある Alhambra High School の生徒たちと半年間オンラインによる交流を行った。CANVAS というオンラインのプラットフォームを使い、2週間ごとにトピックを作成し、そのテーマについて日本語と英語で意見交換を行った。omiyage exchange として、お互いにお菓子などを送り合うプロジェクトでは、パートナーに手紙とプレゼントを用意して、箱に詰める様子や、届いたプレゼントを開ける様子をビデオにして送り合った。



(2) イスラエルの高校生との交流

① 日時 令和6年8月2日(金)

2023年10月7日のハマスによる攻撃により被害を受けた、イスラエル南部ノフェイハブソール高校の生徒15人と先生3人が来校、交流した。

イスラエルとパレスチナにはハマスによる攻撃以前に長い占領の歴史がある。世間のイスラエル政府への怒りも強く、世界各地でデモが起こっている。そのことも事前に学んだ上で彼らの訪問を受け入れ、対話や交流を行った。震災・原発事故は全く違うものだが、家族を亡くした悲しみ、コミュニティの分断、賠償金等、共通点も多くあった。中でも国内で政府から市民に情報がもたらされないことによる「怒り」があるという声を聞いた。生徒たちはすぐに打ち解け、交流を楽しんだ一方で、彼らが数年後は兵役となり戦場に行くという事実を受け止めた。世界で起きている出来事を身近に感じることができきっかけとなったと共に、日本で報道されているニュースだけでなく、英語による一次情報にアクセスして物事を客観的かつ批判的に見ることの大切さを学んだ。



(3) ASEAN の高校生との交流

① 日時 令和6年10月30日(水)

一般財団法人日本国際協力センター(JICE)の主催で、外務省が推進する「対日理解促進交流プログラム JENESYS」の一環として、スポーツを通じたSDGsへの貢献や社会問題解決に関心を持つASEAN諸国と東ティモールの高校生11か国総勢110名が本校を訪問し、交流を行った。

1年生の有志でウェルカムセレモニーを担当し、その後クラスに移動して日本の学校文化の体験として清掃と一緒にいった。清掃終了後にはそれぞれの授業を体験し、身振り・手振りを交えながら互いに積極的な交流が行われた。生徒たちは世界の多様性を間近に感じることができ、言語、文化、価値観などそれぞれ違っていることに驚くとともに、国際協調の大切さを学んだ。



(4) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会

① 日時 令和7年1月21日(火) 6、7校時

イラク支援ボランティア、エイドワーカーとして取り組んでいる高遠菜穂子氏に講話いただいた。

この日は、イラクのドホークとをオンラインで繋ぎ、『戦争の与える影響～人々の体と心に残る傷(トラウマ)～』をテーマに、世界の難民問題と日本、戦争が与える影響(破壊と、身体的・心的トラウマ)、兵士のトラウマ、戦後の課題(紛争予防と元子ども兵の社会復帰)などについて、日本では知ることのできない紛争地域の状況が分かる写真・映像と共に説明を受けた。

市民だけでなく兵士のトラウマも大きな問題になっている。「兵士のトラウマは、軍の名誉とされる行為が良心と折り合いがつかないことで生じてくるのだ。」という言葉は、どうしても戦争の被害者側に目が向いてしまう生徒たちには新しい視点として深く心に残ったようである。講演後も質問が相次ぎ、「初めて戦争を自分ごととして考えることができた」「自分たちが出来ることは何か」という問いに辿りついた生徒も多くいたようである。



(5) まとめと今後の展望

多くの国際交流の機会を得て、生徒が世界を少しでも身近に感じるきっかけを作ることができたことは大きい。震災後に私たちが感じた地域の課題を、世界の課題に繋げて考えることができるよう、今後の学びに繋げたい。

3. 1. 4 探究との接続・キャリア教育

前年度より、1年次前半を演劇教育に充て、後半から探究活動を段階的にスタートする方針を取っており、1年次前期火曜の6・7校時と夏季休業期間中の授業を「地域創造と人間生活」、後期の火曜の6・7校時を「総合的な探究の時間」としている。本節では、生徒が探究活動のテーマ・内容を考えるだけでなく、あらゆる挑戦がしやすいような環境づくりを目指して実施した活動やイベントの内容を記載する。

(1) はじめに

併設中学校からの内部進学生（一貫生）と他の学校から本校に進学した生徒（高入生）が入り混じる本校において、探究活動を足並み揃えて実施していくことは困難を極める。特に高入生を中心になかなかテーマが決まらなかったり活動の方針が立たなかったりする生徒が一定数いる。探究活動は多くの場合各個人・少人数グループで行うことになるため、学校側で可能な限りのサポートや、失敗を恐れずに挑戦できるような環境づくりを行い、これまでの活動や経験が探究活動に結び付くようにすることが重要である。

(2) 実施内容

プチ探究（夏休み頃から定期的に実施）

演劇活動終了後、長期休暇時の宿題として生徒に示した「プチ探究」は、テーマを自由に設定して調査や活動を行うものとし、探究活動の練習のような位置づけで年に3回ほど実施した。年間を通して、探究活動で使用する活動ワークシートも同じようなフォーマットに仕上がっており、生徒が活動のやり方に徐々に慣れるような仕組みである。

マイキーワード設定（2024/10～）

主に探究活動のテーマがはっきり決まっていない生徒を対象に、マインドマップやマンダラートを用いて、自分の関心があるキーワード探しのワークショップを実施した。

データサイエンス講座（2024/11/12）

探究活動においてデータを用いて問い（仮説）の設定や考察を行う場面が多いことを踏まえ、学年全体で実施。系列を越えたグループを編成し、架空のテーマパークの売り上げを上げるため、用意されたデータを用いて話し合い、考察した。※(株)アクセンチュア様主導の企画

しくじり先生（2024/11/19）

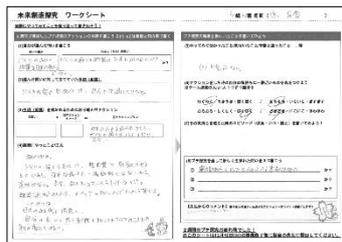
生徒が学校生活におけるあらゆる活動に失敗を恐れずチャレンジできるような環境づくりを目指して、担任を含む教職員やカタリバスタッフが自身の人生のしくじりを生徒に向けて語るイベントを開催した。

ヒューマンライブラリー（2024/12/10）

様々な分野で活躍する地域の方々をお招きし、自らの生き方や仕事の内容について語っていただき、生徒が自分の人生について考えるキャリア教育の一環として実施した。探究活動の振り返りを兼ねている。*2

カタリバによる支援（4月～）

演劇活動を進めながら今後の探究活動やテーマ設定について生徒に示す中で、カタリバのスタッフが早いうちから準備ができるようにワークショップや面談を設定し、生徒が自分自身の事や活動内容を考えるきっかけを与えてくれた。主に高入生を中心に多く活用されており、年間を通してサポートを継続している



*1 未来創造探究ワークシート



*2 ヒューマンライブラリー

(3) 成果と課題

夏季休業明けに演劇活動の振り返りを行い、9月末には探究活動のオリエンテーションをするが、上記の取り組みをする中で、おおむね12月の冬季休業前にはほぼすべての生徒がマイキーワードを設定し、いくつかのアクションを実施することができている状況である。

活動が生徒の中で閉じているのではなく、「しくじり先生」「ヒューマンライブラリー」等の活動を通して教員や地域の大人たちと交流する機会が豊富に設定されていることで、探究を多様な人と関わりながら進めていくという意識が生徒に根付くことも一つの成果と言える。

東日本大震災の記憶がほとんどない世代になっていく中で、ふたば未来学園における探究活動がどのような位置づけになっていくかが今後は重要である。加えて、キーワードやテーマの多様化で教員やスタッフ側のサポートが複雑化していること、進路への活用、これまでの先輩や卒業生の活動内容が次の世代にどのように引き継がれていくか、等の課題が残る。

3. 2 未来創造探究（高校2年次）

3. 2. 1 未来創造探究2年の概要

本校2年次の「総合的な探究の時間」（3単位）では、このうち週2時間を「未来創造探究」のコアタイムとして、探究活動の計画・実践・振り返りを行った。生徒は自らの興味関心に従い、「原子力災害・伝承探究ゼミ」、「共生社会探究ゼミ」、「地域社会・経済探究ゼミ」、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」、「自然科学・地球環境探究ゼミ」、「スポーツ医・科学探究ゼミ」のいずれかに所属し、教員の指導・助言を受けながら、探究活動を推進した。本節では、全体プログラムとして実施した内容のうち、主だったものについて報告する。

（1）はじめに

今年度、高校2年次では、「総合的な探究の時間」（3単位）のうち、主に火曜日の6、7校時を、生徒が探究活動を個人またはグループで推進する「未来創造探究」として設定した。生徒は、自らの興味関心に従い、「原子力災害・伝承探究ゼミ」、「共生社会探究ゼミ」、「地域社会・経済探究ゼミ」、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」、「自然科学・地球環境探究ゼミ」、「スポーツ医・科学探究ゼミ」のいずれかに所属し、各ゼミに複数いる担当教員の指導・助言を受けながら、探究活動を行った。

（2）実施内容

○専門知講義の実施（5月～6月）

探究を始めるにあたって、まず重視したのが基本的な知識と探究スキルの習得である。そこで、今年度はこの期間を「専門知講義」（大学教員等、外部専門家による講演会・ワークショップ）期間に設定し、各ゼミでの実施を推進した。結果、この時期には4つのゼミで、年間を通してはすべてのゼミで、専門知講義を実施できた。

○「探究×小論文」講座（9月）

7月にはゼミ内での探究活動報告会を実施し、各ゼミでの共通の課題として、先行研究の参照不足が挙げられた。そこで、情報収集スキルの向上をねらいとして、新書の要約版（学研小論文ブックポート）を読む形式で、「探究×小論文」講座を実施した。

○島根県立横田高等学校との探究学習交流（10月）

島根県立横田高等学校2学年生徒70名が来校し、本校2学年生徒20名と互いの探究について発表しあう交流会を実施した。両校・両地域が抱える問題・課題の違いや共通性について、生徒間で議論する様子が見られた。

○中間発表会（10月）

今年度の中間発表会は、自身の興味・関心を広げることと、他者との協働性を高めることをねらいとして、生

徒運営・ゼミ横断型で中間発表を実施した。また、発表の感想や気づきをインタビュー形式で振り返りをさせ、メタ認知能力の向上を促した。

○ルーブリック面談（12月）

生徒のルーブリック評価（自己評価）をもとにした面談を実施した。生徒の自己評価の理由や探究に対するモチベーションについてのヒアリングを行った。

○教員間でのミーティング（通年）

今年度は5回の全担当者ミーティングを行い、カリキュラム設計や各ゼミの活動状況の情報共有を行った。

また、担当教員でのミーティングを定例で実施しているゼミも多く、生徒の探究の進捗状況の情報共有や、ゼミ内での学習プログラムの開発・協議が盛んに行われた（図1）。



図1 教員ミーティングの様子

（3）成果

外部講師とのかかわりや学校交流、中間発表での他系列・他ゼミ生徒との協働によって、他者との協働性やメタ認知能力が高まったと考えられる。

また、定期的に教員ミーティングを実施することによって、生徒の困り感にチームで対応でき、よりよい探究スキル開発プログラムの実施につながったと考えられる。

（4）課題と展望

生徒の内省を促すツールは充実してきているものの、探究自体の質を高めさせる教職員のノウハウをどう蓄積していくか継続して検討していく必要がある。また、地域課題解決型だけではなく、調査・研究型の探究活動も増えており、そういった活動に対する適切な指導・評価方法についても今後検討していく必要がある。

3. 2. 2 原子力災害・伝承探究ゼミ

本ゼミは、福島原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究することを主な目的として活動している。所属する生徒は、処理水の海洋放出、事故後の避難により分断された地域コミュニティの再生、震災の記録・記憶の伝承等の課題に取り組んでいる。

(1) はじめに

7名（男子5名、女子2名）の生徒が在籍し、各自の設定したテーマに沿って、調査や課題解決のためのアクションを起こしてきた。

(2) 実施内容

各自が設定したテーマに基づき、インタビューやアンケート等の実態調査、文献調査等を行ったのち、判明した事実等をもとに、課題解決のための方策を具体的に考え、実践に移してきた。以下には各生徒の探究テーマ及び問題意識・実践を記す。

1. 「いったい何がどうなったら『復興』なんだろう？」

復興という言葉をよく耳にするが、何がどうなれば復興で、誰のためのもので、いつ終わるのだろうか？という疑問を出発点に探究を始めた。復興という言葉が使われていることにも危機を感じている。「復興とは街づくりのプロセスである」という仮説を立てたが、「住民」の定義について考えた際、既存の対話イベントなどではジェンダーバランスを欠いていることに気づき、女性メインの対話会を開いてみたいと考えた。フランスとの交流事業等で英語発表。NHK「被災地からの声 つぎの一步」に出演。

2. 「原子力の正しい知識を広めるにはどうすればよいか」

処理水の海洋放出の際にSNSが荒れたことを受け、原子力の知識を広めるにはどうすればよいか探究している。12月に六ヶ所村を訪問し、原子力に関する知識を深めた。

3. 「紙芝居を通じて原発事故被害を伝承する」

昨年度からNPO法人「富岡町 3.11 を語る会」と協力し、各地で震災と原発事故の体験や教訓を後世に伝える「語り部キャラバン」活動を行っている。紙芝居を用いた伝承活動で、一時は「被災していない自分が紙芝居をしていいのか」と悩んだが、若い世代の自分たちがやること自体に意味があるのだというアドバイスを受け、各地でイベントを行っている。8月あさか開成高校と合同

イベント、9月富岡町でのイベント&合宿、10月山形での発表、11月にはNHKより取材を受けた（写真）。



4. 「半谷清寿『将来の東北』についての探究」

富岡町の桜並木を作ったことでも知られる、福島県小高郷（現・南相馬市）生まれの半谷清寿氏が1906年に書いた『将来の東北』を中学時代に読んで感銘を受けた。120年前の問題意識が現代の東北を語る上でも有用であると考えたものの、原著は難解な言葉もありわかりづらい。そこで『将来の東北』の「わかりやすい版」の冊子を製作した。B4で28ページ、約60部印刷し、12月に郡山のイベントなどで頒布した（写真）。



5. 「どうして他県の学生は双葉郡に学びに来るのか？」

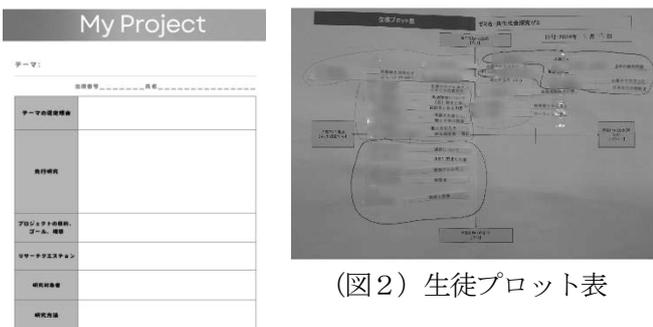
社会起業部の部長として、双葉郡に学びに来る学生との交流をするうちに、「双葉郡がもつ教育力」をテーマに探究しようと考えた。他県の学生を迎える側としてのマインドだけでなく、学校や社会起業部での広島・水俣・沖縄・栃木研修を通じて、問題を抱えた地を訪問する側の立場でも、双葉郡について考えることができた。実際に足を運ぶことで、分かりやすく表面化した問題だけでなく、その土地その土地の豊かな面があることに気づくことができた。しかし一方で、無自覚に享受していた恩恵の背後に他者の犠牲があることに気づくことは、「知る」「学ぶ」ことに覚悟が求められることだと考えるようになった。

3. 2. 2 共生社会探究ゼミ

共生社会探究ゼミでは、地域に暮らすこと、人と人との関係性や、ウェルネス（健康・福祉・医療にとどまらない社会的環境の豊かさ）について探究している。対立や分断を超えて多様性を認め合う包摂的な共生社会の実現や、市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立、豊かなコミュニティの実現などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う生徒が選択している。本年度はアカデミック系列23名、スペシャリスト系列2名（福祉2名）、トップアスリート系列5名（野球1名、サッカー3名、JFA1名）の計30名の生徒が所属しており、全28プロジェクトが進行している。

(1) はじめに

9期生は探究学習プログラムを1年次から行っており、各自の探究テーマの方向性がすでに決まっている生徒が多数であった。また、共生社会探究ゼミは所属人数に伴いプロジェクト数も多いため、本年度のゼミ担当教員が生徒を伴走しやすくするために、年度始めに生徒の探究内容の把握とグループ分けを行った。My Projectシートと生徒との面談をもとに、各探究の内容と進捗状況を分析し、プロット表にまとめ、担当教員を決定した。



(図1) My Project シート

さらに、生徒が見通しをもって活動できるように、年間計画に合わせた各自のアクション計画を立てさせ、活動後に振り返りをする時間を設定した。また、週に1回ゼミ担当教員でミーティングを行い、各生徒の進捗状況の共有や今後の活動方針等を話し合う時間を設定した。

(2) 実施内容

4月～5月は、生徒は各自計画に沿って調査研究や課題解決のためのアクションを実施した。本ゼミにはアンケート調査の実施を計画している生徒が多かったため、福島大学教育推進機構にご協力いただき、6月にアンケート調査に関する専門知講義を実施した。この講義での学びを活かしてアンケートを作成し、文化祭にて地域の方へ向けた調査を実施した生徒も見られた。



(図3) 専門知講義1



(図4) 専門知講義2

夏季休業明けにはゼミ内報告会を実施し、それまでの探究活動の成果を発表した。「テーマ設定の理由」や「自分自身の変化や学び」といった内容を含む報告会のため、プロジェクトごとではなく、生徒一人一人にスライドを作成させて発表させた。



(図5) ゼミ内報告会

10月に行われた2年次全体の中間発表会后、担当教員と生徒の間で、ルーブリックやプロジェクトまとめシートを活用した面談を行い、探究の進め方や自身の変化、社会とのかかわり方についての考えを深めた。

(3) 成果

ゼミミーティングにて生徒の状況を全担当教員で共有できたため、担当外の生徒への指導もしやすく、一人一人に合った伴走をすることができた。

(4) 課題と展望

ゼミ内報告会にて、生徒の質疑応答が見られなかったことが課題として挙げられる。生徒が安心して話せる環境や仕掛けを作り、生徒同士の学び合いの場を作りたい。

3. 2. 2 地域社会・経済産業探究ゼミ

(1) はじめに

東日本大震災による原発事故で断絶してしまった地域コミュニティの再構築について、農商工業などの産業振興や社会システム（仕組み）の観点から、地域の農林水産資源を活用した6次化産業化等による新たな価値の創造や、イノベーション、循環型社会・経済システムの実現などについて課題を設定し、その課題解決に向けて探究を行っているゼミである。

(2) 実施内容

インターネットや図書館を利用した調査、フィールド調査や有識者への訪問活動等の実践活動、生徒・職員を含めたアンケート等を行い、探究を進めている。

教員4名で生徒15名の探究の進捗状況を把握し、活動をサポートしている。

〈生徒の探求活動例〉

・「SNSで地域発信！」

本校がある広野町について、町の景色や特産品写真や動画を編集し、SNS（Instagramなど）を活用して、多くの方々に知ってもらおう活動を実践。

・「アイスを通じて地元の食材を知ってもらおう」

双葉郡檜葉町にあるアイス屋さんに訪問し、広野町の特産品を利用したジェラートの開発や商品開発時に大切にしていることなどインタビューを行い情報発信していく。

・「大熊の梨復活！大作戦」

震災・原発事故前は大熊町で盛んだった梨栽培を復活させたいと考え、過去に大熊町で梨農家を営んでいた方とコンタクトを取り、栽培についてのノウハウを伺いながら新商品の開発に向けた提案をしながら取り組んでいる。

・「食事パンの可能性」

双葉郡の特産品を利用したパン製品を開発したいと考え、実際に授業で学んだ知識で自らパン生地を調整し、ホットドッグの製造・販売を行った。今後は、双葉郡の特産品を使用したパンを製造する予定である。

・「演劇×発信 ～双葉郡の今を伝承していく～」

紙芝居を活用し、震災の経験を伝承する活動を展開している。12月21、22日に行われた富岡演劇祭では、紙芝居を披露し多くの方々に紙芝居を見ていただいた。

福島大学 専門知講義を実施。「地域連携・まちづくり・高校生の社会参画」をテーマに福島大学共生システム理工学類教授 川崎興太先生より講義をしていただいた。



(川崎興太先生から講義の様子)

(3) 成果

自身の設定したテーマに対してアクションを積み重ねてきた結果、課題の克服につながる成果を見出すことができた生徒もいた。そこまで行きつかなかなくても順調に検証を重ね、異なる視点の課題を発見できたという状況でもある。

(4) 課題と展望

本ゼミでは探究の「テーマ」や「やりたいこと」の方向性が定まっている生徒と、定まっていない生徒の差が大きく、2年次の中間発表後もテーマを変更する生徒が複数いた。またテーマ決定後に外部団体と連携が取れず、思うように進行できない生徒もいた。

ゼミ担当の教職員と話し合い、テーマの多面的な視点補足やアクションを促し、今後も積極的に活動を行えるようサポートしたいと考えている。



(ゼミ内中間発表の様子)

3. 2. 2 人間科学・文化・芸術探究ゼミ

令和5年度よりゼミ編成が行われ、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」という新しいゼミが作られた。主に人間の心理・行動の分析や、人間が生み出す芸術・アートを生かした社会のあり方について探究する。差別・偏見のメカニズムの解明や、芸術・アートを生かしたウェルビーイングを追求するコミュニティの実現、地域の文化財や伝統芸能などによる地域のアイデンティティの確立などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

(1) はじめに

高校9期生は、新課程カリキュラムへの移行期間ということもあり高校1年次から未来創造探究を進め、例年より進捗が早い(中学校2期生はふたば未来中学校での総合的な学習の授業「未来創造学」において同様の探究学習をしている)。基本的には高校1年次に決めたテーマに沿って生徒が調査・実践を行い、それを教員が個々にフォローする体制が取られた。

(2) 実施内容

① 応用倫理学×哲学対話

ふたば未来学園中学校の授業の一つである哲学対話をさらに発展させ、系列の異なる生徒同士でも気軽に話せる場を作るにはどうしたらいいか。

② 10代が暮らしやすい社会へ

10代の思春期の中高生の悩みに寄り添い、一人でも多くその悩みを解決するには何ができるか。

③ 情報をデザインする視覚心理学

色彩が人々に及ぼす心理的影響について分析し、それらを活用して精神的な豊かさを向上させるためにはどのような方法があるか。

④ デッサンアートと社会へのメッセージ

デッサンアートのスキルを活用し、社会が抱える様々な問題に対するメッセージを発信するには。(写真1)

⑤ ジャイアン×音響学

ジャイアンの歌声が人々にどのような心理的影響を及ぼすのか、音響学の視点から分析し、解明していく。

⑥ スイーツの魅力

双葉郡のフルーツを使用したマカロンを製作販売し、地元の魅力を広めるためには。(写真2)

⑦ ネイルアートで日常に輝きを

日々忙しく走り回る女性もおしゃれを楽しめるように、自身がデザインしたネイルアートを提供すれば日々の生活にきらめきが生まれるのではないか。

⑧ 教育格差のない社会を

近年ますます発展している地域の教育格差。その原因を追究し、それらをなくすためにどのような方法があるか。

⑨ おさんぽコースで魅力発見

地域のおすすめコースを歩いて動画編集をし、復興への一端を担うことにつなげたい。

⑩ コミュ障改善プロジェクト

コミュニケーション力に自信がなくとも、現代の推し活コミュニティの場に参加することで改善できるのではないか。

⑪ 自己覚知の重要性

自分自身の事を客観的に分らず、心理的に苦しんでいる人たちを救うにはどうしたらいいのか。

⑫ 個人と共同体について

自己承認欲求と向き合い、よりよい生き方をするには。(写真3)

⑬ 読書と向上心の関係性

読書離れが多い状況の中、読書の有用性を広め読書離れを防ぐためにはどのような方法があるか。

⑭ 伝統芸能を守り、存続するために

相馬野馬追の参加者を増やし、現代の子供たちへ伝え継いでいくにはどのような方法があるか。

⑮ 演劇の魅力と発信

演劇の魅力を高めその良さを地域に広めるために、自身ができることは何か。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

(3) 成果

専門的な文献を調べたり、外部講師の講義を受講したりするだけでなく、それらを自身の探究にどのように生かすことができるか模索を続けたことにより、知識・技能や思考力・表現力を向上させる生徒が増えた。また、探究のテーマを今後の進路につなげ、自身を見つめる時間となったことも一つの成果である。

(4) 課題と展望

人間の心理的な動きや芸術などの目に見えない価値あるものについて、考察したことを文章として表現するのは難しいことであると感じた。今後は生徒一人ひとりと一層の対話を深め、生徒が感じたり考えたりしたことを自分なりの言葉で表現することができるよう、探究ゴールに向けてきめ細かな支援の方法について工夫していきたい。

3. 2. 2 自然科学・地球環境探究ゼミ

今年度高2自然科学・地球環境探究ゼミは、生徒9名、伴走スタッフ4名（教員3名、カタリバスタッフ1名）での実施となった。前期は専門書などの読書会やフィールドワーク、野外巡検などを通して、基本的な探究スキルの向上を図った。後期は生徒ごとに探究活動を推進し、その過程で専門機関や事業所を視察したり、外部専門家と共同研究を行ったりするなど、校外でも積極的に活動する生徒が増え、主体性や協働性、専門性が向上したものと考えられる。

(1) はじめに

今年度の高2自然科学・地球環境探究ゼミは、生徒9名、伴走スタッフ4名（教員3名、カタリバスタッフ1名）での実施となった。前期には、基本的な調査・研究を行うためのスキルトレーニング講座を、各自の探究活動にかかわらずゼミ全体で実施した。

(2) 実施内容

①読書会（専門知講義として実施）

5月14日と9月17日の計2回、国立環境研究所の辻岳史氏を講師として、全員が課題図書を事前に読み、学んだことやそれに対する意見を共有するワークショップを実施した。課題図書は下記のとおりである。

第1回 松岡俊二著「未来へつなぐ災害対策 科学と政治と社会の協働のために」第4章（有斐閣）

第2回 トーマス・S・マラニー著「リサーチのはじめかた」第1部（筑摩書房）

②檜葉コミュニティセンターフィールドワーク

5月28日、全ゼミ生徒で檜葉町コミュニティセンターを訪問し、施設見学と化石のスケッチ講座を実施した。化石の選定は、東京大学総合博物館准教授佐々木猛智氏に依頼した。

③バイオ実験セミナー

8月20日～21日の2日間、福島工業高等専門学校にて、希望生徒を対象にバイオ実験セミナーを実施した。福島工業高等専門学校化学・バイオ工学科教授の内田修司氏、准教授の十亀陽一郎氏の指導のもと、酵母と細菌のDNA抽出とシーケンス解析を実施した。シーケンス結果の考察は8月26日にオンライン講座形式で実施した。

本ゼミ所属の生徒の探究活動は次のとおりである。
「ハダカカメガイの摂餌行動および成長過程の研究」（環境水族館アクアマリンふくしまとの共同研究）
「広野町の化石～浅見川と北迫川で見られる化石～」

「広野町でのホテルの再生」

「ゼロカーボンと景観の両立」「企業とSDGs」

「ハダカカメガイの摂餌行動および成長過程の研究」では、アクアマリンふくしまで飼育されているハダカカメガイについて実験・観察を行い、得られた結果について、飼育員や本校理科教員と議論を繰り返して行った（図1左）。また、「ゼロカーボンと景観の両立」では、青森県六ヶ所村の原子燃料サイクル施設を訪問したり、地域住民との意見交換会を行ったりするなど、充実したフィールドワークを行った（図1右）。

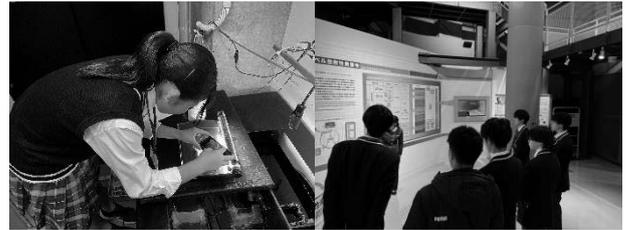


図1 各生徒の探究の様子

その他の探究も含め、WWL 連携校主催の探究学習の成果発表会や、サイエンスキャッスル2024 東京・関東大会などの外部機会でも成果を報告した（3. 5節参照）。

(3) 成果

専門機関との接続や外部発表会への参加を積極的に促した結果、専門的なアドバイスを受ける機会が増え、知識・技能や思考力・表現力を向上させる生徒が増えた。また、得られたアドバイスや他者の探究との比較を通して、今後の探究の進め方やキャリアについて考える様子が見られたことも、成果のひとつであると考えている。

(4) 課題と展望

スキルトレーニングで学んだことを応用する場面・時間を十分に確保できなかったことが課題として挙げられる。こういったトレーニングを、系統性をもって、かつ、幅広い学力層の生徒に対しどのように普遍的に実施していくか、カリキュラム改善を継続して検討していく。

3. 2. 2 スポーツ医・科学探究ゼミ

スポーツを多方面から考え、競技力（技術・戦術・体力・精神）の向上やスポーツを通してのコミュニケーション、地域活性、健康増進など自分たちが日ごろから取り組んでいるスポーツを深掘していく。また、競技者として幅広い視点からその競技を見ることにより、自身の競技力向上だけでなく、スポーツの可能性を見つけ、トップアスリート生として将来の日本のスポーツ界を牽引する力を身につけることを目的とした探究である。

(1) はじめに

スポーツを通して持続可能で豊かな地域の実現を探る他、競技力向上、障害の予防などトップアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行い、グローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 方向性の再検討

1年次後半から本格的に進めてきた探究活動のゴールを目指すためにもう一度、活動内容の再検討をした。自分たちの目的とは何なのか、他に課題解決のための手立てはないのかなど、担当教員との面談などを通して、より深い学びを得るための計画を行った。1年次で進めてきた活動を継続しつつ、新たな取り組みを加えて進化した探究活動ができるよう再検討の時間を設けた。

② 調査、アクション

1年次からの活動に加えて新たな取り組みを考え、活動してきた。また、担当教員との面談を行い、活動状況を確認しながらアクションが思うように進まない生徒に対しては答えを教えるのではなく課題解決のヒントを伝え、できる限り生徒主体になるような支援を心掛けてきた。

競技パフォーマンス向上のための睡眠について

寮生活を送る中で朝の目覚めが悪く、日中眠気があり集中力が低下しているという実体験から、睡眠によって競技パフォーマンスに影響が出ているのではないかと疑問をもち、自分たちの睡眠時の環境や就寝前の行動などの記録をとったり、実際に睡眠を測定できる機械を用いて睡眠の質を分析したりし、競技パフォーマンスを向上させるための質の良い睡眠の方法を調査した。



と疑問をもち、自分たちの睡眠時の環境や就寝前の行動などの記録をとったり、実際に睡眠を測定できる機械を用いて睡眠の質を分析したりし、競技パフォーマンスを向上させるための質の良い睡眠の方法を調査した。

目指せ前田大然！足が速くなるためには？

サッカー競技を行う中で、自分たちのスピードの不足が競技に大きく影響しているという課題に対して、走力を上げること、初速を速くすることを目的として調査を行

った。足を速くするためにはフォームや筋力、足の回転数、腕の振りなどが関係しているのではないかと仮説を立て、様々なトレーニング法や理論をもとに実践し、評価を繰り返し行った。



立ち幅跳び (SLJ) cm			30mスプリント走 (30mSprint_1)					
SLJb1	SLJr1	SLJl1	5m Time	10m Time	15m Time	20m Time	25m Time	30m Time
230	201	203	1.20	2.00	2.69	3.33	3.97	4.59
212	174	194	1.18	1.98	2.70	3.40	4.06	4.69
217	176	175	1.23	2.02	2.74	3.44	4.13	4.81
229	187	190	1.34	2.14	2.85	3.53	4.21	4.88

(3) 成果

本ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列として日頃からスポーツに真摯に取り組んでいる競技力向上や障害予防、スポーツを広める、などの競技に絡めた探究を行ってきた。また、外部の方々との連携を図りスポーツを軸に様々な探究を展開してきた。競技をしているだけでは身に付けることのできなかった知識や考え方に探究を通して学ぶことができ、自身の競技への向き合い方が大きく変わった生徒もいた。多方面から競技(スポーツ)について考えることで偏った考え方ではなく広い視野を持って物事を捉えられるようになった生徒が多く、将来に繋がる活動であったと感じた。

(4) 課題と展望

トップアスリート系列の生徒は、2年次後半から3年次になるとそれぞれ最後の大会を控え今まで以上に競技へ打ち込む時間と熱量が多くなるため、思うようにアクションに取り組めないことも多い。更には5月には最終発表会になるため非常に限られた時間で計画的、かつ迅速にアクションを実施しなければゴールには近づかない。担当教員で連携して進捗状況を確認し、見守り、声掛けのバランスを考えながら支援していきたい。この活動が競技力向上に役立つことのほか、アスリートのセカンドキャリアにも役立つものであることは間違いない。その意味でもトップアスリートの探究活動の在り方を今後も試行錯誤していく。

3. 3 未来創造探究（高校3年次）

3. 3. 1 未来創造探究3年の概要

総合的な探究の時間の中で、2単位（火7時間目・金3時間目）を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの1時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミ（※新課程カリキュラムに伴い、開校以来のゼミ編成）に分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比較し、最終発表会後の論文作成を通じての探究内容の深化と、卒業後の進路実現との接続を重視した。

(1) 3年次の探究活動概要

- 5月2日 未来創造探究生徒研究発表会
- 5月10日 学びのマップ・論文作成オリエンテーション
- 5月～10月 論文執筆
- 9月 論文一次締め切り
- 12月 論文最終締め切り

(2) 実施内容

① 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	プロジェクト数 (総生徒数)	担当教員人数
原子力防災・伝承	16 (19)	2
共生社会	22 (27)	3
地域社会・経済産業	9 (16)	2
自然科学・地球環境	13 (17)	2
人間科学・文化・芸術	18 (20)	2
スポーツ医・科学	18 (33)	6

② 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。詳しくは「資料5」に記す。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメントーターとして呼び出し、各賞を設定した。

今年度は高校生のみでの発表となったが、昨年度と同様に、発表部門(24PJ)・対話交流部門(29PJ)・ポスター部門(40PJ)に分け、連携校の福島高校(2PJ)・磐城高校(1PJ)・会津高校(1PJ)・仙台二華高校(1PJ)・東桜学館高校(2PJ)と、卒業生(6PJ)を招き、様々な背景の生徒同士が交流する機会を設けた。探究を深めるための発表会という位置づけとし、その後の探究アクションや論文執筆のヒントを得ることを目的とし、特に、対話交流とポスター部門では、聴衆側の発表者へのフィードバックができる工夫を付け加えた。

③ 学びのマップ作成

これまでの探究で学んだことを振り返り、進路活動に生かすために、「学びのマップ」を作成させた。

④ 論文作成

例年同様、論文の構成は、目次・要旨（アブストラクト）・内容（動機・目的・仮説・検証方法・解決アクション・結果）・考察・探究で得た成長・謝辞・参考資料とした。分量は6,000字～10,000字と設定した。

今後の流れ・必達目標

※スケジュールより早く終わらせることも可能だが、Stepごとに必ずゼミ教員の確認をもらうこと。
※論文作成時期は、進路活動と同時期なので、ゼミ教員・担任とのコミュニケーションを大切に！

9月末を一次締め切り、ゼミ担当者のフィードバックを経て10月末を最終締め切りと定め、優秀な論文1つに「未来創造探究大賞」を与えた。

(3) 評価と課題

当該学年からの探究カリキュラムの前倒しにより、例年より論文執筆に割く時間は増え、中にはデータ・先行研究・参考資料を用いた分析や深い考察があるものが見られた。しかし「進路との接続」の点で、探究活動を進路実現に効果的に結びつけられなかった点は、今後の課題であろう。

3. 3. 2 原子力災害・伝承探究ゼミ

本ゼミは、原子力災害から14年が経過し、福島県双葉郡がたどってきた復興の過程や、解決すべき課題の変化をとらえ、解決策を提言したり実践したりを意識して取り組んできた。文系とも理系とも分類しがたい社会課題に対して、様々な探究活動を行っている生徒同士が知恵を出し合って解決に迫ろうとしている。一見すると課題解決には直接関係ないように見える物事であっても、後に概念的につながっていく期待が持てるような探究活動が複数見られた。今年度は卒業年次に当たり、主に卒業論文の執筆に取り組んだ。

(1) 生徒が取り組んだ内容

主に賑わいに焦点が当たったもの

- ・本と出会うきっかけを増やす
- ・町の観光資源の発信
- ・寺社仏閣を利活用した地域おこし
- ・賑わいや生業の創出モデルと他地域との交流

主に生業に焦点が当たったもの

- ・アップサイクルとスポーツ
- ・アップサイクルとものづくりによる発信

主に伝承に努めたもの

- ・地域の観光資源のマイクラフト発信
- ・語り部活動とカタルシス効果
- ・オーラルヒストリーの英語による発信
- ・地域課題のゲーミフィケーション
- ・手話による交流の促進

人と人の関わりやスキルに焦点をあてたもの

- ・ハンガリーと日本のコミュニケーション様式
- ・エージェンシーの涵養
- ・ネガティブケイパビリティの涵養
- ・ディベート的手法を用いた対話の促進
- ・地域医療体制への提言

(2) 実例【生徒論文要旨より】

生徒R 賑わいや生業の創出モデルと他地域との交流
双葉郡は住民の帰還率は約三割であり、避難指示が解除されても人々が戻らない現実を知った。被災地に賑わいを取り戻し、安心できる居場所にしたいという思いから探究活動を始めた。

津波の被害が大きい宮城県北部の沿岸地域、原発事故による被害が大きい福島県双葉郡、原発と原爆という観点から広島へ行った。福島県で震災後に新たな生業を作り、地域の魅力を伝える活動をしている方にお話を伺った。その後、地域の魅力をより多くの方たちに伝えるために課題を解決するための活動をした。

富岡町の「YONOMORI DENIM」では地域の特産品を作り発

信する取り組みを知った。自分の力で出来ることはないかと考え、古着を使った魚のコラージュを作成し、地域の魅力を伝えようとした。また「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」のボランティアに参加、文化祭でコットンを使った人形を作るイベントを開いた。当事者が地域側から考える魅力と、外部から見て魅力と感ずる部分違うのではないかと考え、多方向からのアプローチをすることで、新たな魅力の発見があるのではないかと感じている。大学進学後は、新しい発想で地域外の方々にも地域の魅力を発信する方法を学び探究を進めていく。

生徒K ディベート的手法を用いた対話の促進

「対話」(親しくない人や価値観の異なる人とのすり合わせ)の環境醸成に向けて、「ディベート的手法」(ディベートから着想を得た、自分とは異なる立場で考えることを促す手法)は自分の意見を持つことや多様な視点に対する理解を深めるきっかけとして機能することが実践を通して明らかになった。しかし、①実際に「対話」にどれほどの影響を及ぼすのかについて検証が不足している点や、②「ディベート的手法」を広め、継続的な利用を可能にするためのワークシートやフォーマットなどの開発が不足している点、③海外の思考様式(特にフランスの「ディセルタシオン」)について調査・考察が不足している点で、本研究には課題も残った。

(3) 課題と展望

カリキュラムの変更に伴い、3年次は週に2時間(うち1時間は進路探究)の時数となり、論文執筆時間がほとんどであった。探究的な学びと進路接続を考えたときに、進学先の課す入試方式と探究の成果物が一致しないことに苦心することが多かった。小論文という名の総合問題に太刀打ちすることが難しく、教科学習の学びとの横断は急務であり、生徒にも伴走者にも余白が必要であると感じた。

3. 3. 2 共生社会探究ゼミ

共生社会探究ゼミは、個人の固有の外面の属性（国籍、人種、性、年齢、障がいの有無など）や内面の属性（経歴、価値観など）に関わらず、互いの多様な違いを尊重し受容し合い、包摂的な共生社会の実現や市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立（自助・共助・公助）、スポーツによる健康増進や豊かなコミュニティの実現などの課題を設定し、課題解決に向けての探究を行っている。今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列 14 名、スペシャリスト系列 9 名、トップアスリート系列 3 名、計 26 名で、個人あるいはグループで探究しており、全部で 25 のプロジェクトが進行している。

（1）はじめに

これまで家庭や学校で得た学び・双葉郡の地域課題について考察し、活動したことの最終的なまとめに取り組む年次である。新型コロナウイルス感染症の 5 類移行後、多くのアクションを行うことが可能となったほか、自らのテーマ設定も、自己の経験に基づくものが多く、探究を進めた結果、地域的課題にとどまらず、「自らの疑問や課題は世界的課題へもつながるものである」という意識が見られるテーマ設定が顕著であった。そのため、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマや、双葉郡の魅力の開発・発信、他地域も抱える課題のほか、自己の内面的問題、教育・福祉的課題など、多様なテーマが設定されている。

（2）実施内容

・主体性の育成における必要な要素の抽出

社会で起きていることに目を向け、主体的に関わる姿勢を育成するため、国際的課題、自己理解、対話といった視点を抽出し、ウクライナの子どもたちに手紙を送ることや、学生同士でのオンライン会議を通し、主体性とは何かについて迫った。

・犬の幸せについて

犬の殺処分を減らしたいという思いから、自治体の担当者、動物の保護施設、愛護団体へ取材をし、保護されるペットに対しできることは何かを考え実践した。

・障がいを越えていくために、私たちに出来る事

発達障がいを持つ人が学校や社会になじみやすくなるために出来る事は何かという問いを掲げ、対話や発表を通じた活動を進めた。目的達成には、環境整備や情報共有が有効だと考え、合理的配慮や発達障がいについての知識の共有を行った。

・医食同源から考える食と健康の関係

将来の志望である医療分野と結び付けた「医療同源」について調査するため、医療従事者や栄養教諭、薬膳レストランの経営者などへの調査を行った。

・自己主張ってむずかしい？

自らの経験から、幼少期から自己主張の苦手な子どもへの理解と環境づくりをテーマに、地域のこども園を訪問し、子どもが自己主張しやすくな

るようなゲームを考案し、実践した。

・肥満傾向児の割合をスポーツを使って減らそう

福島県の肥満傾向児の割合の多さに着目し、子どもを取り巻く環境の変化等の調査を深めつつ、調査内容をもとに近隣の子ども園で体を使った遊びや体験活動を実践した。

（3）成果

身近な話題から地域の課題と結びつけ、自分たちなりに考察の視点を持ち、アクションを行えたことは成果であるといえる。テーマが自分自身や身内の経験に根差したものが多かったこともあり、地域の方々や親類縁者の方の協力のもと、アクション、並びに現地調査が比較的しやすく、より現実的、実際のデータや素材を收拾することが可能になった。そのため、探究により深みを持たせられたという印象であった。

（4）課題と展望

上記の通り、今年度はアクションを行う機会の増加やその深みは増したと思われるものの、仮説、アクション、成果との関連性に乏しいものは多かったように思われる。地域人材とのつながりを大切にしながら、身近な課題と世界の課題をつなげる、その際の論理的思考力という観点を身につけることで、より効率化、かつ結論に至るまでの明確な流れをイメージすることができると考えた。

3. 3. 2 地域社会・経済産業探究ゼミ

本ゼミでは双葉郡の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究するゼミである。

(1) はじめに

今年度は15名8テーマで実施した。前身の「アグリビジネス」ゼミでは、農業や商業の生徒が中心となって活動していたが、現在はアカデミック生も加わり、これまでの「食」に関する活動だけではなく、地域資源に着目した活動も展開された。

(2) 実施内容

①葛尾村のヤギ乳に関する探究 グループ(2名)

牛乳アレルギーの仕組みを考察し、アレルギーの少ないヤギ乳の活用法を探究した。葛尾ファームを訪問し、牧場体験やチーズ開発について伺うことで、ヤギ乳の可能性を再認識した。



②大熊いちごによる復興 個人

大熊町のネクサスファームや学び舎ゆめの森を訪問し、震災から現在に至る経緯などについてインタビューを実施。株式会社マルトとのイチゴを使った商品開発と販売を行った。



③ウッドストローに関する探究 グループ(2名)

持続可能な森林の管理と伝統的な経木の利用を広めるために企業と共同で間伐材を利用したウッドストローの制作を行った。



④フードロスに関する探究 グループ(3名)

「フードロス」を減らすために、広野町で米農家を営んでいる方から三等米を譲っていただき、メニューの開発に取り組んだ。



⑤プログラミングを活かした地域活性化に関する探究 個人

少子高齢化などによる人口減少抑制や磐越東線の利用者増加を目指した活動として、「小川町」に着目し、魅力発信のためWEBページの作成やアプリの開発に取り組んだ。



⑥「居場所」作りに関する探究 グループ(4名)

故郷である大熊町に人が集まる「居場所」作りに取り組んだ。そのために大熊町・佐賀県・高知県で行われた研修に参加し、企業の方のご協力

の下、イベントを開催することが出来た。



⑦化粧品に関する探究 個人

マーケティングと化粧品への興味から双葉郡の特産品を使った化粧品づくりをテーマに浪江町の鈴木酒造店の酒粕を使った石鹸作りを行った。東日本大震災からの復興及び環境への配慮の両方の実現を目指し商品開発を行っている。



⑧特産品を使ったトゥンカロンに関する探究 個人

新しい特産品の開発を中心に広野町の活性化を目指した。広野町のバナナでトゥンカロンを作り、イベントを開催することで人が集まり、町が盛り上がるのではないかと活動した。



(3) 成果

「食」や「地域活性化」・「復興」といった様々なテーマをもとに多面的・多角的な視点からアプローチをし、地域資源や観光資源、人と人のつながりについても新たな可能性を創出した。

(4) 課題と展望

今年度の活動を通し、本ゼミでは様々な側面から「復興」や「地域活性化」について取り組めることを再認識出来たように思う。

今後は開発した商品や、見出した課題についての分析と試行錯誤を繰り返し、本当の意味での「形」として実績を証明し、発信できるようになることを期待したい。

3. 3. 2 人間科学・文化・芸術探究ゼミ

令和5年度よりゼミ編成が行われ、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」では、主に人間の心理・行動の分析や、人間が生み出す芸術・アートを生かした社会のあり方について探究する。差別・偏見のメカニズムの解明や、芸術・アートを生かしたウェルビーイングを追求するコミュニティの実現、地域の文化財や伝統芸能などによる地域のアイデンティティの確立などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

(1) はじめに

高校8期生は、新課程カリキュラムへの移行初年度ということもあり高校1年次から未来創造探究を進め、例年より進捗が早い（中学校1期生は総合的な学習の授業「未来創造学」において同様の探究学習をしている）。各自の探究活動は高校2年次で主な活動は行われており、高校3年次は5月上旬の生徒研究発表会における成果発表と、10月までの論文執筆が主な行事であった。高校3年次も、高校2年次同様、生徒が決めたテーマに沿って調査・実践を行い、それを教員が個々にフォローする体制が取られた。

(2) 実施内容

まず、生徒が行った探究テーマを以下に示す（順不同）。

応用倫理学×哲学対話

10代が暮らしやすい社会へ

クラス環境を心地よいものにしよう

虐待について

サステナブルアートで知る海

社会問題 on TRGP

学習サポートプロジェクト

わたしたちだってできるもん！

保育士が他種と平等な仕事になるために

復興をめぐる対話の難しさ

原発事故と食

復興の需要と供給

自己覚知の重要性

個人と共同体について

Full of Fun! Liveの可能性

音楽とスポーツの関係性

目覚まし音が人に与える影響

演劇を通じた地域活性化

多様な視点から考える「差別」について

今年度は、高校2年次までの探究活動を引き続き深めながら、5月の成果発表会や10月までの論文執筆に向けて、自分たちの探究活動をまとめて発表するのが主な活動だった。



発表会では、発表会部門・対話部門・ポスター発表部門に分かれたが、発表に力を入れる生徒や、対話・ポスター部門においてアイデアを求める生徒など、それぞれの目的に応じ自主的に選択し、それぞれの場面でさらなる理解を深めたり、次のアクションのヒントを得たりするなど、次に繋がる発表会となった。

また、論文執筆においては、初めの全体オリエンテーションにおいて論文構成・スケジュールを確認し、その全体スケジュールに合わせ、詳細な執筆スケジュールを立てることで、生徒へのリマインド・声掛けがしやすくなり、ほとんどの生徒は期日までにある程度の体裁・クオリティーで執筆を行っていた。

(3) 成果

全体の探究活動や最終発表会が前倒しになったことで、早い段階で自分の興味関心に基づく探究活動ができた。その分、探究を深める機会も増え、積極的に調査・アンケートを行ったり、大学教授などの専門家に直接インタビューをしたりするなど、積極的に活動する姿が見られた。

(4) 課題と展望

生徒の探究内容の深まりと専門性の向上と同時に、教員の伴走・指導不足を感じた。高校3年次はゼミ担当教員2人と、かなり負担感が大きかった。また、論文執筆時期と総合型選抜入試の時期が重なり、担任・副担任とも負担感を感じたことは、今後検討すべき大きな課題と言えるだろう。

3. 3. 2 自然科学・地球環境探究ゼミ

本ゼミでは自然現象の真理や人間と自然環境との関係性を探究する理系分野に特化したゼミである。本ゼミ生は、自然科学の究明による人間社会と調和した環境の実現、汚染からの環境回復、気候変動、再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する地域特性を活かした循環型社会の実現、望ましい人間社会と地球環境の関係性などに各自課題を設定し、探究と実践を行っている。

(1) はじめに

自然科学系の内容に特化し、それぞれの課題の解決に向けて、計画・実行・結果確認・考察のサイクルを繰り返し、小さな課題を解決していくというアプローチにより、大きな課題を解決していくという指針を示し、探究を進めさせた。教員は主に、計画と考察の場面に関わり、生徒の探究の指針について助言を行った。

(2) 実施内容

まずはインターネットや図書館を利用して調査をすることから始めさせ、生徒は自発的にフィールド調査や有識者への訪問活動等の実践活動を行った。次に、そこで得られた情報や結果をまとめながら考察させ、次の課題や探究を進めるよう指導した。

ゼミは、教員2名で生徒18名の探究の進捗状況を把握し、活動をサポートした。

ゼミ活動のようす

実地調査で風を観測するようす (五社山おろしの研究)



活動方針について議論するようす

(3) 成果

- 未来創造探究生徒研究発表会での報告
- 探究論文の執筆 (生徒の探究テーマ例)
 - ・五社山おろしの研究
 - ・微生物発電
 - ・双葉郡の水生昆虫
 - ・ザリガニを食べた
 - ・ホテル保護のためのカワニナの生態調査Ⅱ
 - ・土壌を通して考える大熊町の現状と未来
 - ・社会課題に対する意識啓発のためにできること
 - ・海洋ごみを多くの人に知ってもらうには
 - ・カメムシの匂いから香水を作る
 - ・狩猟の魅力とその課題について
 - ・捨て犬捨て猫をゼロにするには？

(4) 課題と展望

本年度は、5月の未来創造探究生徒研究発表会へ向け活動を進め、そして約1年半にも及ぶ探究活動の研究報告の集大成となる論文作成が主な活動となった。

これまで活動を進めてきたことで、各々のテーマに関する知識が深まり、論文完成後も活動を継続し、高校卒業後も進学先で探究の内容を深化させようとする者もいる。一方で、科学的知識が乏しかったり、興味があるテーマが見つからず進捗が大きく滞った生徒がいたりしたことも事実である。これらの現状を踏まえ、今後のゼミ運営を円滑にするために、以下のような課題を解決する必要があると考える。

- ・先行研究(根拠)に基づいて、論理的な仮説を立てることが難しいこと。
- ・検証を行う上での条件設定、検証方法や解決アクションを模索することが難しいこと。
- ・仮説設定から考察や新たに問いを設定しなおす段階において、探究が高度化するにつれて、多くの支援が必要となること。(特に、金銭面(実験器具の購入等)、専門的な知識、検証を繰り返すための時間等は大きな問題である。)

これらの課題を解決するためには、まず現状を客観視し、問題意識を持つことが大切である。また、テーマ決めが困難な生徒に対しては、選択肢を提示したり、先輩の研究テーマを後輩が引き継がせたりすることも大切である。本ゼミの探究は他のゼミとは異なり、実験等によるデータを分析し、数的に裏付けをとることが求められる。そのためには、仮説に基づき検証活動をすることが必要不可欠であり、その部分こそが本ゼミが生徒に求める取組でもある。本ゼミの指導の重点を指導する教員が共有して指導していくことが求められている。

3. 3. 2 スポーツ医・科学探究ゼミ

スポーツ医科学探究ゼミでは、スポーツと医科学の知識を融合し、競技力向上やけがの予防、リハビリテーションのメカニズムなどを探究するゼミである。スポーツに関わる身体の仕組みを科学的な視点で深く探究し、アクションからのデータ分析、文献などを通して実践的な知識を身につける。さらに、現代のスポーツが抱える課題に対して、科学的根拠に基づいた解決策を提案する力を養う。将来的にスポーツ医学、健康科学、栄養学、トレーナー分野などを目指す生徒が多い。

(1) はじめに

高校8期生は、5月に未来創造探究発表会を控えていたので、4月から発表への準備、発表後はアクションや文献などを通して論文を書かせた。

(2) 実施内容

- ①三苦選手のようなドリブルを極めたい
三苦選手のようにドリブルできるように、トレーニングの内容と成果をまとめる。
- ②目指せ！フリーキックマスター
サッカーのキックの球種を調べ、誰にでも蹴られるようなメソッドを探究した。
- ③筋トレで競技力向上
理想の強くてしなやかな身体に近づけるためにウエイトトレーニングの研究を行った。
- ④シュート決定率を上げるにはどうしたらいいか
シュート決定率を上げるために、メンタルとテクニックの両面から課題に取り組んだ。
- ⑤PHと疲労について
PHと疲労の相関関係を調べ、疲労の取り除くやり方を探究してみた。
- ⑥空中戦を制するために
パフォーマンスを向上させるために、課題である空中戦の改善に取り組んだ。
- ⑦効果的な補食の取り方と簡単に取れる補食
補食を摂取することの意義とアクションを通して適切なタイミング・栄養・量を学んだ。
- ⑧スポーツが社会に与える影響とは？
スポーツの影響する「見る」、「支える」の視点で探究し感動や夢、希望を与える力を実感した。
- ⑨スポーツと紫外線
紫外線による肌トラブルを探究し、正しい知識を得てケアをして悩みを改善する手立てを考察した。
- ⑩バドミントンの観客を増やすためには
バドミントン観客増加を目指し、SNS発信や役場訪問で見る文化の普及の仕方を模索した。
- ⑪Let's sports
広野町で子供たち運動の楽しさを伝え、スポーツ人口増加を目指してアクションを行った。
- ⑫ドリブルで勝率を上げるには
ドリブル勝負の勝率向上を目指し、タイミングや角度、身体の使い方を探究した。
- ⑬コンディションの整え方について
コンディション管理を探究し、料理体験やトッ

プアスリートの生活から共通点などを学んだ。

- ⑭スピードを上げて競技力向上
スピード向上を目指し、知識習得や筋トレ、ストレッチ、フォーム修正で競技力向上に取り組んだ。
- ⑮ジャンプ力向上
ジャンプ力向上を探究し、インボディ測定や筋トレ、ジャンプ方法を学び、大切なポイントを学んだ。
- ⑯体力を効率よく使うためには
ジャンプ力向上を探究し体力を磨き、コンディション調整を工夫し、高いパフォーマンスを目指した。
- ⑰サッカープレースピードの向上
海外選手との差を感じ、スプリント速度を向上させた。今後はこれをサッカーのプレースピードに繋げる方法を探究する。
生徒一人一人がアクションを行い、自身が考える成果に近づけていけたように感じた。また、発表までこぎつけた。

(3) 成果と課題

個々人に合った指導ができたのかと言われると疑問が残る内容だった。ゼミ内の話ではあるが、担当教員を早く割り当てて指導していったところ、生徒の中にはビジョンがない生徒が多い印象を受けた。そのため、教員自身が指導方針を明確にする必要があると痛感した。また、企画研究開発部のサポートがなければ、論文作成までたどり着かなかった。

3. 4 海外・国内研修

3. 4. 1 ドイツ研修

本校では、開校年度からドイツを訪れている。研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030 年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium (以下 EMG) 校と交流を行っており、オンラインも含めた交流を毎年継続している。本校では未来創造探究として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のみならず、全世界が共有すべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩とするためにドイツ研修を実施した。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びに繋げている。

1. 日程・参加者

派遣期間：令和7年1月6日（月）～17日（金）

参加生徒：高校1年次10名

引率団：

齋藤夏菜子（英語科・企画研究開発部副主任）

板倉 雄太（英語科・企画研究開発部・1学年担任）

2. 実施内容(日本での事前研修)

事前研修として以下の活動を行った。

- (1) EMG 校とのオンライン交流
- (2) 1F 地域塾への参加・1F 視察
- (3) 広野火力発電所への訪問・見学
- (4) 会津大・留学生との双葉郡フィールドワーク
- (5) ヴィクトール・フランクル「夜と霧」の講義
- (6) アウシュビッツ平和記念館訪問

(1)については、現地にてホームステイをするにあたり、渡航前からパートナーとの交流を深めた。年末にはオンラインでバーチャルホームステイを行い、お互いの家から異文化交流を楽しんだ。また、フライブルクで再生可能エネルギーについて学ぶ上で、自分たちの地域のエネルギーについて正しく知りたいという希望から、(2)1Fの視察に参加して1Fの現状を知り、(3)広野火力発電所では少ない二酸化炭素の排出量で発電ができる石炭ガス複合発電プラント（IGCC）の仕組みと環境保護への取り組みについて学んだ。また、伝承のあり方や伝え方の観点から、(4)会津大の留学生と共に双葉郡を歩き、双葉郡の将来あるべき姿について英語によるディスカッションと発表を行った。また、現地でのダッハウ強制収容所への訪問をより深い学びとするため、(5)「夜と霧」を読み、白河市にある(6)アウシュビッツ平和記念館を訪問した。



3. 実施内容(現地での研修)

(1)フライブルク

①フライブルク市庁舎

市庁舎では、エネルギーを自給自足するために建物の外壁がソーラーパネルで覆われている。使われている木材はシュバルツバルトの森の木材で、地産地消の建築物でもある。この設備によりフライブルク市役所ではエネルギー収支をゼロ以下にする「ゼロエネルギー」を達成しただけでなく、プラスエネルギーハウスとしてこの市役所で作られたエネルギーの一部が、周辺地域でも活用されている。



トラム（路面電車）や自転車専用道路もきちんと整備されている。フライブルクでは都心への自動車乗り入れを規制、郊外からの車は駅に隣接した無料駐車場に置いて、トラムに乗り換え都心に向かうように作られている。線路には騒音防止だけでなく環境保全のために芝生が植えられている。さらに目を引いたのは、自転車専用道路がきちんと整備されていることである。日本では自転車専用道路は日常で使うことをあまり想定しておらず、行き止まりがある等問題があるという指摘も生徒たちから出ていた。環境問題に本気で取り組んでいる国ならではの違いを感じることができた。

②エコステーション(環境教育センター)

エコステーションは1986年にBUND（ドイツ環境自然保護協会）の働きかけで完成した施設である。

職員のウルリ氏から、Carbon Footprint についての講義を受けた。Carbon Footprint とは、製品やサービスの原材料調達から廃棄、リサイクルに至るまでのライフサイクル全体を通して排出される温室効果ガス排出量を CO2 排出量に換算し、製品に表示された数値もしくはそれを表示する仕組みのことである。私たちが個人レベルで二酸化炭素排出を減らすためにはどのような行動を選択すべきか、具体的な方法を教わった。

その後、いつもフライブルクを案内してくださっている独日協会のマティウスさんより、シュバルツバルトの森における放射線についての講義が

あった。シュバルツバルトでもウラン鉱山があることから被爆についての議論があったとのことで、日本との共通点について教えていただいた。

最後は、日本のエネルギー問題について、事前研修で学んできた内容をもとにプレゼン発表した。ドイツのみなさんとエネルギー問題について議論することができたことは大きな収穫であった。



③ブライトナウ村への訪問(バイオマスエネルギー)

この村は村全体がバイオマス発電を取り入れている村である。cogeneration system というもので、村内で手に入る木材チップを燃やして発電し、その熱を冷却する際に得られる温水の熱を特殊なパイプで村全体に供給している。就任して1年ほどの新しい村長・マークス氏に迎え入れられ、村の施設や実際のヒーティングセンターの稼働の様子を見学した。



④ヴォーバン地区

第二次世界大戦後に市が買い取り、多様な住民が快適な生活を送れるように開発を進めた最先端のエコタウンである。団地を建設する際には、設計から住民を巻き込んでいる。エネルギーコンセプトや省エネ住宅、カーフリーなど、各分野において持続可能な社会を構築するための新しい取り組みを住民主導で行ってきた地域である。

街全体がいくつかのブロックに分かれており、従来のように家の前に車が通れる道路があるブロックもあれば、住宅地に一切車を入れないよう設計されているブロックもあり、開発当時住民がニーズに合わせて住むブロックを選んでいった。大きな窓から太陽光を取り入れ、暖房の使用頻度を減らすことができるパッシブハウス建築になっており、子供や環境に優しい作りになっていた。

(2)ミュンヘン

①Ernst Mach Gymnasium 校との交流(1/10~1/14)

ミュンヘンでは4泊5日で全員がホームステイを行った。事前にオンラインで交流を深めてきたため、初日はやっと会えたことを抱き合って喜んでいた。日本の文化を紹介するプレゼンでは、EMGの生徒や教員は発表に熱心に耳を傾け、たくさんの感想や質問をくれた。

また、オーストリアのザルツブルクを訪れ、モーツァルトの生家などを見学した。電車で数時間ほどで国境を越えて隣の国に行くことができるというのは、日本ではできない経験であった。

ある夜は学校の近くの公民館で夕食会を開いた。我々は日本食を、EMGの生徒達はバイエルン地方の郷土料理を作り、ホストファミリーや多くの学校関係者も参加しての楽しい会となった。



②ダッハウ強制収容所

ダッハウ強制収容所は、ナチスが1933年に設立した最初の常設強制収容所である。親衛隊の収容所護衛兵のトレーニングセンターであり、この組織と慣例がすべてのナチス強制収容所のモデルとなった。

政治犯を収容することで始まったこの収容所は、いつしかアリア人以外の人種や性的少数派、異教徒を収容し、囚人数が増加した。囚人はドイツを発展させるために様々な現場で強制的に労働をさせられるという「産業」としての側面もあった。

展示室には、収容時に没収された遺品や、当時の証言、写真、映像が並び、その凄惨さが詳細に書かれた資料を目の当たりにし、言葉を失った。本やインターネットだけでは分からない、肌で感じる収容所の寒さや閉塞感、たくさんの遺留品から一人一人の無念さが伝わった。

ドイツでは、自国の過ちを認めている。教育においてもナチスのプロパガンダを繰り返さないために、批判的思考力を大切にしている。この学びを受けて、生徒たちは何を思ったか、引き続き事後研修で議論していく。



③ホームステイ

1人1家族にお世話になり、ホームステイをした。現地家庭で数日過ごし、異文化生活を体験したことによって、国や文化の違いを楽しみ、友情を育んだ。最後の別れの時間、ホストファミリーと涙を流して抱き合う姿に、特別な時間を過ごしたことが伺えた。

4. 研修の成果と課題

開校年度から続く研修であり、交流先との繋がりも強固なものになっている。今後もお互いにとって学びの深い交流となるようにしていきたい。帰国後、校内だけでなく地域にも広く学びの還元ができるよう発表と対話の機会を持ちたい。

3. 4. 2 ニューヨーク研修（令和5年度）

ここでは、令和5年度ニューヨーク研修の実施内容とその成果、今後の課題について記述する。参加生徒は本校の8期生12名であり、併設中学校からの内部進学生（一貫生）と高校から入学した生徒（高入生）が系列を越えて編成されているという意味では、開校初の取り組みとなる。また、東日本大震災から13年、ふたば未来学園の開校から10年が経過する中で、世界的なCOVID-19の感染拡大や2024年初頭の能登半島地震の発生など、世界情勢も予測の立たない変化を続けている。本節ではそのような視点から、これまでとは異なる生徒の特性やチームの在り方、本校における海外研修の意義を踏まえた視点で、その成果や新たに見えてきた課題についてまとめる。

（1）はじめに

本校がSGH指定校であった期間から続く本事業は、前年度（令和5年度）で8年目となった。そのうち、現地に渡航できたのは今回渡航した8期生で5度目である。COVID-19の感染拡大により渡航を断念した4～6期生はオンラインを活用して本事業と現地とのつながりを継続し、渡航再開に至った7期生においては滞在日程と生徒の選出数を縮小しての実施となった。

前年度の8期生チームは、「1～3期生までのように、制限のない渡航研修に戻していきたい」、「オンライン研修では代替され得ないプロジェクトにしたい」という思いのもと、滞在日程を延長、参加生徒数を12名へ戻し、生徒が自分たちの力でミッションを達成するという目的のもとで実施することができた。

（2）実施内容

事前研修

- ・各教科の教員によるニューヨークに関する知識のインプット
 - ・ALT等との日常会話のトレーニング
 - ・ディスカッションやディバートのトレーニング
 - ・UNIS-UNのテーマについて、関連文献の精読やインタビュー
 - ・プレゼンテーションとスピーチの英語化と練習
 - ・福島映画教室事務局主催 FUKUSHIMA with BÉLA TARR filmmakers in residence 参加海外新人映画監督との交流（公財 福島県観光物産交流協会）
 - ・中南米及び北米に移住した県民の子孫による本校訪問（福島県国際課）
 - ・さんかくいわき 三戸花奈子氏による講演 など
- 上記の内容を事前研修として実施する上で、①複数の係が主体となって、校内外の人材との連絡調整を行い、原則全員参加でインタビューや交流を行うこと、②互いの探究活動について対話を通して理解を深め

ること、③英語の授業と連携して、渡航しない生徒にもメリットがあるように配慮をすること、④探究論文アブストラクトの英語化を複数回組み込み、ライティング活動の成果英文を活用して、個々の探究活動について話せるようにすること、以上の4点を重視した。

現地研修

3月17日（日）	NY市職員等との意見交換 ニューヨーク市内研修(9.11家族会との懇談) ホテルでのディスカッション
3月18日（月）	生徒国際会議 UNIS-UN 参加 0日目 Cultural Showcase, Workshop
3月19日（火）	生徒国際会議 UNIS-UN 参加 1日目 Student Conference DAY1
3月20日（水）	生徒国際会議 UNIS-UN 参加 2日目 Student Conference DAY2
3月21日（木）	国連日本政府代表部との意見交換 コロンビア大学大学院学生との意見交換
3月22日（金）	国連 Youth Delegate との意見交換
3月23日（土）	班別自主研修

現地では様々な形で研修を行い、個人の探究の深化発展を目指しながら持続可能なコミュニティづくりについて学んだ。UNIS-UN 2024では、“Equal Rights Equal Heights: Climbing the Ladder of Gender Equality”のテーマのもと、ジェンダー平等の知見インプットと文化交流を実施。また、国連関係機関での対話を通して、グローバルイシューについての理解を深め、自分たちが行ってきた学びの成果を発信・提言した。



併設中学校からの内部進学生(一貫生)は、中学時から様々な取り組みにより「発信すること」や「会話・対話すること」にはそれほど抵抗がない渡航生徒が多かった。渡航チームの中では、高校から入学した生徒(高入生)も、一貫生から影響を受けて発信や対話への抵抗感は薄かった。一方で、両者ともに自分の探究活動に自信を持ち、成果や気づきを他者にアピールすることや、新たな協働関係を構築していくこと、相手の話を傾聴することには課題があったと言える。知っている相手との対話という枠組みから飛び出し、渡航先で同じ志を持つ仲間と関係構築をできるようなスキルと自信を得られることが1つの課題であった。

また、教育課程の変更によって放課後時間が減少する一方で、本研修では無数のタスクが同時に進行するため、十分な思案の時間が確保できない懸念があった。目標から逆算をし、発散させた考えを他者とのすり合わせの上、収束させる適切なタイミングを学んでいく必要があった。

- ① 自分の探究活動に自信を持ち、英語で発信して意見交換を行うこと。特に「聴くこと」について、単なる英語のリスニングに終始しない、相手が話しやすいような積極的傾聴を実践すること。
- ② チームマネジメントについて、到達目標から逆算的に計画をしてモジュール化すること。また、チーム内外の関係者と協力してそれらを解決していくこと。

「このプロジェクトは自分たちの力でミッションを達成するものである」という信念のもと、①②の課題について直接的に伝えることはせず、係の生徒に暗示的にフィードバックをしながら方針をすり合わせ、前述のような事前研修をデザインさせた。

成果として、連絡調整については、先方から打診がない限りは生徒たち自身で行うことができた。また、今年度の渡航チームで特筆すべきは、プレゼンテーションやスピーチの英語化であった。事前に数名が参加した新潟燕三条のWWL 生徒国際会議をはじめ、WWL2023 全国高校生フォーラムなどにかかる発表準備一式をすべて自分たちで完成させ、国連日本政府代表部及び本部若手職員に向けた発表についても、スライドや発表原稿の作成を極力自分たちで行った。ALT からの指導も自分たちから依頼をし、学校にいない時間も有効に活用した。

また Facebook 上にグループを作り、議事録の中でも優先度の高いものを投稿し、ジェンダーに関する記事や資料についてもまとめて掲載するようにした。個別の振り返りや学びの言語化にも活用している様子であった。

(4) 課題と展望

研修からの帰国直後は、参加生徒たちにとって、験を言語化して振り返ることが難しい様子であったが、自分の探究活動などを通して校内の誰かの活動や地域還元しようという意識が感じられた。その後冷静になって分析をし、自分の探究発表・卒業論文作成や進路活動を通して、何度もNY研修を振り返っていた。他の学問や将来のあり方が大きく変わった生徒もおり、今後もNY研修が学校の中で影響力のあるものであり続けてほしい。

開校から10年がたつ今、NY研修を継続していく上では、いくつか課題が見えてきている。

○日本の他地域や、他国で起こっている災害などと東日本大震災の捉え方

本研修の渡航前に石川県で大震災が起こった。本研修の参加生を中心に募金活動が行われたが、それほど大きな動きにはできなかった。東日本大震災以降に起こった国内の災害や、2020年頃から続いた感染症、絶えず起こり続ける国内外の紛争・戦争を抜きにして、東日本大震災からの復興のみを発表し続けていくことについては違和感が残る。4期生の時にはいわき市の大雨被害からの災害復旧ボランティアなどが多く起こったように、目の前の困っている人の声に耳を傾けていきたいと感じている。

○多方面からの支援を受け、学校が10年間で成し遂げてきたことの整理と多方面への還元

国連関係者の中でも、特命全権大使にお取次ぎいただいたり、若手職員との懇談を調整していただいたり、震災から10年以上が経っても意味合いが大きいものとして取り扱っていただいている。また、本研修直前には、(株)アミューズ様より厚い支援を受けている。このようなご厚意を当たり前と思わず、自分たちが「与える側」になっていく覚悟を示していかなければならない。

○新しいゼミ体系とのつながりの持たせ方の整理

本研修生のカリキュラムから、探究ゼミの編成が改められた。7期生までのカリキュラムよりも、学問分野とのかかわりに焦点が当たっている。以前のカリキュラムでは、福島県の復興における課題としてゼミ名が整理されていた分、新しいカリキュラムでは、隣接・関与する学問分野の整理と、概念的な理解・整理が必要になってきている。探究活動の最終発表会が前倒しとなり、NY研修について、探究活動のプロセスの中でどのような位置づけになるのかを整理しなければならない。

3. 4. 3 広島研修

福島の復興を目指し学ぶ私たちは、原爆被爆から復興し、核無き世界を目指して世界に発信をし続け、歴史的使命を果たしてきた広島の在り方から、多くのことを学ばなくてはならない。未来創造探究をより深化させ、未来を切り開く一歩とすることを目指し、広島県立広島国泰寺高等学校と連携して下記の通り広島研修を実施した。

(1) 日程・参加生徒

10月25日から27日の2泊3日で行った。本年度は1年次13名(引率2名)が参加する大規模なものとなった。内訳は男子2名・女子11名であった。

(2) 事前学習

事前学習として本校と協定を結んだ早稲田大学との協働で開催した1F地域塾に生徒が参加した。戦災からの復興を果たした広島に学びに行く前に、福島県・浜通りが抱える原発事故および廃炉事業が抱える問題と未来について考察することを目的とし、9月28日に1F地域塾の中で福島第一原子力発電所の視察および参加者とのディスカッションを行った。

地域塾は本校を会場とし、地域の方や大学生、専門家や事業者(東京電力)が参加した。全体会で基調講話を聴いたのちグループに分かれて意見を出し合い、最後に分科会で出された意見を共有した。

(3) 実施内容(10月25~28日)

25日：広島国泰寺高校との交流

26日：平和記念資料館、基町高校との交流

27日：カクワカ広島での学習

初日は広島国泰寺高校へ赴き2年生の授業に混ぜてもらい新エネルギーについてディスカッションを行った。新幹線の遅れにより学校到着が遅れたが、授業では福島の現状についての話だけではなく放課後の交流会で自分の探究を基にした交流を行った。

2日目は平和記念資料館を見学した。朝から外国人観光者がとても多かった。今回はふくしま学(楽)会でもお世話になった早稲田大学4年生の高垣さんに平和記念公園内を案内していただいた。『爆心地』や地下の倉庫跡(直下にありながら1名だけ生き残った場所)など普通では飛ばしてしまうような場所まで案内していただきました。公園内は崇徳高校さんとともに移動し、この後は新聞部さんより取材を受けた。

数時間の広島自主研修(この短時間で宮島見学を強行した生徒も!)も行うことができた。時間帯も事前に調べていたようで、積極的に研修を楽しんでいた。

2日目の午後は基町高校さんとの交流会を行った。今

年3月に福大のシンポジウムで出会った大学生から『原爆の絵』の活動を聞き、福大の久保田先生に繋いでいただいたご縁で実現することができた。『原爆の絵』とは被爆体験者からお話をお聞きした高校生(美術を専攻している生徒)が被爆者体験者と何度も話をしながら作品制作をして、原爆の体験を絵画を通じて後世に伝える取り組みである。記憶の伝承・継承という観点での交流で本校の生徒にとって想像以上の学びがあった。実際の作品を鑑賞しながらの交流で、作品制作をした高校生が絵の解説をしていただいたが、『自分の作品』ではなく、証言者さんの作品と表現していたことが印象的だった。



3日目は『ハチドリ舎』でカクワカ広島さんから「グローバルヒバクシャ」についての講義をいただいた。「グローバルヒバクシャ」とは広島や長崎での核被爆による被害だけではなく、各実験場周辺や処理水による被害など様々な地域の実態を学び合いながら連帯していこうという言葉である。ロールプレイングを活用したワークショップを通じて、福島の問題を福島だけの論理で考えるのではなく、グローバルな視野で考える学びとなった。



3. 6 社会起業部の活動

社会起業部（本部）は双葉郡や福島県を「知る・伝える・盛り上げる」をモットーに他県から訪問する高校生・大学生と交流活動や動画製作等をしている。ここ数年は県からの補助金（チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業）を得て、夏季に一泊の研修（宮城で津波学習・栃木で足尾銅山鉱毒事件学習）、冬季に二泊三日の研修（2024年沖縄研修・2023年水俣研修）を行っている。

（1）地域を知る活動

「双葉郡スタディツアー」に参加。来週取り壊されるという双葉町の半谷さんのお宅訪問等。

（2）地域を伝える活動

「双葉郡ツアー」の手伝いや他県の学生との交流を行った。交流相手は以下の通りである。横浜市の緑ヶ丘高校（7月22日）、滋賀県の川瀬高校（8月20日）、早稲田大学の大学直営国際学生寮 WISH の学生さんたち（8月22日）、茨城県の取手松陽高校（オンライン。12月10日）、復興庁「福島県浜通り被災地視察ツアー」ワークショップを手伝い全国の中高生と交流（12月15日）。

（3）地域を盛り上げる活動

お買い物チャンネル「QVC」さんが製作する、福島の商品 PR 動画撮影に社会起業部として協力。

（4）県外研修

①栃木研修

7月25～26日、足尾銅山などをフィールドワークするため栃木研修を行った。事前学習として下野新聞特集「アカガネのこえ」を読む。当日も下野新聞およびとちぎTVより取材を受けた。

精錬所跡、環境学習センター、足尾銅山観光へ訪問した。移動中、下野新聞の伊藤さんの案内で箕子橋堆積場も視認できた。まさしく集落の真上にあり、地震などで崩壊したらとんでもないことになることが分かった。

廃棄物処理場や現在も出続けている鉱毒水の問題など、原発の問題との類似点を随所に見つけることができた。

二日目は浪江出身で本校の前身の一つである、双葉高校卒業の田中えりさんから震災のお話を聞いた。

②沖縄研修

12月22～24日、普天間基地・辺野古海岸問題を考えるため沖縄研修を行った。一日目はほぼ移動日、二日目は株式会社さびらのYさんに案内していただき、沖縄戦跡の嘉数高台公園、普天間基地、95年に米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学のフィールドワークを行った（写真は普天間基地）。



午後は美ら海水族館で中国人観光客に福島県のアピールをしたのち、辺野古海岸に向かった。海岸がフェンスで区切られ警備の方が哨戒していた。フェンスの向こうがキャンプ・シュワブで日本の主権が及ばないこと、埋め立てが行われていることなどを確認した。新旧の集落を歩きながら、沖縄本島の経済格差や辺野古の歴史について話をした。経済的に劣位に置かれているため、埋め立てを望む住民がいる点は福島などの原発誘致と似ている。三日目は摩文仁の丘、ひめゆり平和資料館を訪問した。以下に生徒の感想を記す。

「沖縄本島の南／北問題、東／西問題（＝南／西が経済的に繁栄）は本土の縮小版のような、と。戊辰戦争で敗れて劣位に置かれている福島＝東北と似ている。両者とも NIMBY 施設を押し付けられているのは偶然？」

「キラキラした沖縄とそうじゃない沖縄と向き合う機会を得られた。過去は変えられない、未来は変えられるというけどこのままだと未来も変わらない。発信して協同して行動する必要を感じた」。

「沖縄戦で捕虜になって収容所に入ってから亡くなった人も多くいること、『震災関連死』と近いものを感じる。ひめゆり学徒隊の『短期間で戻れると思っていた』という言葉も双葉の伝承館でも聞いた」。

研修の詳細及び社会起業部の活動は右 QR コードの Facebook に記載してある。



3. 7 未来研究会

変革者としての生徒の資質能力の向上と、教員の指導力向上のために行われてきたのが本校の現職教育「未来研究会」である。地域・世界の中の学校として、どのようなカリキュラムが実現されるべきかについて、その具体策について教職員同士が議論を行い、外部から講師を招待しカリキュラムの実現に必要な知見を得る機会として開校当初から行われてきた。しかし、中高一貫校の本格導入となる令和4年度よりアカデミック系列では7校時授業が導入され、それに伴い生徒の放課後の活動時間が短くなることや会議の持ち方、本校教職員の多忙感の解消(Teacher's Well-beingの実現)などの問題点が顕在化しており、未来研究会の効果的な持ち方自体も引き続き検討されている。

(1) はじめに

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業が2年目を迎え、WWL事業の中核となる高度な探究と学校間連携を通じての学びのネットワークづくりの現在地を確認することから始めた。更に高度な学習のあり方や従来からの懸案事項となっていた文理融合型のカリキュラム開発や教科学習と探究の往還関係の構築により軸足を置く方向で未来研究会の重点目標を定めた。

(2) 実施内容

今年度実施された未来研究会は以下の通りである。

① 第1回未来研究会 (4月3日)

最初の未来研究会ではWWL事業への以降に伴い、WWL事業の趣旨や3年間のロードマップを確認した。特に、令和6年度は本校開校10年目となり、三島長陵校舎で学ぶJFAアカデミーの生徒たちが帰還する年である。また、令和7年度は東日本大震災から15年目となり、WWL事業の完成年度として高校生国際会議の実施やWWL研究成果発表会などの大きな行事も多くなる。まずは、WWL事業期間の3年間に関するロードマップと短期目標の確認を全体で共有した。



今回の未来研究会のテーマは「主体的に学ぶ生徒」とは？という問いを設定した。ふたば未来学園が育てたい「主体的な学習者」について、教職員間で共通理解を持

つことが今研修の到達目標である。「主体的な学習者」とはどのような姿なのかを具体的な事例に落としこむために、「ふたば未来学園が育てたい「主体的な学習者」とはどちらの姿か？」を話し合うワークを行った。

A: 毎日放課後職員室に来て、先生に質問をしに来る生徒
 B: 毎日放課後協働学習スペースに来て一人で黙々と勉強している生徒

ワークイメージの共有

抽象的な概念
 ↓
 具体的な事例



それぞれが持つ
 教員の
 指導(伴走)経験

A・B双方の生徒像を検討する中で、各教科の授業の中で先生個人の取り組みとして何ができるかを検討し、今年度はこれを目標に研究をすることを確認した。

② 着任者双葉郡課題把握フィールドワーク (4月3日)

午前の未来研究会終了後に、今年度着任者はバスで双葉郡のバスツアーを行った。ふたば未来学園で働く先生方に双葉郡が置かれている現状と地域復興の進捗状況を体験してもらったツアーであり、開校後毎年行われているものである。



富岡高校 校舎

③ 第2回未来研究会 (11月6日)

第2回目の未来研究会では、探究学習×進路指導(キャリア教育)をテーマに研究会を行った。探究学習に取り組んできた生徒が総合型選抜で苦戦している現状から、現状と問題事象の洗い出しに主眼が置かれた。

まずは進路指導部長の大谷先生から本校の進路指導についての話をいただき、中学校・高校の校種別にワークショップを行い、先生方が指導の中で体験したこと(事実)や具体的な問題意識や課題点(課題)、もっとこうしたいという具体的なアイデア(理想)の3点を考える視点としながら意見交流を行った。そこで出た意見を集約し、下の一覧票にまとめた。



探究学習×進路指導の関連の中で、特にポイントになる意見は以下のような内容であった。

- 自分の在り方、生き方をじっくり考える時間が欲しい。
今はインプットが多め。アウトプットも欲しい。でも忙しい。【1年4-6期】
- 高1で自己理解や自分を知る機会が少ない。
【1年4-6期】
- 探究のサイクルを回しながら自ら学び成長につなげられる生徒と、ゴールに最短で到達した生徒(探究に最初から意味を求めすぎている生徒)がいる。
【1年10-12期】
- 課題設定が社会課題や自分の進路に無関係なものが多い【1年10-12期】

<未来研究会後の課題整理>

○トップアスリート生への進路指導の難しさ。プロになれなければ何になる?【通年】

○志望理由書に探究の内容を書ききれていない【2年10-12期】

○「〇〇をやりました」に終始する探究が多い。参加したことが強みと勘違いしている生徒が多い。【2年通年】

○スポ生がすごく増え、必ずしもスポーツとつながらない進路希望者も増えたが、国公立の一般選抜を目指すカリキュラムが対応できない。総合型に頼らざるをえない?【3年通年】

○探究の評価指標と大学入試の評価指標のずれを感じる。【3年 探究と大学入試】

○アクション中心の探究で考察などの深まりがない。⇒志望理由に使えない【3年 探究と進路指導】

○探究テーマと学問との結びつきが弱い⇒志望理由に書けない【3年 探究と学問】

<次年度の方向性>

『自立した学習者』を育てるための方策

探究学習をコアとしながら、学校内のすべての教育活動が「探究」でつながっているカリキュラムを作ることを目指しており、生徒の「主体性」を高め自ら学びをとりに行く姿を意識しながらここ2年間の未来研究会を設計してきた。昨年の到達点として、学校の役割を明確にし、生徒が自らすることと線引きをすることの重要性を確認した。次年度はふたば未来学園の「探究指導の10年」を総括し、「探究学習は何を育てるか?」をテーマに研究・開発を進めたい。

■241106_未来研究会_課題整理

	高1	高2	高3
探究	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ設定が進まない ・つながりの確保が難しい <ul style="list-style-type: none"> - Will → Needs/Social - 中高接続 - 演劇→探究 - 探究→進路 	<ul style="list-style-type: none"> ・アクション、実践に到るのが難しい ・コンフォートゾーン(安全圏)にとどまっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・探究テーマが深まらない ／概念接続しない ・学部選びにつながらない ／活かし切れていない ・考えを深める時間がない ・活動、実績のみで浅い
進路	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解、将来のイメージが不足している ・系列内での対応の難しさ <ul style="list-style-type: none"> - TA:層の多様化 - 全:科目選択の狭さ、なさ - 全:探究→進路の接続イメージが無い 	<ul style="list-style-type: none"> ・志望理由書が浅い ・探究とどのように繋がるのか? ・指導側が入試方法をわかっていない ・どんな力が身につけていけばよいのか? ・外部イベント等に「参加」したことで満足している 	<ul style="list-style-type: none"> ・アドミッションポリシーなどの確認をしていない ・進路選択への当事者意識が薄い ・計画を立てられない ・志望大学の入試制度とのミスマッチ ・指導リソースの確保

短期的取り組み(半年~1年間)

企業-進路の継続協議/高1「人生」の指導計画策定(高2進路探究も?)/総合型指導法の開発

中期的取り組み(~2,3年間)

教育課程の見直し(個別最適化・複雑化)/行事精選など多忙化解消

第4章 連携校の取組み

4. 1 県内連携校の取組み

4. 1. 1 WWL事業連携校 【福島県立福島高等学校】の取組み

(教諭 柴田 香)

1. 本校の概要

1898年に開校した福島第三尋常中学校を前身とし、長らく男子校であったが、2003年に男女共学となり、2025年には創立127周年を迎える。高い知性、豊かな人間性、変革マインドを教育目標とし、自由闊達で進取の気風にあふれた校風が特徴となっている。代々受け継がれている「清らかであれ 勉強せよ 世のためたれ」という「梅章の教え」を表象しているのが、梅花をかたどった校章（梅章）である。梅は厳寒の風雪に耐え、百花に先駆けて開花し、その果実は広く薬用として人類のために役立ち、梅花は学問の神として信仰を集めてきた天神の象徴である。校舎前庭にある5本の梅の木は、2011年の東日本大震災後、同窓生の尽力により太宰府天満宮から恵与されたものである。それまで門外不出とされた太宰府の梅の木が贈られるのは歴史上初めてのことであり、生徒たちの心の拠り所となっている。



2. 連携校における特色ある取組み

本校の特色ある取組みとして、SSH事業と進路指導部の活動を取り上げる。

まずSSH事業は、2007年より4期連続でSSHの指定を受けており、先進的でユニークな教育活動を展開している。「探究活動と学修を関連付ける往還力」の育成を目標に掲げ、探究活動の中心になっているのが「サイエンスリサーチ（課題研究）」である。「SS探究（学校設定科目）」の授業では、一般の生徒は各個人で設定した課題について、スーパーサイエンス部に所属する生徒は部活動における自然科学的な研究についてそれぞれ取り組み、国内外の有識者や高校生を招く生徒研究発表会で研究成果を発表し、論文集にまとめることになる。この「サイエンスリサーチ」を主軸に、1年次には「フィールドワーク」を実施して県内各地区で課題解決に取り組む企業や大学などで研修を受け、探究力、研究力、傾聴力、発信力を養い、「ディベート」では論理的思考力を養う。そして3年次に行う「グローバルサイエンス」では、海外の研究者による専門分野の講義を受け、国際感覚や表現力を養う。以上が代表的な取組み事例の一部であるが、これ以外にも個人の興味関心に応じて選択できる講座や企画を多数開講している。

進路指導部の活動では、「リベラルゼミ」と「医学コース事業」について取り上げる。「リベラルゼミ」とは、希望者を対象に、様々な分野の研究者や

専門家から文理融合型の実践的な知を育む機会とする本校独自の取組みである。また、2022年より県立高等学校に導入された特色あるコース制において「医学コース」の指定を受けている。本校では、県内医療機関と連携した若手医師による講演会や医療現場体験、県医大との連続講座など、1年次から2年次にかけて一貫した独自の教育プログラムを実施している。その他にも、生徒の進路目標実現に向けた進路指導戦略会議や教員研修会の機会も数多く設けており、生徒の学力向上の一助になっている。

3. 課題と展望

本校は国内外の大学、研究機関、企業、高校と連携した先進的な取組みを数多く行っており、地域社会全体の教育レベルの向上や社会問題の解決に向けて先導的な役割を担ってきた。これにより、生徒の選択肢は広がり、多様な教育活動を実現している。しかし一方で、この多様な教育活動により教員の負担が増え、生徒は与えられた選択肢を選ぶ機会が多くなるため、主体性の低下につながるという課題も浮上している。このような状況を改善するためには、一つの教育活動の質を高め、同時に内容の精選も不可欠である。例えば、これまで教員が主導してきた校内行事や独自の企画の一部について生徒自身で企画・運営するなど、身近なところから段階的に取り組みを進めることが改善案の1つとして考えられる。時間はかかるかもしれないが、生徒が試行錯誤の過程を楽しみ、友人と議論を交わしながら課題解決に取り組むことができるよう、生徒も教員も余裕をもって教育活動に取り組むことができる体制を構築することが大切である。

今後、本校が創立以来培ってきた「自由」の精神の下、先行きが不透明で、将来の予想が立たない社会を生き抜くために、本来福高生が持ち合わせている「常識を疑い、自ら考え判断する力」を伸ばしていけるよう、生徒に「与える」だけでなく生徒から「引き出す」教育について検討を重ねていく必要がある。

4. 1. 2 WWL事業連携校 【 福島県立安積高等学校 】の取組み (教諭 阿部 健太郎)

1. 本校の概要

1884年に開校した本校は、本年度で創立140周年を迎えた。安積の精神として「開拓者精神」「質実剛健」「文武両道」を掲げ、「全人教育を目指し、知・徳・体を錬磨し、次代を担い、人類に貢献できる、志高く有為な人材を育成する」ことを目指している(図1)。



図1 安積健児の像及び安積歴史博物館(旧本館)

2. 連携校における特色ある取組み

本校は文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定されている。令和6年度からⅢ期(令和6年度～10年度)となり、文理融合基礎枠・実践型として「チーム安積モデルによる地球的課題解決に向けた国際共創力を有する科学技術系リーダーの育成」を研究開発課題に据えて各種事業を行っている。

本校では、生徒全員がSSHに取り組んでいる。その中でも、生徒は対話型論証を基盤とした探究活動を進めることとしている。教員は国際的な取組みを含む探究活動に関する教育プログラム開発により、また、地域社会・卒業生は広範囲にわたるネットワークにより生徒の活動・教員の研究開発を支える。生徒、教員、地域社会・卒業生の連携という「チーム安積モデル」の運用により生徒の「国際共創力」を育んでいく(図2・3参照)。

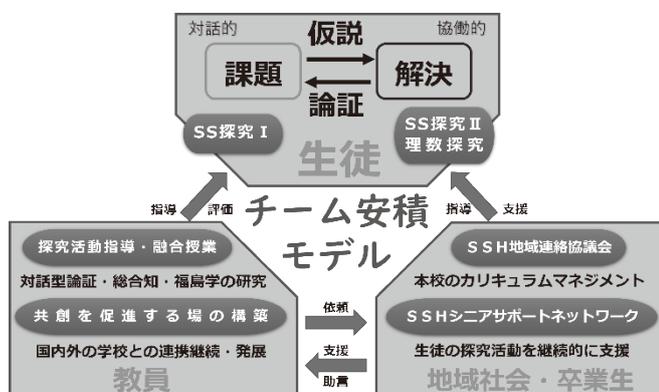


図2 Ⅲ期申請ポンチ絵より



図3 Ⅲ期申請ポンチ絵より

令和6年度は、研究開発テーマ・内容の中でも、テーマⅣ「国内外の学校との交流の継続・発展及び福島を学び共創を促進する場の構築」に力を入れてきた。これは、他校との協働事業や、国外の学校との連携、交流について継続・発展させるもので、「Fukushima」の知名度を活かし、課題先進地域からの課題を学ぶ「福島学・福島復興」をテーマの一つとし、本校が福島県の学びの入口(ゲートウェイ)となるように取り組むものである。なお今年度は、インド(図4)、フィリピン、台湾へ渡航。5年目の交流となるドイツの高校生を受け入れを実現できた。



図4 DPSジョードプル校を訪問しての交流会

3. 課題と展望

本校のSSHは、WWLと親和性が高いように思える。もちろん中心にあるのは「理数教育の推進」ではあるが、文理融合基礎枠利点を活かし、例えばSSHではない近隣の学校に本校の発表会に来てもらい、福島復興や国際交流の探究活動のポスター発表を行ってもらっている。また、海外の高校生を福島に招いた際は、本校生と浜通りを訪れてもらい、福島復興について共に考えてもらうという、いわば「安積高校ホープツーリズム」的な企画も行っている。これ自体はとても意味のある企画だと思うが、ここに浜通りに立地する高校にも加わってもらえば、よりよい企画になるのではないか。ふたば未来学園と連携ができれば、それも実現できるように思う。

さて、本校は令和7年度に併設型中学校が開校する。SSHの先輩でもある県北の福島高校はもちろん、会津学鳳中高やふたば未来学園中高とともに、福島県の県中の拠点として、今後も魅力ある取組みを行っていきたい。

4. 1. 3 WWL事業連携校 【 福島県立会津高等学校 】の取組み (教諭 遠藤 俊太郎)

1. 本校の概要

本校は、校是「好学愛校」「文武不岐」のもと、会津地区の進学指導拠点校に位置する普通科単位制の高校である。高い知性と豊かな人間性を育み、論理的思考力やコミュニケーション能力、リーダーシップを身に付けることにより、日本や世界で活躍できるグローバルリーダーとなりうる、自律的な生徒を育成することを目標としている。単位制の特長を生かした多様な学びと、大学等と連携した探究学習から得られる高度な学びの実現を目指している。

生徒の希望する進路の実現のために、「高い志」や「目標」を持たせる取組み、興味・関心を持たせ視野を広げる取組み、多様な学びの実現と学力向上への取組みに力を入れている。医学コースにおいては、医学分野への関心を高め医師としての人間性を醸成することや、医学部進学に向けた学習指導・進路指導等の取組により、将来本県で活躍できる人材の育成を目指している。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 「高い志」や「目標」を持たせる取組み

現役大学生(卒業生)による講演やOB・OG講演会などを行っている。令和6年度は会津こころと脳のクリニック院長の後藤大介氏(第43回卒)を招き、「行動とこころを整える—こころを育み、護り、鍛えるためのマインドセットとは—」という演題で全校生対象に講演を行った。

(2) 興味・関心を持たせ、視野を広げる取組み

大学教授等による出張講義やオープンキャンパスへの参加、大学等に出向いての最先端研究実習体験などを行っている。令和6年度の大学講座においては、1・2学年対象に、全16講座に分かれて大学教授等による出張講義を実施し、より専門的な学問に触れ学ぶ面白さを体感させるとともに、大学進学への意識を高める取組みを行った。また、希望生徒対象による山形大学訪問など、進路実現のための資質・能力の育成を行っている。

(3) 多様な学びの実現と学力向上への取組み

・総合的な探究の時間における探究活動について

総合的な探究の時間を通じて「自ら課題を見つけ、自ら解決策を模索し、1人で歩き出す生徒の育成」を目標として、全教員で指導に当たっている。1学年では、「子ども」「観光」など9つのグループに分かれ、地域課題の解決を目指すグループ探究を実施している。2学年では、希望進路と関連した会津地域の課題を生徒一人ひとりが発見し、その解決を目指す個人探究を実施している。

・医学コースプロジェクトについて

会津医療センターにおける医療体験セミナーや、医学部現役学生による講演・座談会などを実施した。2年次の総合的な探究の時間とも連携し、個人で地域の医療課題解決に向けた探究活動を実施している。

・DXハイスクール事業について

令和6年度より、文部科学省の高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)に採択された。総合的な探究の時間におけるデータサイエンスの充実を図るため、アクセンチュアによるデータサイエンス講座の実施や、電子黒板や大型プロジェクター、3Dプリンタ等の機材配備を行った。令和3年度から実施してきた「ICTを活用した新しい時代の教育研究開発事業に係る指導力向上開発校」としての実践を引き継ぎ、Google Workspace等を活用した新たな教育指導プラットフォームの構築や、教職員ポータルサイト等の充実による校務の効率化を行っている。



・そのほかにも、日々の授業の質を高める教員の授業研究に加え、長期休業中の補習や予備校講師による特別講座、個別添削指導などを通じて、生徒の学力向上を図っている。

3. 課題と展望

・進路実現に向けた指導について

大学入試における総合・学校推薦型選抜など、入試形態が多様化しており、コンピテンシーベースでの資質・能力の育成や、それに向けた指導体制の構築が求められている。総合的な探究の時間も含めて、より有効な全体指導・個別指導の在り方を模索していく必要がある。

・探究活動における外部との連携について

探究活動の成果を発表・共有する場として、校内での課題研究発表会を実施している。探究活動に際して大学や行政、専門機関などと連携したり、指導助言を受けたりする機会が少なく、課題発見能力や情報収集能力、分析能力を高める機会として、こうした外部との関係構築をより一層進めていきたい。

1. 本校の概要

本校は平成19年に会津学鳳中学校を併設して、県内初の公立併設型中高一貫教育校となった。中高一貫教育による進学型のプログラムを総合学科の中に組み込んだ特色ある教育を展開し、今年度で18年になる。

教育目標に「国際化、情報化社会に夢拓く力の育成」を掲げ、中学校から高校までの6年間を計画的・系統的な教育課程を設定している。また、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定 (Ⅲ期目) を受け、理数教育を中心に様々な研究機関や大学などと連携して課題解決型学習を展開している。

SSHⅢ期目の研究開発としては、Society5.0 や高度情報化の時代の実現、そして持続可能な社会に貢献する人材の育成のため、事業テーマ「サステナビリティ」及び「Think Globally Act Locally」を掲げている。会津から世界を創造する科学者として必要な資質・能力の向上を図る取組を行い、そのために必要な中・高・大の教育プログラムの研究開発を行うことを目指している。

SSHによる教育課程上の特例については、高校1年生対象に「SSH産業社会」、高校2・3年生対象に「SSH探究」を開設し、全員が履修して探究活動を行っている。探究活動は地域に根差した探究活動を行う「GS (グローバル探究) コース」とそれに加えて高度な理数探究活動を行う「SS (サイエンス探究) コース」に分かれており、生徒は自らの希望によって所属コースを決定している。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 高大連携協議会 (会津大学・会津大学短期大学部)

会津大学・会津大学短期大学部と高大連携に関する協定を交わし、高大連携協議会を設置している。主な事業は、大学教員等の本校への講師派遣「スポット講義」と本校生徒が大学、短期大学の授業科目を受ける「講義聴講」である。今年度は「スポット講義」を8講座実施した。また、希望者を対象にした「講義聴講」は、高校在学中ながら講義を聴講することができ、高校の修得単位に加えることができるうえ、会津大学・会津大学短期大学部に進学した場合、その単位が大学の単位として認められる。これらの事業に加え、今年度も高校1年生「GS (グローバル探究) コース」課題研究の中間発表会に、会津大学短期大学部の学生16名が助言者として来校し、生徒の発表内容についてアドバイスをした。高校2年生の課題研究中間発表では、短期大学部の先生8名が講師として来校し、生徒の発表に対して助言をいただいた。

(2) 地元企業との連携をいかした課題研究

高校1年生「GS (グローバル探究) コース」では、地元会津地区の各自治体や地元企業との連携をいかして、課題研究に取り組んでいる。その他、会津地区の高校生が地域企業からの課題に対し、自分たちの考えや解決策の意見交換をくり返して解決策を見出す「高校生による会津地域活性化プロジェクトALMS」を立ち上げ、約20社の地元企業や自治体の協力を得て地域に根ざした活動をしている。今年度は、会津高校とザベリオ学園高校の生徒とともに、大きな3つのテーマを設定し、それに基づいて探究活動を行い、成果を発表しただけでなく、会津若松市へ提案を行った。

(3) 理数教育の拠点校となる探究活動

理数系部活動「SSH探求部」では、全国総合文化祭で4部門に出場し、化学班は文化庁長官賞を受賞した。また、「日本学生科学賞」においては、化学班が文部科学大臣賞を受賞した。さらに「SSH探求部」は「野口英世賞」などで受賞するなど全国規模の大会で活躍している。

会津地区の高校生と協働して「あいづアート&サイエンスフェア」を開催したり、本校中学生とともに「小学生のための科学実験講座」を実施したりして小学生に自然科学への興味関心を育てる活動など地域の理数教育の振興に尽力している。

(4) 国際性を高める事業

海外研修として台湾の高校「建国高級中学」との交流を行っている。今年度はオンラインや現地での交流だけではなく、本校に建国高級中学の生徒を招き入れ、交流を深めた。これにより科学の国際性と実践的な語学力、情報発信力及びリーダーシップの育成を図り、世界で活躍できる科学技術者の資質の育成を目指している。

3. 課題と展望

本校の特色ある事業は、SSH事業の拡大とともに広がりを見せているが、担当者の負担軽減と働き方改革の実現のため、組織的で持続可能な事業への展開が求められている。今後は、事業の精選を行いながら、会津大学や会津大学短期大学部との連携をより深め、探究活動におけるメンター制などを確立することや、地域企業や自治体との協力体制を確立し、生徒の探究活動を校外で推進していくなど、外部機関とより有機的な連携を図っていくことが必要である。

1. 本校の概要

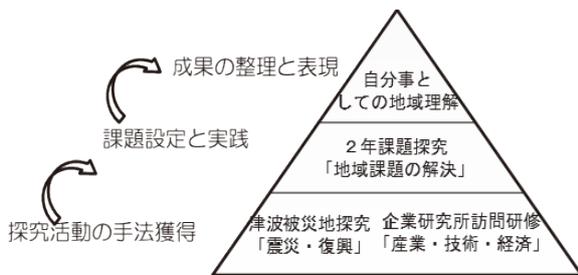
本校は令和5年度にWWLコンソーシアム構築支援事業における事業連携校となり、拠点校であるふたば未来学園中学校・高等学校や県内の他の連携校とともに探究活動の深化・実践に取り組んでいる。

また、平成30年度から「福島SIH」に指定されており、「地域の復興・未来の創造に向けて先端的研究に啓発する人材育成プログラム」をテーマに、浜通り地域・日本・国際社会で活躍できる人材の育成を目指している。

2. 連携校における特色ある取組み

本校では、次の【図1】のように探究の深化の流れを整理することで、各活動を有機的に関連させながら取り組めるようなプログラムを計画、実施している。

この深化イメージに基づき、本校では地域理解に



【図1】 探究活動の深化イメージ

向けた探究活動である『地域理解探究』を軸として、以下のように学年ごとに特色のある活動に取り組んでいる。

(1) 津波被災地区探究活動(1年次生)

津波の被害や震災当時の状況を調べる事前学習後に現地研修を行い、いわき市の久之浜地区と薄磯・豊間地区に分かれて被災した場所の見学や語り部の方の講話拝聴、復興関連施設の見学をした。現地見学後は実際に見聞きした被災地域の課題に対する解決策をグループで考察・検討し、ポスターにまとめてクラス内で発表を行った。



(2) 企業研究所訪問研修(1年次生)

いわきアカデミアや福島イノベーション・コースト構想推進機構などの関係機関と連携しながら、いわき市内の16企業・事業所に協力をいただき、課題探究、現地研修、校内発表会を行った。生徒は8コースから一つを選択し、各企業・事業所から事前に提示された課題について調査・研究を行い、現地研修時に現場見学や講義と併せて課題解決に向けた

仮説や提言を報告した。その際に各企業・事業所の担当者から報告内容に対する講評をもらい、校内発表会でそれらを踏まえて改善した内容を改めて発表した。本校には医学コースが設置されていることから、8つのコースのうちの一つが、医学関連の2つの企業・事業所の活動に触れるものとなっている。

(3) 2年課題探究(2年次生)

1年次での探究活動をふまえて、福島県浜通り地域の課題である「人材確保」、「資源活用」、「復興」を探究活動のテーマとし、それに基づいた課題を見つけ、解決のための探究活動を行った。クラス内で、似た課題を探究したい生徒とマッチングを行い、活動単位を数人のグループとしてから話し合って課題を決定した。今年度は市役所や企業担当者、各種学校にも協力をお願いするなど、外部とつながる活動も見られた。クラス内での発表会ののち、初の試みとして今年度は全グループが本校体育館で発表を行った。活動を発展させ、駅前施設でイベントを実施したり、市のイベントで発表を行ったりするグループも出たことに探究活動の深化が感じられた。



(4) 地域理解探究(探究活動のまとめ)(3年次生)

3年次では、生徒一人一人がこれまでの地域理解探究の取り組みを論文にまとめ、振り返りを行うとともに全員が下級生に向けて発表会を行った。発表会は、3年次生がこれまでの探究活動を振り返るためだけではなく、下級生が3年生の行った探究内容を知ること、自分の探究の方向性を見出す目的もある。さらに、探究活動をもとに志願理由書を作成したり、進学に関する講演会を設けたりすることで、探究活動が進路選択や実現に結び付くような取り組みを行った。

3. 課題と展望

1年次の活動では「課題探究型」の探究活動のみになっているが、生徒の進路との接続やキャリア教育の観点から、「興味関心型」の探究活動も導入したい。2年次の「課題探究」においても、今年度は地域課題のテーマから選ぶ探究活動であったが、生徒の興味・関心に基づいた探究活動が循環して「地域課題解決」に結び付くことが予想されることから、地域についての探究という縛りを無くして生徒が自由に課題を設定できるような取り組みとしたい。さらに、進路活動と探究活動をどのように接続していくのかも検討課題である。

4. 2 県外連携校の取組み

4. 2. 1 WWL事業連携校 【 宮城県仙台二華中学校・高等学校 】の取組み

(主幹教諭 尾形 広道)

チョウタイン第1高校の生徒と一緒に

1. 本校の概要

本校は明治37(1904)年に私立東華女学校として創立し、その後県立の宮城県第二高等女学校と合併、昭和23(1948)年には、学制改革により宮城県第二女子高等学校と改称、数多くの有為な人材を世に送り出し、今年度創立120年を迎えました。また、男女共学、併設型中高一貫教育校の仙台二華中学校・高等学校として大きく生まれ変わり、現在では国際バカロレア(IB)校としても知られています。

校舎は仙台市の中心地に位置し、仙台駅から徒歩15分の立地です。創立以来の文武両道の精神と、自由で明るく親しみやすい生徒の気質、地道ながらも誠実で礼儀正しい伝統の気風は現在も受け継がれています。

2. 連携校における特色ある取組み

特色ある取り組みとしては1)課題研究 2)国際交流 3)国際バカロレア(IB)類型があります。また海外からの留学生の受け入れも行っています。

1) 課題研究

「地球環境」をテーマとした探究学習をさらに追究し、学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」において「世界の水問題」を解決するために国際的な課題研究に取り組んでいます。毎年2月には校内で課題研究発表会を行います。その他にも様々な学会やシンポジウムに積極的に参加し、研究成果を発表しています。



令和6年11月
観光レジリエンス
サミット(仙台)
での発表

2) 国際交流

昨年度に引き続き高校2年次生徒は、研修旅行で台湾を訪問しました。故宮博物院、九份・十分と行った観光地だけでなく、タイヤル族という原住民の村を訪問し国際理解を深めました。今年度は、令和6年4月に発生した台湾地震の募金活動をJRC部と高校2年生の有志を中心に行い研修旅行中に現地関係者にお渡ししました。

「世界の水問題」に関連して、希望生徒が夏(雨季)と冬(乾季)にメコン川流域を訪問し約12日間のフィールドワークを実施しています。課題研究における現地調査が中心ですが、現地の高校との交流やホームステイも行っています。



毎年3月に、高校1・2年の希望生徒をアメリカ・デラウェア州へ派遣し現地の高校生と交流を行っています。また今年度は、希望生徒を台湾へ派遣し現地のIB校の生徒と交流を行います。

国際交流を通して、生徒は広い視野で物事を捉えるようになり、より良い社会を作るには自分は何ができるのかを考えます。

3) 国際バカロレア(IB)類型

令和3年4月よりディプロマ・プログラム(DP)が開始され、現在4年目を迎えています。東北で最初の公立高校DP校として県内外から多くの方が視察に訪れます。1年次の早い段階で希望生徒を募り体験授業や面談を通して選択したのち、2年次と3年次の2年間でDP取得を目指します。IB類型の中でも希望進路によって文系と理系に分かれ選択授業を受けます。授業は少人数で対話を重視して進めています。外国人の先生が英語で行う授業もあります。海外大学を含めて多様な進路に対応しています。

3. 課題と展望

併設型中高一貫教育校として、高等学校は課題研究、国際交流やIB類型といった特色を生かして魅力ある学校づくりを行う必要があります。そしてその魅力を県内外に発信することも重要です。

また、併設型の中高一貫校であるため高校から入学した生徒と一貫生徒で学習進度の違いがあります。教育課程や学級編成についても引き続き検討していく必要があります。

4. 2. 2 WWL 事業連携校 【山形県立東桜学館中学校・高等学校】の取組み

(研究課国際交流主任 山口 和彦)

1. 本校の概要

県内初の併設型中高一貫教育校として平成 28 年に開校した本校は、「高い志」「創造的知性」「豊かな人間性」を基本理念とし、次の 3 つを教育目標としております。①地域社会及び国際社会の発展に貢献しようとする高い志を育てる、②豊かな感性や探究心と論理的な思考力を基盤とした創造的知性を育てる、③心身ともに健やかで、郷土愛と公共の精神に富む豊かな人間性を育てる。6 年間の計画的・継続的な教育により、先進的な理数教育、国際理解教育を実践し、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るとともに、自ら学び、物事に挑戦する心を育み、グローバルな視点を持ちながら、地域社会や国際社会の発展に貢献できる力を育成しています。

平成 29 年に Super Science Highschool(SSH)に指定され、令和 4 年度より第 II 期に入り、「中高一貫教育校を核としたやまがたの未来を拓くグローバルな視点を持った科学人材の育成」のテーマのもと、課題研究「未来創造プロジェクト」の一層の充実を図り、特色ある事業にチャレンジしています。英語教育に関しても、株式会社アルクの Sherpa 研修により、金谷憲先生（東京学芸大学名誉教授）をアドバイザーとして派遣していただき、ディベートを中心にした 6 年間の英語教育研究開発を行っており、英語はもちろん、批判的思考・論理的思考の伸長を狙った授業を実践しています。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 国際英語プレゼンテーション大会の開催



ユネスコスクールのネットワークを通じて得たタイ、マレーシアの連携協力校を中心に、国内外の高等学校生を招待して探究活動の成果を英語でプレゼンテーションし、質疑応答も審査対象とする大会 START [ST(udy) A(ssembly)(of) R(esearch) (at) T(ouohgakkan)]を令和 4 年から主催しています。研究内容に応じて 5 つの分科会場でそれぞれに審査、表彰されます。3 年目となった START2023 も、オンラインと対面のハイブリッド形式で行い、ノンヒンウィッタヤコム中等学校(タイ)、ナレースアン大学附属中等学校(タイ)、SMKA コタキナバル中等学校(マレーシア)、国立臺北科技大學附属桃園農工高級中等學校(台湾)の 4 校が海外から、国内は兵庫県立豊岡高等学校、東海大学付属高輪台高等学校、東京都立多摩科学技術高等学校、新潟県立新発田高

等学校、岩手県立一関第一高等学校、秋田県立横手高等学校、宮城県立古川黎明高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立ふたば未来学園高等学校の他、県内から 4 校が参加しました。

(2) 英語で発表する機会の増加

2 年連続で WWL コンソーシアム構築支援事業である全国高等学校生フォーラムに参加させて頂いたように、英語で発表する機会を増やすことは本校の目標の 1 つです。令和 6 年度は、東海大学付属高輪台高等学校 SSH 成果発表会 (International SSH Presentation Seminar 2024), 2025 グローバル・サミット”Be a Bridge”(日本と台湾の高等学校生が社会課題の解決に向けたプレゼンテーションや討論会をする交流会;山形県教育旅行誘致協議会主催)に参加しています。2 月にはナレースアン大学附属中等学校(タイ)が成果発表会に再び参加し、口頭発表とポスター発表が部分的に英語で行われる予定である他、海外連携協力校のノンヒンウィッタヤコム中等学校(タイ)に 12 人の生徒が訪問する際に研究発表も行う予定です。

3. 課題と展望

研究発表を英語で行うにも、そもそもの研究内容が良くなければ、良い研究発表はできません。これまで研究内容をもっと改善するよう英語科からの要望があり、今年は英語とプレゼンの指導の前に、英語科と研究課で協力して事前指導を行うように改善を行いました。研究内容と発表の質は改善できつつあると思われていますが、今後も更なる改善方法を検討していく必要があります。

もう一つの課題はやはり予算です。海外との連携・交流を維持していくには予算が必要ですし、保護者の負担に頼っていれば、貴重な経験が一部の生徒の特権になってしまいます。市町村によっては海外研修を補助する制度がありますが、一部の市町村に限られており、多くの生徒に、いかにして国際交流の機会を提供するかが今後も課題となるでしょう。

第5章 外部連携

5.1 外部連携

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に移行して2年目となり、事業協働機関との連携がさらに深まった。代表的な事業協働機関についてまとめる。また、各年次における外部連携実績リストについては、前項3.5に掲載してある。

懸念事項としては、令和2年度から指定された「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）の3年間ではふたば未来学園と双葉郡による広域協働コンソーシアムを構築できていたが、探究における協力関係が安定しているものの拡大していないことである。既存の組織である双葉郡教育復興ビジョン推進協議会や福島相双復興推進機構、福島イノベーション・コースト構想推進機構との協働の在り方については、これまでの連携以上の取り組みを今後検討していきたい。

① 東北大学

東北大学とは令和5年3月に福島県教育委員会と東北大学高度教養教育・学生支援機構との間で教育連携協定を締結した。本協定により、WWL事業拠点校（本校）と県内事業連携校の生徒が東北大学の講座を履修できるアドバンスト・プレースメント（先取り履修＝AP）を実現するための協議が進められることとなった。

本年度は昨年を引き続き大学の先取り履修を整えるために、オープンバッジ（獲得した知識やスキルを証明する国際技術標準規格のデジタル証明書）の付与という形で実施される「学問論演習」というゼミ形式の授業に本校生徒6名が参加した。昨年度は1つの開設講座だったが、今年度は8講座まで講座が拡大し、高校生の受講の幅が広がった。10月の後期の授業で全15回の講義の後に、2月には東北大学で開催された学問論演習の発表会に福島高校、会津学鳳高校の生徒とともに参加した。

また、東北大学オープンオンライン教育開発推進センター（MOOC）のオンライン講座の推進など今年度も東北大学との連携を続けた。未来創造探究においては、理系分野の探究を中心に東北大学の教授から直接アドバイスを頂いたりするなど、個別の探究において連携する事例も作る事ができた。

次年度については、論文作成能力や論理的思考を育成するためのアカデミック・ライティング講座の開設を進めていきたい。

② 早稲田大学

早稲田大学とは早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターとの連携を継続している。毎年ふくしま学（楽）会を年2回開催している他、昨年度からはより地域住民と本校生と大学が協働の学びの場を作るために1F地域塾を年3～4回のペースで開催してきた。今年度は広島研修やドイツ研修に参加する1年次生を対象に1F視察を行うなど、それぞれの研修のシナジー効果を狙った。詳細については5.3を参照のこと。

③ 福島大学

福島大学とは地元の国立大学として未来創造探究における指導助言をいただくほか、未来創造探究生

徒研究発表会での審査員を毎年お願いしている。今年度は2年次の探究学習を進化させるために「専門知講義」の授業で福島大学の先生から講義を頂いたり、生徒の発表を聞き「壁打ち」をしていただくことで生徒の探究により磨きをかけていただいた。今年度は特に探究学習における調査アクションの精度を上げるため、データサイエンスに関する専門講義を行った。

令和7年3月には福島大学放射線副読本研究會主催の公開シンポジウム『未来へつなぐ原発事故・原爆の経験と教訓』に本校生徒が発表する予定である。

④ 福島国際研究教育機構（F-REI）

F-REIとは昨年以上の連携に取り組むことができた。昨年まで本校と会津大学が行ってきた留学生との交流研修をより発展させ、F-REIに共催団体になっていただき「ふくしま未来創造プログラム」として福島県立医科大学や福島大学、福島高専の留学生を巻き込んだプログラムを実現し、本校生徒23名（AFSの留学生1名含む）が参加した。このプログラムの中で、F-REIの山崎光悦理事長による特別講演や双葉郡フィールドワーク、成果報告会などを行った。

⑤ その他

「グローバル型」事業で協働してきた双葉郡教育復興ビジョン推進協議会や福島相双復興推進機構と福島イノベーション・コースト構想推進機構などは引き続き連携を進めた。特に、ビジョン協議会ではふたば未来学園での探究指導の蓄積を双葉郡の先生方に広めるための教員研修会を進めることができた。また、NPO法人カタリバ双葉未来ラボとの連携についても、教員研修機能を強化して県内外の先生方に向けての教員研修会を実施した。詳細は、5.4を参照のこと。

5. 2 外部連携実績

1年 「地域創造と人間生活」お世話になった方々

枠組	活動	日付	氏名	所属、役職	
1年 地域創造と人間生活	コミュニケーションWS	2024/4～7(計6回)	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC	1
		河野悟	NPO法人PAVLIC	2	
		北村耕治	NPO法人PAVLIC	3	
		小林真梨恵	NPO法人PAVLIC	4	
		西川悠理	NPO法人PAVLIC	5	
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC	6	
		菊池佳南	NPO法人PAVLIC	7	
		榊原毅	NPO法人PAVLIC	8	
		館そらみ	NPO法人PAVLIC	9	
		村田牧子	NPO法人PAVLIC	10	
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC	11	
	双葉郡バスツアー	2024/6/14	青木淑子	NPO 法人 富岡3.11を語る会	12
		森山和久	双葉町役場	13	
		森崎陽	リブルンふくしま(本校三期生)	14	
		明石重周	株式会社J-Village	15	
		宇名根良平	一般社団法人ふたばプロジェクト	16	
		山根光保子	一般社団法人ふたばプロジェクト	17	
		木村紀夫	大熊未来塾	18	
		井関耕平		19	
		谷田川佐和	大熊インキュベーションセンター	20	
		佐藤真喜子	大熊インキュベーションセンター	21	
		増子啓信	大熊町立学び舎ゆめの森	22	
		菅野孝明	一般社団法人まちづくりなみえ	23	
		玉野真喜	相馬双葉漁業協同組合	24	
		網谷信行	相馬双葉漁業協同組合	25	
	「1/10Fukushimaをきいてみる」	2023/6/25	古波津陽	映画監督	26
	演劇創作のための取材	2023/7/9	岡部翔太郎		27
		義岡翼	大熊未来塾	28	
		木村紀夫	大熊未来塾	29	
		井関耕平		30	
		武内優		31	
		宗像涼	NPO 法人 富岡3.11を語る会	32	
		西山栄子	NPO 法人 富岡3.11を語る会	33	
		熊坂隆浩	東日本大震災・原子力災害伝承館	34	
		花井真里奈	東京電力復興本社	35	
		玉野真喜	相馬双葉漁業協同組合	36	
		網谷信行	相馬双葉漁業協同組合	37	
		富川泰介	東京電力復興本社	38	
		木野正登	経産省	39	
	演劇成果発表会	2024/7/19	平田オリザ	芸術文化観光専門職大学 学長	40
わたなべなおこ		NPO法人PAVLIC	41		
河野悟		NPO法人PAVLIC	42		
北村耕治		NPO法人PAVLIC	43		
小林真梨恵		NPO法人PAVLIC	44		
西川悠理		NPO法人PAVLIC	45		
植浦菜保子		NPO法人PAVLIC	46		
宗像涼		NPO 法人 富岡3.11を語る会	47		
木村紀夫		大熊未来塾	48		
義岡翼		大熊未来塾	49		
武内優			50		
阿部翔太郎		株式会社ReFruits	51		
井関耕平			52		
熊坂隆浩	東日本大震災・原子力災害伝承館	53			
ヒューマンライブラリー	2024/12/10	岡森綾子	すえつぎcaf e	54	
	江尻浩二郎		55		
	猪狩遼	いわき市役所	56		
	小林奨	YONOMORI DENIM	57		
	谷田川佐和	株式会社Oriai(大熊インキュベーションセンター)	58		
	青木裕介	多世代交流スペースぶらっとあっと	59		
	下枝浩徳	東北工科大学、葛尾村	60		
	横須賀直生	おかしなお菓子屋さんLiebe	61		
国際理解講演	2025/1/21	高遠菜穂子	一般社団法人ピースセルプロジェクト	62	
プレ発表会	2025/2/18	横須賀直生	おかしなお菓子屋さんLiebe	63	
	池谷昭男		64		
	猪狩遼	いわき市役所	65		
	関野豊	株式会社ソニックプロジェクト	66		
	高木市之助	デザイナー／アートディレクター	67		
	下枝浩徳	一般社団法人葛力創造舎	68		
江尻浩二郎		69			
				70	

2年「未来創造探究」お世話になった方々

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職	
原子力災害・伝承探究ゼミ	2024.4	半谷 栄寿	NPOあすびと会	1
原子力災害・伝承探究ゼミ	2025.1	鎌田 健太	宮城県教諭	2
原子力災害・伝承探究ゼミ	2024.12	吉田 ゆかり	広野町町民	3
原子力災害・伝承探究ゼミ	2025.1	青木 淑子	NPO法人3.11を語る会	4
共生社会探究ゼミ	2024	高遠 菜穂子	イラク人道支援ワーカー・一般社団法人ピースセルプロ	5
共生社会探究ゼミ	2024	加藤直明	三島八幡神社	6
共生社会探究ゼミ	2024	日野涼音	認定NPO法人底上げ ならはこどものあそびば	7
共生社会探究ゼミ	2024	加賀龍哉	双葉地方広域市町村圏組合富岡消防署檜葉分署	8
共生社会探究ゼミ	2024	横山典生	双葉地方広域市町村圏組合富岡消防署檜葉分署	9
共生社会探究ゼミ	2024	山田 美香	福島大学地域未来デザインセンター	10
共生社会探究ゼミ	2024	小野浩久	檜葉町上井出区長	11
共生社会探究ゼミ	2024	森亮太	喫茶ヤドリギ	12
共生社会探究ゼミ	2024	鈴木 恵	広野町役場 環境防災課	13
共生社会探究ゼミ	2024	池頭 稔	CECジャパンネットワーク	14
共生社会探究ゼミ	2024.06.18	鈴木 愛	福島大学 教育推進機構	15
共生社会探究ゼミ	2024.06.18	加藤 穂高	福島大学 教育推進機構	16
共生社会探究ゼミ	2024.2.18	須賀亮平	JRいわき統括センター	17
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.17	安島 大司	株式会社マルト商事	18
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.17	仁井田 務	株式会社マルト商事	19
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.17	見城 周平	株式会社マルト商事	20
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.17	鈴木 裕子	株式会社マルト商事	21
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.15	南郷 市兵	大熊町立学び舎ゆめの森 校長	22
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.15	山口 麻弥	大熊町立学び舎ゆめの森 司書	23
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.15	渡辺 滝	大熊町立学び舎ゆめの森 こども園副園長	24
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.15	佐久間佳代子	大熊町立学び舎ゆめの森 職員	25
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.2.15	新妻 詩織	大熊町立学び舎ゆめの森 職員	26
地域社会・経済産業探究ゼミ	2024.7.2	川崎 興太	福島大学 教授(共生システム理工学類)	27
人間科学・文化・芸術探究ゼミ	2024.1.21	原田真之介	医療創生大学	28
人間科学・文化・芸術探究ゼミ	2024.10.8	遠藤	相馬市観光協会	29
自然科学・地球環境探究ゼミ	通年(複数回)	猪腰 考敏	環境水族館 アクアマリンふくしま	30
自然科学・地球環境探究ゼミ	通年(複数回)	松崎 浩二	環境水族館 アクアマリンふくしま	31
自然科学・地球環境探究ゼミ	2024.11.19	佐々木 猛智	東京大学総合博物館 准教授	32
自然科学・地球環境探究ゼミ	2024.11.19	三河内 彰子	明治学院大学	33
自然科学・地球環境探究ゼミ	複数回	松岡 俊二	早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・センター長	34
自然科学・地球環境探究ゼミ	2024.9.17	永井 祐二	早稲田大学 環境総合研究センター 上級研究員	35
自然科学・地球環境探究ゼミ	複数回	辻 岳史	国立研究開発法人 国立環境研究所	36
自然科学・地球環境探究ゼミ	2024.9.17	林 誠二	国立研究開発法人 国立環境研究所	37
自然科学・地球環境探究ゼミ	2024.8.20	内田 修司	福島工業高等専門学校 化学・バイオ工学科 教授	38
自然科学・地球環境探究ゼミ	2024.8.20	十亀 陽一郎	福島工業高等専門学校 化学・バイオ工学科 准教授	39
自然科学・地球環境探究ゼミ	2025.2~	根本 修行	ひろの未来館	40
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.9.3	寺田新	東京大学大学院総合文化研究科教授	41
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.6.24	保坂太雅	JFAアカデミー福島フィジカルコーチ	42
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.10.2	北園海	JFAアカデミー福島メディカルトレーナー	43
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.11.11	山本宏明	北里土井岳メディカルセンター	44
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.6.19	齋田良知	順天堂大学整形外科准教授	45
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.5	上原富弘	アップレイン代表	46
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.12~	裏出良博	アイトープ総合センター(医学博士)	47
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.6~	亀井奈津紀	ふたば未来学園栄養教諭	48
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.6~		JFAアカデミー福島栄養士	49
スポーツ医・科学探究ゼミ	2024.9.3	西嶋尚彦	筑波大学大学院名誉教授	50
				51
				52
				53
				54
				55
				56

5. 3 早稲田大学との協働

これまで生徒の探究学習において、地域での実践を加速できた一方で、学術的な知と接続することによる科学的概念への昇華（抽象的に思考し、転用できる概念的なものの見方・考え方の獲得）には課題があった。このことから、学知の接続を目的として2018年以降、早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターとの連携を重ねてきた。2022年には早稲田大学環境総合研究センターとの連携協定を締結した。

(1) 実施内容

①第10回1F地域塾

2022年7月、早稲田大学と福島県立ふたば未来学園中学・高等学校との協力協定に基づき、科学と政治と社会の協働による1F 廃炉の先を考える「対話の場」＝「学びの場」として1F 地域塾を開設（1Fは福島第一原子力発電所の意）。

6月14日午後、第10回1F 地域塾を本校会場で行った。座談会で以下の問いを立て、グループで話し合いを行い、次のグループ活動で話し合う問いも決めた。

問い

- ・記憶消滅に抗うために何ができる？
- ・事故遺構として何を残すべき？
- ・廃炉に関して文系理系の役割は何だろう？



グループでの話し合いで印象に残った意見を記す。

- ・（開沼博氏が「第1回災害記憶消滅世代認識調査」の分析で、15～18歳の世代を「震災記憶消滅世代」と定義づけたことに関して）なぜ消滅世代ってカテゴライズしたんだろう？ 忘れさせたいのだろうか？
- ・「廃炉とか興味持たなきゃいけないの？」っていうのも

わかる。でもナチスや水俣を学ぶように同じことを二度と起こさないためには必要。

- ・東電の方の話「東電の最大の教訓は「ここまでやったから安全だ、と思わないこと」
- ・事故遺構必要と言われるが、ともすると100年後も廃炉作業をしているかもしれない。廃炉作業そのものが稼働中の「遺構」では。

②第11回1F地域塾

9月28日に行った。午前は1Fで廃炉の様子を見学、広島研修を控える高校1年次生徒も参加した。

午後は本校で座談会を行った。グループの話し合いのテーマは「廃炉の多様な将来像」だった。参加者の感想を記す。

「全体会の内容共有の中で出た『若い世代を巻き込んでいく』という意見に違和感を覚えた。核のゴミやらデブリやら、上の世代の発電によって発生したツケに若い世代が『巻き込まれざるを得ない』という観がある。そもそも事故がなかったとしても原発の通常運転で出た廃棄物はこれから先来来来世まで面倒見ていかねばならない。考えてみると化石燃料は地球に蓄積されたものという点で過去を食べ物にしており、核燃料は未来に廃棄物処理のコストを次世代に残すという点で未来を食べ物にしている。廃炉の終わりは何だろう？ 更地にするというが、ということはデブリや建屋もまた、どこか別の場所に持っていく…『押し付ける』ということだろうか。世代間倫理にもとる。」

③第15回 ふくしま学（楽）回

地域塾に加え、世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島復興と廃炉について共に考える「対話の場」として「ふくしま学（楽）会」を開催している。第15回を1月26日、本校会場で開催する。テーマは「福島復興の過去・現在・未来：我々は何処から来たのか、我々は何者か、我々は何処へ行くのか」。

5. 4 コラボ・スクール（双葉みらいラボ運営及び未来創造探究カリキュラム開発支援）

認定NPO法人カタリバとふたば未来学園では2017年より協働し、放課後の居場所・学びの場「双葉みらいラボ」の運営と、未来創造探究のカリキュラム開発に取り組んでいる。

双葉みらいラボは校内中央に位置する地域協働スペースを活用し、生徒たちが放課後に集うコミュニティスペースとなっており、学校と地域の「潮目」の場所として大学生や社会人、地域の大人たちとの「ナナメの関係」に溢れた生徒にとっての居場所・学びの場となっている。

カリキュラム開発支援では各学年に学校支援コーディネーターを配置し、先生と協働しながら「変革者たれ」の実現に資する未来創造探究のカリキュラム開発等に取り組んでいる。

(1) 双葉みらいラボ

双葉みらいラボは、ふたば未来学園内の地域協働スペース内に設置され、毎日50名程度の生徒が来館している。カタリバのスタッフがコースワーカーとして常駐し、コミュニケーションを通して「安心安全なセーフプレイスづくり」「探究学習（マイプロジェクト）における生徒の主体的な学びのサポート」「地域・外部人材との出会いの創出」として機能している。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人などが年間延べ350名以上が来館し、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。



▲双葉みらいラボでの生徒の様子

(2) 「未来創造探究」カリキュラム開発支援

カリキュラム開発では主に高1、2年次に担当コーディネーターと伴走スタッフを配置し、先生と協働して授業設計、教材作成、生徒伴走、地域コーディネートなどに取り組んでいる。以下、今年度の主な取り組みと成果を記載する。

○高1：プチ探究×仮説検証の実施

探究のマイキーワードを決めたのち、11月より調査アクションを進めていく生徒に向けて目的と仮説設定をした上でアクションを行う形式でプチ探究を実施。仮説を持たせたことにより、新たな問いが生まれる場面が見られた。

○高2：振り返りを促す問いリストの活用

10月に実施した中間発表にて、生徒発表へのコメント時に「生き方在り方」や「生徒の変容」について質問するための問いかけのリストを活用し、生徒への自己内省を促した。実際に質問を受けた生徒からは「振り返ってみると～という考え方を大切にしていたかもしれない」など、生徒のメタ認知が促されたと思われる発言も見られた。

(3) 「探究研修センター」機能

探究学習をはじめとした取り組みのノウハウについて、県内外への波及を目的として単なる視察の受入に留まらず、「研修センター」機能の強化に取り組んでいる。以下、今年度の主な取り組みと成果を記載する。

○探究スタートアップラボ

カタリバが行った高校教員向けの調査では、探究学習を担当する教員の9割以上が、「伴走」や「校内体制づくり」に課題を感じていることが分かった。これらの課題に対して、ふたば未来学園やカタリバが連携する全国700校の学校パートナーから得られる知見や事例を還元しながら各校の課題解決を目指す、カリキュラム開発研修「探究スタートアップラボ（以下、本プログラム）」を今年度から実施した。

本プログラムでは各校につき管理職を含む3名程度の教員が、カリキュラム開発を担う「コアチーム」として年3回の対面研修やオンラインでのカリキュラム相談会に参加する。対面研修はワークショップを基本として、カタリバ職員がファシリテーションをしながら目指す学校像や生徒像の見直しやカリキュラム検討、研修間のアクションプラン作成などを進めた。今年度は福島県内7校・全国13校の20校約80人の教員が参加した。北は青森、南は沖縄から、校内におけるこれまでの取り組み具合なども様々な学校が集まった。

研修を通じて熱量ある対話が生まれ、多くの先生方がコアチームでの対話・議論の重要性を感じてくれた。また、本プログラムをきっかけに、「校内会議でコアチーム以外の教員とも議論を始めた」や「現状確認のために改めて授業観察をコアチームで行った」「研修で学んだ生徒伴走の観点を授業で試した」など、実際に校内でアクションに取り組む学校も生まれた。



▲探究スタートアップラボの様子

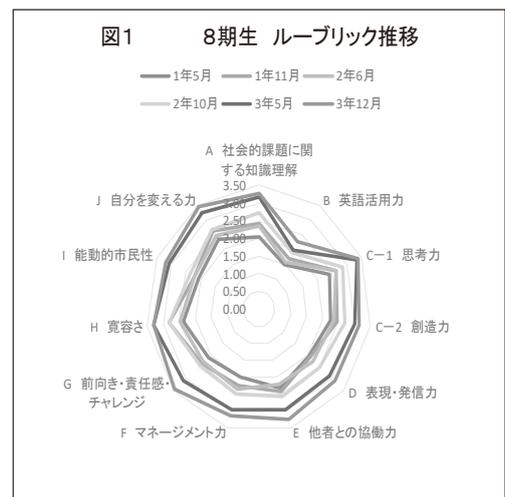
第6章 実施の効果とその評価

6.1 ルーブリック評価

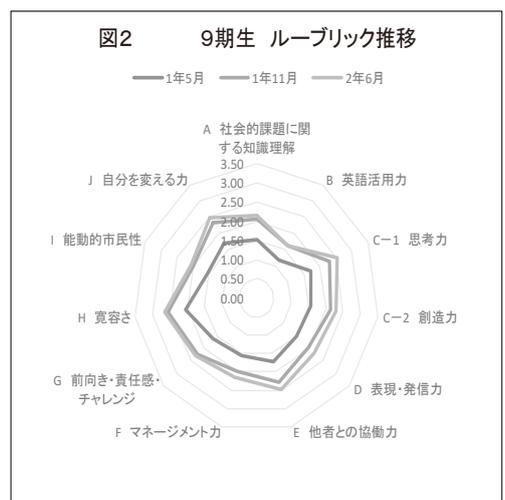
本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総合的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

(1) 8期生（令和3年度入学生）から10期生（令和6年度入学生）のルーブリック評価（表1～3、図1～3）

	1年5月	1年11月	2年6月	2年10月	3年5月	3年12月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	2.03	2.42	2.34	2.74	3.16	3.28	
B 英語活用力	1.50	1.71	1.55	1.89	1.98	2.25	
C-1 思考力	2.40	2.63	2.62	2.87	3.34	3.39	
C-2 創造力	2.26	2.47	2.35	2.71	3.02	3.15	
D 表現・発信力	2.04	2.10	2.24	2.50	2.90	3.11	
E 他者との協働力	2.32	2.44	2.24	2.58	2.98	3.27	
F マネージメント力	2.02	2.24	2.36	2.50	2.98	3.15	
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.08	2.36	2.28	2.42	3.10	3.47	
H 寛容さ	2.38	2.83	2.48	2.82	3.30	3.30	
I 能動的市民性	2.08	2.19	2.19	2.34	3.08	3.17	
J 自分を変える力	2.34	2.64	2.45	2.69	3.25	3.44	
平均	2.13	2.37	2.28	2.55	3.01	3.18	



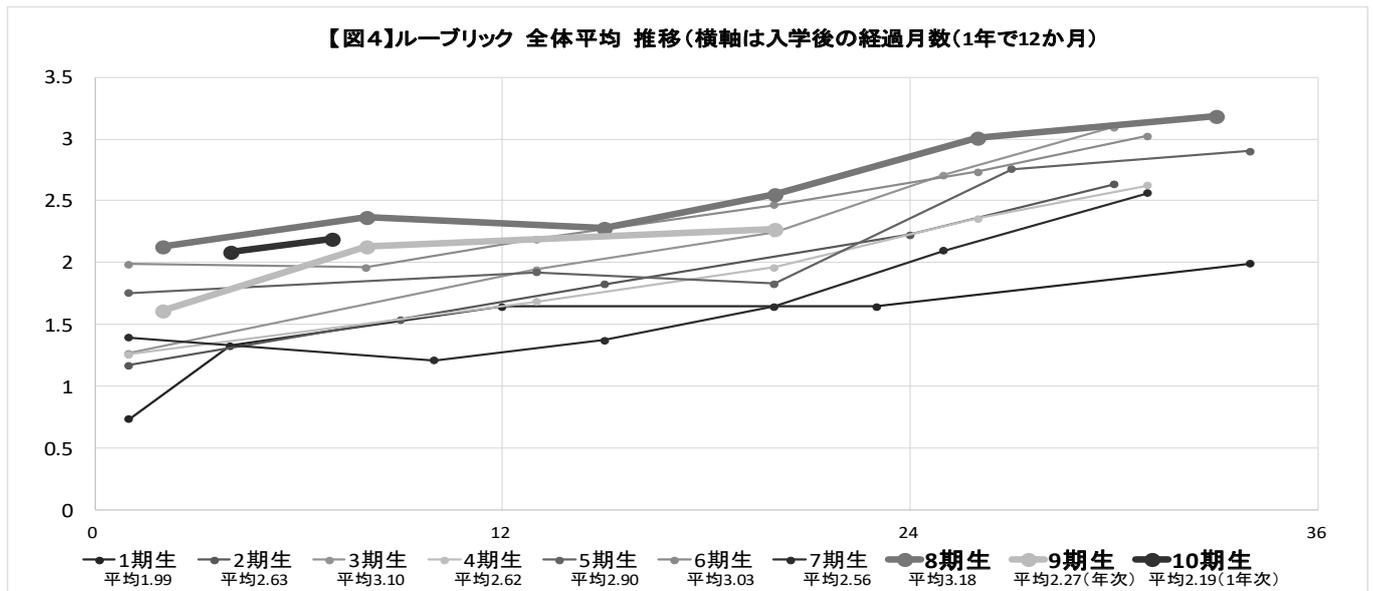
	1年5月	1年11月	2年10月			推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.51	2.05	2.16			
B 英語活用力	1.17	1.63	1.63			
C-1 思考力	1.71	2.31	2.53			
C-2 創造力	1.57	2.14	2.30			
D 表現・発信力	1.51	1.96	2.18			
E 他者との協働力	1.72	2.28	2.47			
F マネージメント力	1.56	1.99	2.16			
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.63	2.22	2.31			
H 寛容さ	2.06	2.56	2.66			
I 能動的市民性	1.55	1.99	2.05			
J 自分を変える力	1.70	2.31	2.49			
平均	1.61	2.13	2.27			



	1年7月	1年10月				推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	2.16	2.15				
B 英語活用力	1.36	1.56				
C-1 思考力	2.36	2.46				
C-2 創造力	2.21	2.29				
D 表現・発信力	1.93	2.02				
E 他者との協働力	2.18	2.39				
F マネージメント力	1.94	1.96				
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.11	2.19				
H 寛容さ	2.43	2.63				
I 能動的市民性	1.99	2.04				
J 自分を変える力	2.24	2.40				
平均	2.08	2.19				



(2) 1期生（平成27年度入学生）から10期生（令和6年度入学生）のルーブリック全体評価の推移（図4）



1～10期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを図4に示す。1～4期生までは1年次から3年次まで順調に値が高まっているのに対し、5～6期生は、1年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。6・7期生については、入学最初のルーブリックの数値よりも年度の途中でいったん数値が下がる傾向がみられる。これについては、1年次の演劇の学習を通じて、自分をメタな視点で見つめなおしたときに、「自分のできなさ」を厳しく現状分析できるようになったことに起因すると考えられる。8・9期生は中学校からの一貫生が入ってきた学年である。8期生はルーブリックの初期値が例年になく高い。中学校から3年間ルーブリックを取り続けているため、継続して力をつけていると見ることができるが、6・7期生同様に探究学習を行った後で一旦数値が下がる現象が見られた。高校入学後に様々な教育活動でメタ認知能力（自分自身を客観的に捉える能力）が高まっていくと、ルーブリックに示されたレベルをより冷静に捉えられるようになると考えられる。

これまでのところ、どの学年においても、最終学年に2年次後半から3年次にかけて探究学習が本格的に進んでいく時期に大きく上昇する傾向がある。最終目標に掲げるルーブリックの平均3.5はかなり野心的な数値ではあるものの、まだ達成できた学年はない。今年度より採択されたWWL事業で、更なる探究学習の深化にチャレンジしている最中であるので、引き続きルーブリックの検証をしながら活動に取り組んでいきたい。

(3) 8期生（令和6年度3年生）の評価

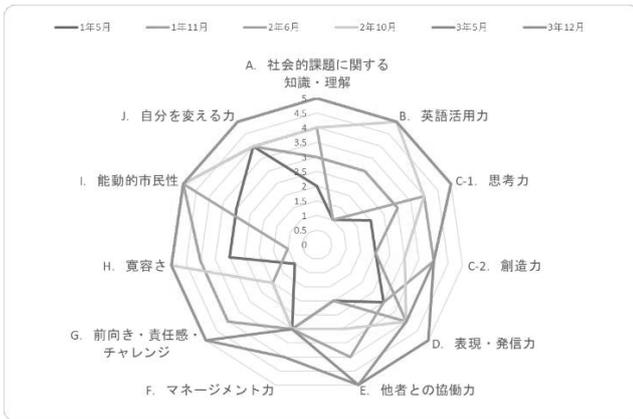
8期生のルーブリックは、全体的に最初から数値が高いことが特徴である。これは、中高一貫1期生（一貫生）が高校進学した学年であることが大きな影響を与えている。一貫生は、中学の3年間、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップや哲学対話を行っていたため、「表現・発信力」や「創造力」、「他者との協働」、「思考力」の基礎的な力が備わっている。そんな生徒たちが8期生の4割を占めており、地域創造と人間生活や探究の授業において、自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話しながら物事の本質を捉えたり、自己を開放し他者と協働する雰囲気を作ったりすることができたことが、結果として全体の数値に現れたと言える。

3年生になってからは全体平均3.01まで大きく伸長することができた。3年次では探究のまとめとして論文執筆が主な探究活動となったが、夏休み中にもコンテストに自主的に応募する生徒もいた。最終の数値としては、B 英語活用力がこれまでの卒業生で初の2.0点を記録した学年となった。高校入学時よりもアカデミック系列を中心に一般受験を視野に入れた生徒も多かったことやWWL事業で海外研修や海外との人との交流などの活動を多く実施してきたことも影響していると考えられる。これまでの卒業生と比較すると、過去最高の数値を記録した3期生と比較してもC-1 思考力 (3.18→3.39) やG 前向きさ・責任感・チャレンジ (3.35→3.47)、J 自分を変える力 (3.15→3.44) など、WWL事業の中で特に強化を図った項目での数値の伸長が見られた。しかし、I 能動的市民性などまだまだ伸ばしたい数値もあるため、この項目を鍛えていくための方策を今後も考えていきたい。

6. 2 8期生の個別評価

8期生のうち、未来創造探究の各ゼミ1人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

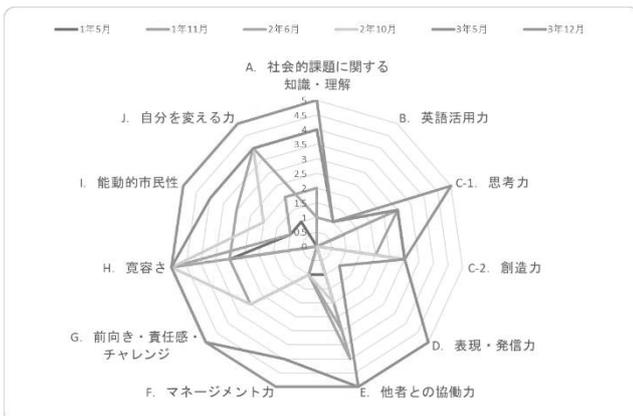
○生徒 Y.N (原子力伝承・復興探究ゼミ)



【平均値】 2.36 (1年5月) →4.73 (3年12月)

自らが得意とする英語の分野の知恵を生かして、双葉郡の事を国内外に発信する活動を行った生徒である。インタビュー相手への連絡調整などのスキルも丁寧に指導した結果、自信を持って交渉ができるようになってきた。インタビュー相手から得られた感謝の言葉から、自身の活動には使命感を持って取り組んでいたように思える。校外発表や NY 研修にも参加しており、それぞれの行き先で自分の活動にアドバイスをもらい、活動が報われた気持ちに数値に現れている。

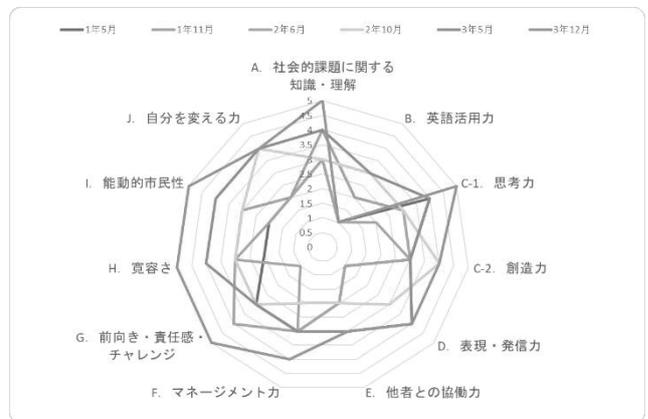
○生徒 S.U (共生社会探究ゼミ)



【平均値】 0.73 (1年5月) →4.09 (3年12月)

コロナ禍での制限が子どもたちの発達・発育に影響を与えている、との仮説のもとに、探究活動を行った。こども園の協力のもとアンケートやイベントの実施等、現場での調査を通し、現実のデータを収集でき、その中で人との関わりや他者との協働、前向きな姿勢への変化が見られる生徒であった。本人の進路希望とも合致することもあり、「社会的課題に対する知識・理解」「能動的市民性」の高まりが大きく見て取れる。

○生徒 S.H (地域社会・経済産業探究ゼミ)



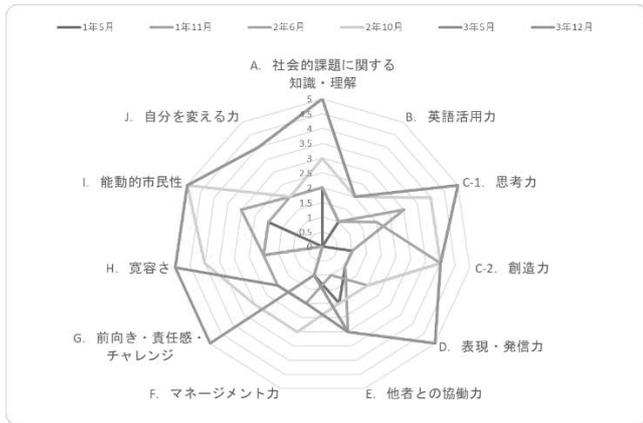
【平均値】 2.36 (1年5月) →4.09 (3年12月)

本生徒は「エシカル」・「双葉郡」・「特産品」をキーワードに「化粧品」の開発を行った。本校生にアンケートを実施・分析した結果、身だしなみにはお金をかけたいが、できていない現状や日常での使用頻度の高い化粧品として石鹸が挙げられていることから、簡単かつ低コストで生産できる「石鹸」に着目した。更に、アクションを進める中で酒粕の廃棄量の多さが全国的な課題であることや酒の製造過程でできる酒粕に美容効果があることを知り、廃棄物削減と美容に効果のある特産品の開発という視点から「酒粕石鹸」の試作・開発を行った。

ルーブリック評価では1年次平均評価においては2.36であったが、3年では「H. 寛容さ」「I. 能動的市民」の項目において大きく伸びる結果となり、平均評価が4.09となった。本生徒は将来の展望が明確であったため試作を繰り返し、マーケティングの観点からも幅広く情報収集や発信ができていたため、数値として現れたと考えられる。

○生徒 K.E (人間科学・文化・芸術探究ゼミ)

【平均値】 1.36 (1年5月) →4.00 (3年12月)



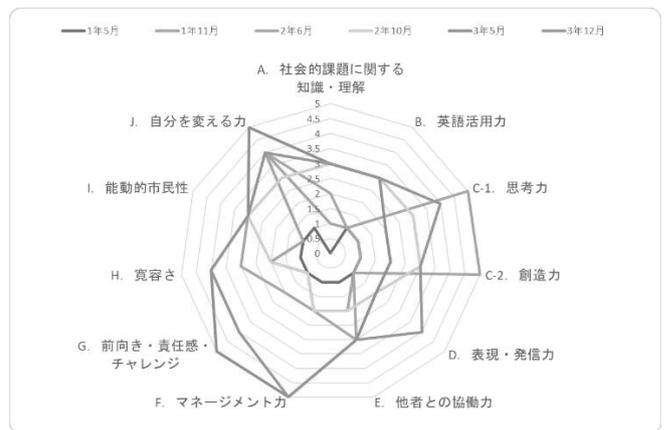
本生徒は高校2年次より海洋ごみに関する探究を始めた。進めていく中でこれまで考えてこなかったような問題にも興味を持ち考えるようになった。

また、仲間との探究活動を通して、「表現・発信力」「他者との協働力」「前向き・責任感・チャレンジ」の項目において、高い評価へと変化してきた。これは、自分で一つずつ課題を解決する過程で自己肯定感が高まり、チャレンジ精神と柔軟な思考が育てられたからであると考えている。

【平均値】 1.09 (1年5月) →4.00 (3年12月)

本生徒は「地域と都会におけるライブの機会格差を解消するには？」という問いを立て、自らの興味関心のあるトピックについて社会的な背景・現状を丁寧に分析し、様々な方へのインタビューや自らイベントを立案・企画するなどアクションを多く重ね、地域と都会におけるライブの機会格差について考察を深めた。3年間を通して特に伸びたのは「A. 社会的課題に関する知識・理解」「C. 表現・発信力」「J. 前向き・責任感・チャレンジ」が挙げられる。問いを深める過程で地域と都会の格差というキーワードが浮かび、その解決の手段に考えを巡らせる中で、社会的課題に関する知識・理解が高まったようである。また、自らライブイベントを多く立案・企画したことで、表現・発信力の伸長に繋がったことは言うまでもない。発表会でもその努力が認められ入賞し、論文執筆で表現でき、前向き・責任感・チャレンジに繋がった。

○生徒 H.F (スポーツ医科学探究ゼミ)



【平均値】 0.91 (1年5月) →3.64 (3年12月)

本生徒は、最初栄養面でアスリートのパフォーマンスを向上させることを探究してきた。2年次にアスリートのための栄養素を考えたお弁当について、作製に関わった従業員とコンタクトを取ることができた。栄養バランスを考えた食事を作る難しさを知った。この時期から自ら考えて、問題を解決しようとする意識の変化がスコア(C思考力・創造力)からも見られる。また、中間発表でテーマを睡眠まで広げ、その得た知識を発表し、それらを様々な場面で活かしたりしたことが、自信につながり、3年次以降のスコア(D表現・発信力、Fマネージメント力、G前向き・責任感・チャレンジ、J自分を変える力)に見られると推測される。

○生徒 A.H (自然科学・地球環境探究ゼミ)



6. 3 3年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（地域創造と人間生活、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、8期生に対してアンケートを行った。（実施時期：令和6年12月、回答生徒数：128人）

<意識調査>

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った。Q1～Q3は地域との関わり、Q4～Q6は探究と教科の関わり、Q7～Q11は自分自身と社会との関わりについてである。

表 調査項目と結果（数値は回答の割合）

（4：とてもそう思う 3：そう思う
2：あまり思わない 1：全くそう思わない）

番号	質問項目	R6				昨年比
		4	3	2	1	
Q1	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	22.7%	59.4%	14.8%	3.1%	-4%
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	21.9%	50.8%	20.3%	7.0%	-3%
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	23.4%	46.1%	24.2%	6.3%	-5%
Q4	探究授業を通じて、探究学習で学んだことと、教科学習で学んだこととのつながりを感じるようになった。	17.2%	55.5%	25.0%	2.3%	3%
Q5	探究授業を通じて、探究学習に教科学習で学んだことを活かせるようになった。	18.8%	54.7%	24.2%	2.3%	4%
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じるようになった。	20.3%	60.2%	14.1%	5.5%	8%
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	32.8%	52.3%	13.3%	1.6%	1%
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	33.1%	55.9%	6.3%	4.7%	6%
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	41.7%	52.0%	3.9%	2.4%	2%
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	9.4%	40.6%	36.7%	13.3%	-1%
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	14.2%	45.7%	33.9%	6.3%	-2%

ほぼ全ての項目について肯定的意見（3，4）を半数以上の生徒が回答している。今年度はQ6「教科学習の必要性を感じるようになった」が昨年度よりも大きく上昇した。8期生は一貫生の1期生となり、入学当時より探究学習と教科学習の往還関係を意識しながらカリキュラム設計に取り組んできた。探究をより高度化するために、普通の授業を大切に作る姿勢は喜ばしい。その一方で、ここ3年間での比較からの数値が低下している項目もあ

る。特に気になる項目は、Q3「探究授業を通じて、地域のことが好きになった」とQ11「探究授業を通じて、社会を変えられる」である。WWL コンソーシアム構築支援事業でグローバル人材の育成の色を強めており、地域とのつながりが薄れてきているのが顕著となっている。実際には地域をフィールドにした活動はこれまで通り行っているため、地域に対する意識があまり印象に残らなくなっていることについて、対策を考えていきたい。

<取組別評価>

1～3年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。

表 印象に残った取組、力がついた取組（数値は人数）

		印象に残った取組み	力がついた取組み
1	1年次 プチ探究	8	14
2	1年次 双葉郡バスツアー	12	37
3	1年次 マインドマップ講座	1	0
4	1年次 演劇ワークショップ	26	28
5	1年次 しくじり先生	1	2
6	1年次 探究オリエン	0	1
7	1～2年次 探究オリエンテーション（未来創造探究導入、ゼミ座談会、マイキーワード探し、先輩の探究紹介など）	0	0
8	2年次 3年生の中間発表会	4	2
9	2年次 問いづくり講座	2	0
10	2年次 GWの調べ学習	0	0
11	2年次 ゼミごとに分かれての活動	24	7
12	2年次 中間発表会	0	0
13	3年次 最終発表会	15	14
14	その他	0	0
	総回答数	93	105
	回答生徒	128	128

例年多い項目

今年度特に多い項目

回答については複数回答も可としてアンケートを行っている。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。今年度の傾向として、印象に残った取組み・力がついた取組みともに1年次の双葉郡バスツアーをあげる生徒が多かった。演劇と探究の連動性を高める取組みをした点については、十分目的を達成できたと考えられる。また、自由記述の中には未来創造探究の位置づけについて「自分と社会のつながりを再確認する時間」「学習の集大成」という言葉が目立ち、生徒にとっても重要な学びであることを感じ取ることができた。

6. 4 進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは平成30年度から始めており、今年度が7回目である。

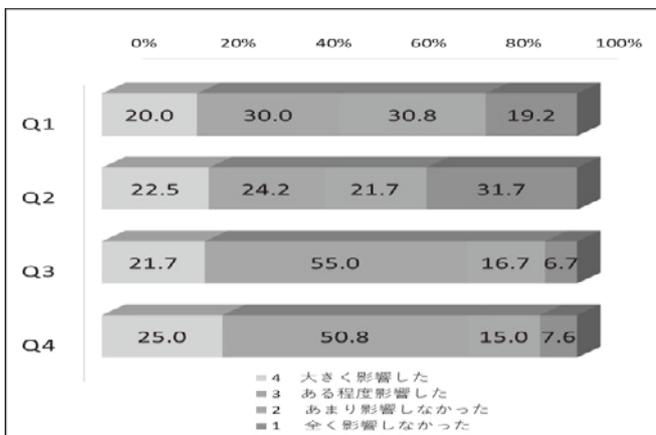
実施日：令和7年1月

対象生徒：8期生3年次生徒120人

内容：以下のアンケート項目に対して、1～4の4観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結果：表中の値は割合（%）

質問項目		4	3	2	1
Q1 未来創造探究は、あなたの卒業後の具体的な進路選択に影響を及ぼしましたか？	8期生	20.0	30.0	30.8	19.2
	7期生	14.1	49.4	31.8	4.7
	6期生	16.9	41.1	30.6	11.3
	5期生	25.2	41.7	25.2	7.8
	4期生	23.4	42.3	27.9	6.3
	3期生	18.6	31.9	34.5	15.0
Q2 未来創造探究での活動を、入社試験や入学試験に活用しましたか？	8期生	22.5	24.2	21.7	31.7
	7期生	23.5	20.0	35.3	21.2
	6期生	24.2	31.5	29.8	14.5
	5期生	25.2	32.0	22.3	24.3
	4期生	32.7	33.6	20.9	12.7
	3期生	24.8	34.5	22.1	18.6
Q3 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？	8期生	21.7	55.0	16.7	6.7
	7期生	15.3	61.2	16.5	7.1
	6期生	29.0	56.5	12.9	1.6
	5期生	27.2	60.2	9.7	2.9
	4期生	31.3	57.1	10.7	0.9
	3期生	25.7	54.9	16.8	2.7
Q4 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？	8期生	25.0	50.8	15.0	7.6
	7期生	25.9	50.6	17.6	5.9
	6期生	33.9	35.2	26.2	9.7
	5期生	28.2	59.2	9.7	2.9
	4期生	35.7	54.5	8.9	0.9
	3期生	38.9	47.8	10.6	2.7



- 4 大きく影響した（繋がった・活用した）
- 3 ある程度影響した（繋がった・活用した）
- 2 あまり影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
- 1 全く影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）

Q1、Q2については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1では50%（昨年度－13.5%）の生徒が進路選択に影響があったと回答している。この項目は毎年60%程度で推移しており、今年度は大きく後退した。

Q2においては探究活動を進学・入社試験で活用したかという問いに対して46%（昨年度＋3%）の回答であった。この数値は4期生の66%を最高値として、例年少しずつ低下している数値であるが、今年度は若干回復した。数値上は低下しているものの、生徒のコメントで「総合型選抜でアピールする内容が増えた」というものも多く、この項目も大切にすることが必要である。

Q3、Q4は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず例年8～9割の生徒が肯定的に捉えていたが、今年度についてはQ3の数値は76.6%（昨年度76.4%）、Q4は75.8%（昨年度76.5%）とほぼ昨年度同等の数値であった。

Q4の項目では地域社会に対しての関わりについてや、探究学習を通じて「復興とはなにか」を自分なりに表現したコメントが多かったことは3年間の探究学習と真剣に向き合ってきたことの証拠と思われる。

高校生と社会の関わりを問う『18歳意識調査「第20回 -社会や国に対する意識調査-」』（日本財団、2019年11月）

<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html> 2023年3月閲覧）と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴と言えるであろう。

ここ数年の傾向として、探究学習を通じて進路決定に影響を与えたかについては年々数値が低下している。しかし、短期的な視点にとどまらず、探究学習が社会に出てどのような影響を与えているかなどについては具体的な数値がない。そのため、大学卒業後や社会に出て数年たった卒業生への追跡調査の必要性を感じている。

	自分を大人と思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を改良したいと思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、自分自身から取り組む社会課題を持っている
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
中国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

参考資料：18歳意識調査「第20回 -社会や国に対する意識調査-」（日本財団）

6. 5 学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年1回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関するものについてピックアップした。

対象：本校舎高校1～3年の生徒、保護者、教員

回答数：保護者271名、生徒305人、教員98人

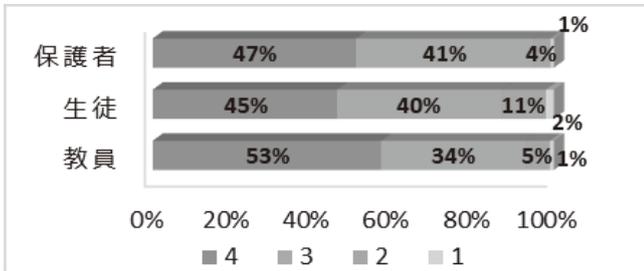
回答：以下の4段階および無回答による回答

4：思う 3：ある程度思う

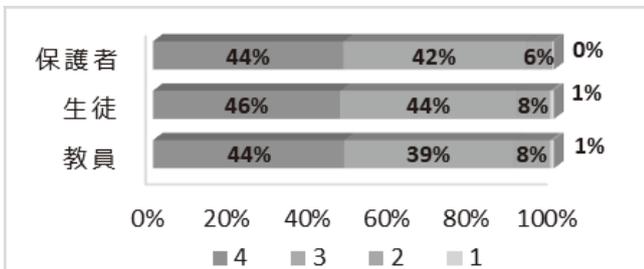
2：あまり思わない 1：思わない

アンケート項目と結果：

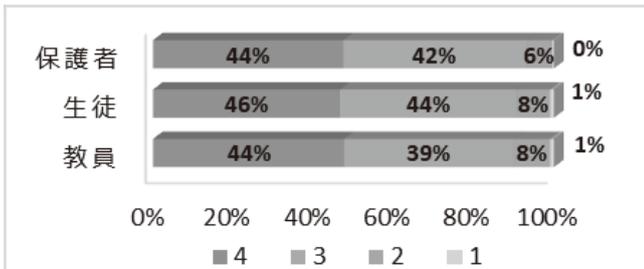
Q1 アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている。



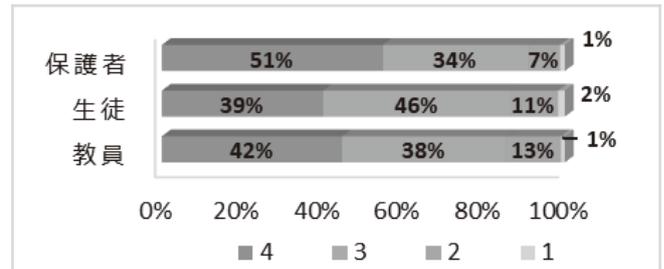
Q2 地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



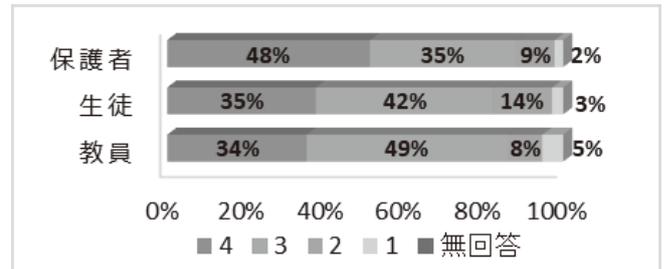
Q3 地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4 地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5 地域だけでなくグローバルな視点(SDGsなど)を持つような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれも肯定的意見(4+3の回答)が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。

Q1では生徒・保護者ともにアクティブラーニングや探究する力を育てる授業がふたば未来学園の取り組みと認知されている様子がわかる。また、保護者からの肯定的評価が88%(一昨年56%)から3年連続で上昇しており、本校の探究学習の成果が地域の方々にも浸透した結果と言える。

Q2では、昨年度は「地域の課題に向き合う」取り組みが悪化したため、地域と世界の課題を重ねて考えることを強調してきた。その結果、どの対象についても+10%近く数値が好転している。

Q3は外部連携の状況についてのアンケートである。保護者や生徒から様々な組織との連携の数値が向上し、特に生徒からは87%(昨年比+8%)となっている。

Q4は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が80%で推移しているが、生徒の項目では85%(昨年比+5%)となった。

Q5はグローバルな視点についてである。WWLコンソーシアム構築支援事業ではグローバルな視点を重視しているが、教員からの肯定的評価は上昇(+1%)しており、生徒の肯定的評価も87%(昨年比+9%)と大きく向上した。生徒の海外研修や海外留学、留学生との交流など日常での国際交流の機会の向上が功を奏している。

6. 6 設定した目標の達成度

WWL構築支援事業での目標設定については、短期目標、中期目標、長期目標が設定されているが、具体的な数値目標は求められていない。そのため、本校では短期目標については令和2～4年度に指定を受けた「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の際に設定した目標を準用することで目標の達成度を測定することとした。今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめた。

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) 構築支援事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

	項目	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	目標値
		SGH最終	Glocal1年目	Glocal2年目	Glocal最終	WWL1年目	WWL2年目	
a	本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値	3.1	2.62	2.9	3.03	2.56	3.18	3.5
b	卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の	84	89	87	63.4	76.5	76.2	70%
c	本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合（本事業に関する5つの項目の平均値）	調査なし	67	88.5	90	81.7	84.4	70%

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

	項目	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	目標値	
		SGH最終	Glocal1年目	Glocal2年目	Glocal最終	WWL1年目	WWL2年目		
a	地域の個人、団体との協働による 課題探究プロジェクト数	目標	31	40	45	45	50	50	50件
		実績	40	52	58	69	58	93	
b	視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数	目標	調査なし	200	230	230	250	250	250人
		実績	調査なし	178	192	376	467+a	606+a	
c	生徒の外部発表、コンテスト応募件数	目標	35	40	45	45	45	45	45件
		実績	35	42	56	55	58	55+a	

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

	項目	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	目標値	
		SGH最終	Glocal1年目	Glocal2年目	Glocal最終	WWL1年目	WWL2年目		
a	本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数	目標	150	165	180	180	250	250	250
		実績	165	301	310	321	235+a	99+a	

以上の数値はすべて2025年1月31日までの数値となる

第7章 研究開発の成果と課題

開学初年度より文部科学省の5年間のスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業【H27～R元年（5年間）】と地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）【R2～4年（3年間）】に取り組んできた。今年で2年目となるWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業では「原子力災害からの復興をはたすグローバル・リーダーの育成」の構想名を掲げている。なお、この構想自体はSGH事業からWWL事業までの10年間大きく変わっていない。研究開発した成果について、以下のようにまとめる。

7.1 研究開発成果概要

WWL事業では4つの目標を掲げている。

- ① 本県から東北地区に展開するグローバル人材育成のアドバンスト・ラーニング・ネットワーク（福島ALネットワーク）の形成
- ② 探究・海外研修・APを体系的に位置づけたカリキュラム開発
- ③ 地域や世界の課題解決に貢献する人材の育成
- ④ 「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果創出

①では管理機関である福島県教育委員会との協働体制を構築し、実際の運用が始まった。今年も東北大学と引き続き連携し、学問論演習を実施することができた。昨年は1講座6名の参加であったが、今年は8講座に拡充され、本校生6名のほか福島高校（3名）、会津学鳳高校（4名）も参加があった。今年度もオープンバッジの発行になるが、最終的には東北大学の単位認定となるように引き続き協議を続けていきたい。

②については、今年度はドイツ研修と探究の連携をさらに充実させるために事前の研修を広島研修と重ねて連動させた。「歴史をどう後世に伝えるか」に注目し、ドイツ研修参加者は福島県白河市にあるアウシュヴィッツ平和博物館を見学し、研修を行った。また、核でつながった関連性で、広島と福島をどう学ぶかという観点から、アメリカ・シカゴにあるデュポール大学の宮本ゆき先生にお越しいたいただき、



「なぜ原爆は悪ではないのか？」というテーマで講演をいただいた。この取組みは「WWL 高校生のた

めの特別講義」として、本校と福島高校、宮城・仙台二華中高、山形・東桜学館中高をオンラインでつなぎ、ハイブリッド開催として行った。

③では今年度の高校2年次を対象にゼミごとに専門家を招き、調査のためのアクションを行っている2年次前半期というタイミングに合わせて専門知識講義を行った。地球環境・自然科学探究ゼミでは専門知識講義だけではなく、2回読書会を行うことができた。調査アクションの質を上げることや気になるトピックを調べておくなど探究スキルの向上にもつながっていることから、次年度以降は他のゼミでも講義からさらに演習する形を整えていきたい。

7.2 コンソーシアム組織との協働

令和4年度までのグローバル事業では地域との協働を重視し、双葉郡8町村をカバーする広域コンソーシアムを結成し、本校の教育活動や本事業の取組について共有することができた。1年次の演劇プログラムや本校の探究活動では地域の方々と常に連携をとれる体制ができあがった。しかし、WWL事業では双葉郡にある地域の組織とのコンソーシアム組織は立ち上がっていない。また、他のWWLコンソーシアムと比較すると、本校のコンソーシアムは地域の企業（特に国際的に活躍するグローバル企業）との連携が極めて弱い。グローバル企業は世界で活躍する人材が身につけるべき資質・能力開発についての実践例や蓄積を多く持っている。今後、WWL事業指定期間中に地域人材の活用とともにグローバルな視野で活躍する企業との連携についてはまだ取り組んでいない領域のため、開拓を試みたい。

7. 3 今後の課題

WWL 事業 2 年目を終え、いよいよ次年度は最終年度として成果報告会の準備を進めていく。WWL 事業として挙げた成果とともに、次年度に取り組みたい内容として主に 3 つの課題について述べる。なお、ここで掲げる 3 つの課題については昨年も同様の課題を掲げており、アプローチをすすめているものの、学校全体としてまだ取り組めることがあるという考えである。

① 中高 6 年間で連動した探究カリキュラムの開発とさらなる探究の高度化

探究学習については、開学以来 10 年間の実践と経験を積み重ねてきた。探究の指導方法についても、「4 つのロールと 23 の関わり」を提案し、他校の教員研修にも活用していただいている。探究学習をさらに充実したものとするためには、探究学習の技法を更に磨くだけではこれ以上の高度化・深化は期待できない。日々の教科授業の「探究」的な学びの実現にとどまらず、部活動や HR 活動、特別活動など学校の教育活動全体が探究のプロセスを体験できることを内蔵しなければいけないと考えている。つまり、生徒が見通し（Anticipation）を持って行動（Action）し、その結果を振り返る（Reflection）という一連のプロセスがなければ、生徒が主体的に学びをするプロセスとならない。カリキュラムを考えるうえで、どうしても「教員が生徒に〇〇させることで、△△する」といった教員が主語になったカリキュラムを立てがちである。あらゆる教育活動で行うためには、教務部や進路指導部など他の学校組織との目線合わせと打ち合わせが必要である。そのよう体制づくりに向けて次年度の計画を進めていく。

② 文理融合・教科横断的なカリキュラムの開発

文理融合・教科横断的なカリキュラムの必要性や有効性についてはかなり定着しているが、実際のカリキュラムに落としこむ段階でまだ教員の肚落ち感が足りないように感じている。各先生方で自分の教科に関する教材研究や「生徒が学びたい授業」づくりに日々奮闘しているが、文理融合や教科横断をしようとすると二の足を踏んでしまう教員が多い。

当初は教科横断的な授業やクロスカリキュラムを意識的に組み入れることで、教育課程上の授業時間数を減らしていくという考え方もあるが、時期尚早であるため、自分の教科に「軸足」を置きながら、他教科とどのような内容であれば他教科との連携が図れるかを試してみる、「プチ連携」から始めたい。教科指導の中で重要なことは「学問の面白さ」が生徒に伝わることだと思う。昨年から「自立した学習者」を育てるにはという議論を続けているが、自ら学びたいようになるには、学ぶための理由が必要である。「単に受験に必要なだから」を超えて、「学ぶことそのものが面白い」ことを伝えられるのはやはり教科の先生の指導が重要であり、そこから日々の教科の授業が重要である。学ぶことと力がつくことの関連性について、さらに次年度研究開発を進めたい分野である。

③ 地域復興と教育の相乗効果を生み出す探究学習（+生徒・教員・地域の方の三者が探究学習を通じて、ウェルビーイングが向上する形）

先述のカリキュラム開発にも関連するが、WWL 事業の開発テーマである「原子力災害からの復興を果たし、新たな社会を創造するグローバル・リーダーの資質・能力の育成」を目標に掲げながら、「原子力災害からの復興」とは何かというテーマから遠ざかっている感じがある。グローバル人材が強調されている分、本校がこれまで取り組んできた「地域課題解決」と今の WWL 事業の関係をもう一度整理する必要があるだろう。これは常に本校のスクールポリシーは何かを確認する作業でもある。

教員のウェルビーイングを高める方策は一般的には多忙化解消だがビルド&スクラップするには、教育効果の検証が必要である。次年度には 1 期生～8 期生までの卒業生が社会に出てどのような力を活用しているのかなどの卒業生アンケートを実施する予定である。ふたば未来学園高校での学びの中で、「探究は何を育てたか？」を中心テーマとしながら、次年度の成果発表会に向けて分析を進めていきたい。

7. 4 カリキュラムアドバイザーからの総括

県立高校改革室 指導主事（安積高等学校教諭兼務） 遠藤直哉

1. はじめに

文部科学省の指定事業（SSH事業）に20年間関わってきた立場から、ふたば未来学園のWWL事業について総括したい。文部科学省の事業に指定された学校には、カリキュラムの開発や、新しい取組に基づく成果の創出、他の組織や教育機関を巻き込んでの広域教育が求められる。様々な仮説の下に新しい企画を立ち上げ実施するため、教員の業務量はかなりのものとなる。生徒の成長に元気と勇気をもたらす時があれば、業務に追われ疲弊することもある。時には教員間の意見の対立に悩むこともある。私の様々な経験を踏まえ、少しでも参考になる総括としたい。

2. 今年度の取組について

ふたば未来学園が取り組んでいる事業は、首都圏の探究活動に力を入れる中高一貫校と比べても遜色のないレベルである。グローバル研修としてニューヨークとドイツに行き、イスラエルやUCLの学生との交流も行う。国内の高校生との交流も数多く行われ、発表会の回数も多い。東北大学との学問論演習を通じた連携、世界最高峰の研究機関となるであろうF-R-E-Iとの連携も進めている。地域との連携では、福島イノベーション・コースト構想推進機構と協働した地域課題探究が行われ、自己発見やメタ認知を高める演劇教育まで取り入れられており、極めて充実した取組が展開されている。

3. 評価と成果

（1）多様な学習機会の提供

ふたば未来学園のWWL事業は、探究学習、国際交流、大学との連携を通じて、非常に多様な学習機会を提供している。特に外部団体との連携が充実しており、専門的な指導や実践的な学習環境の提供が可能となっている点は高く評価できる。

（2）生徒の成長の可視化

卒業生アンケートのデータによると、「未来創造探究が自己の価値観を考える契機となった」と回答した生徒の割合が増加しており、探究学習が実生活に与える影響の大きさが示された。

（3）教育のネットワーク化

県内外の高校や海外の教育機関との連携を強化し、学校間のネットワーク構築を通じて、持続可能な学習環境を実現している。

4. 今後の課題と提言

これだけの事業を継続させていくためには、相当なマンパワーとノウハウが必要になる。一から事業を組み立てる際には、十分なノウハウが求められる。試行錯誤を繰り返す中で、時には継続性の確保が難しい単発事業となる場合もある。

では、ふたば未来学園においてはどうかというと、外部団体との連携が実にうまく機能している。モチベーションの向上やグループワークのノウハウの指導を「カタリバ」の担当者が担い、それに加わる教員は徐々にノウハウを学ぶ。演劇教育においても、日本を代表する平田オリザさんや愛弟子が指導に入る。それもまた、参加した教員に引き継がれていく。この外部団体の優れたノウハウが、どんどん校内の教員に受け継がれている。さらに、ふたば未来学園では、これらのリソースを広く共有するため、

県内の教員を定期的集めた研修を実施している。WWL事業としては、極めて高い完成度を誇る。

では、課題は？ 先日のWWL事業拠点校・連携校連絡協議会で、複数の先生方からあった「正直、WWL事業は巻き込まれ事故みたいなものだった」との発言である。各勤務校での業務多忙の中、さらに WWL 事業にも参加しなければならないという負担感を伴う側面は、どうしても生まれてしまう。人間は感情の生き物なので、有難迷惑と思った瞬間、心が後ろ向きになる。おいしい料理を作りたいと料理教室に行けば感動の連続だが、料理を作らされる準備と思ったら苦痛の時間になる。しばし時間がかかると思うが、受動的な負担と捉えられるのではなく、有益な機会として認識されるような工夫が必要である。

5. 最後に

私自身の経験と反省を込めて伝えたい。モチベーションの向上で飛躍的に伸びる生徒は、一部であるということ。その生徒を例に、事業の正否を判断するのは、帰納的推論の観点からは適切ではない。私自身の反省である。

人の優れた能力は、過去の経験や知識を概念化（抽象化）し、それを未知の事柄に落とし込むという知の転用にある。この概念化を無意識にできる極めて優秀な生徒がいる反面、多くの生徒は苦手としている。この課題に真摯に向き合わなければ、真の能力向上にはつながらないと考える。現在、詳細なデータを基に検証を進めているが、抽象化と具体化、帰納と演繹を相当に鍛えたクラスでは、総じて成績が伸びており、もっとも相関が高い教科は国語であった。外部模試の結果、他のクラスとの差が平均 10 点に及ぶことから、さらに検証を進めればまた新しい方策が見つかるかもしれない。今後、カリキュラムアドバイザーとして、福島県の教員として、検証・実践していきたい。

生徒に伝えた内容は以下の 7 点である。この内容を、あらゆる具体例を示しながら生徒に理解させるということが続けた。

抽象化力として習得を目指す力

- ①結果（具体）から原因（抽象）を探る力
- ②目的（抽象）を意識しながら手段（具体）を考える力
- ③異なるもの（具体）を同じ構図の事象（抽象）として捉える力
- ④見えるもの（具体）の奥にある見えない事象（抽象）を見る力

抽象化に際して注意すべき点

- ⑤抽象化とは捨象を伴う作業だが、何を捨象するべきか慎重に吟味することが重要である。
- ⑥高次目的（高次の抽象）は低次目的（低次の抽象）を軽視しやすいので注意が必要である。
- ⑦人間は、合理化は得意だが、必ずしも合理的ではない。

【資料1】教育課程表

学校番号 (67)

令和6年度教育課程単位計画表

福島県立ふたば未来学園高等学校

〈普通教科・科目〉

教科	科目	入学年度			令和6年度			令和5年度			令和4年度			備考	
		年次			1	2	3	1	2	3	1	2	3		
		必修	選択		必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修		選択
国語	現代の国語		2					2				2			
	言語文化	2・3						2・3				2・3			
	論理国語			2	1・2			2	1・2			2	1・2		
	文学国語			1	2			1	2			1	2		
地理歴史	古典探究			1・2	2			1・2	2			1・2	2		
	地理総合		2					2				2			
	地理探究				3					3				3	
	歴史総合	2			2			2		2		2		2	
公民	日本史探究			3					3				3		
	世界史探究			3					3				3		
	倫理				3				3				3		
	政治・経済				2				2				2		
数学	公共	2	2					2	2			2	2		
	数学Ⅰ	1・3・4						1・3・4				1・3・4			数学Ⅰは中高一貫生は1単位(2単位分は中学3年時に履修済)。その他は3単位または4単位。単位数は、系列の特色等を踏まえ、学習の深化や定着を図るために変えている。 1年次の数学Ⅱは数学Ⅰの履修後に、2年次の数学Ⅲは数学Ⅱの履修後に履修する。 数学Aは、1・2年次のいずれかで履修。 数学Bは、2・3年次のいずれかで履修。単位数は、学習の深化や定着を図るために変える。 数学Ⅱ、数学Ⅲの各年次の単位数は、一貫生と高入生の進度の違いによるものである。
	数学Ⅱ	3・1	1・3・4					3・1	1・3・4			3・1	1・3・4		
	数学Ⅲ		1・3	3					1・3	3			1・3	3	
	数学A	2	2			2	2		2	2		2	2		
	数学B		2	2			2	2		2	2		2	2	
	数学C		2	2			2	2		2	2		2	2	
理科	科学と人間生活	2	2			2	2		2	2		2	2		
	物理基礎	2	2			2	2		2	2		2	2		
	物理			2	4			2	4			2	4		
	化学基礎		2					2				2			
	化学			2	4				2	4			2	4	
	生物基礎	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
保健体育	生物			2	4				2	4			2	4	
	地学基礎		2					2				2			
	体育	2	3	2		2	3	2		2	3	2			
芸術	保健	1	1			1	1			1	1				
	音楽Ⅰ	2			2			2			2			2	音楽Ⅰ、美術Ⅰ、書道Ⅰ、演劇Ⅰから1科目を選択履修。 令和4、5年度入学生は、1・3年次のいずれかで1科目を選択履修。 芸術Ⅱは、1年次に「Ⅰ」を付す科目を履修した者が2・3年次いずれかで選択可。
	音楽Ⅱ														
	美術Ⅰ	2			2			2			2			2	
	美術Ⅱ														
	書道Ⅰ	2			2			2			2			2	
	書道Ⅱ														
演劇Ⅰ	2			2			2			2			2		
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3・4						3・4				3・4			
	英語コミュニケーションⅡ		2・3・4	2				2・3・4	2			2・3・4	2		
	英語コミュニケーションⅢ			3・4					3・4				3・4		
	論理・表現Ⅰ	2	2			2	2			2	2				
	論理・表現Ⅱ		2					2				2			
家庭情報	論理・表現Ⅲ			2					2				2		
	家庭基礎	2				2				2					
情報	情報Ⅰ	2				2				2					

【資料1】教育課程表

〈専門教科・科目及び学校設定教科・科目〉

教科	科目	令和6年度			令和5年度			令和4年度			備 考	
		入学年度			入学年度			入学年度				
		1	2	3	1	2	3	1	2	3		
必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	
農 業	農 業 と 環 境		2			2			2			
	課 題 研 究		3	3		3	3		3	3		課題研究は、2・3年次継続履修。
	総 合 実 習		3	3		3	3		3	3		総合実習は、2・3年次継続履修。
	野 菜			2			2			2		
	草 花		2			2			2			
	食 品 製 造		2	2		2	2		2	2		食品製造は、2・3年次継続履修。
	農 業 と 情 報			2			2			2		
工 業	地 域 資 源 活 用			3			3			3		
	工 業 技 術 基 礎		3			3			3			
	課 題 研 究			4			4			4		
	実 習			3			3			3		
	製 図		2			2			2			
	電 力 技 術			2			2			2		
	社 会 基 盤 工 学			2			2			2		
	地 球 環 境 化 学		2			2			2			
	電 気 回 路		3			3			3			
	工 業 環 境 技 術			2			2			2		
生 産 技 術			2			2			2			
商 業	ビ ジ ネ ス 基 礎		2			2			2			
	課 題 研 究			3			3			3		
	マ ー ケ テ ィ ン グ		3			3			3			
	簿 記		4	2		4	2		4	2		
	原 価 計 算			3			3			3		
	ビ ジ ネ ス 情 報											簿記は、2・3年次継続履修。
	情 報 処 理		3			3			3			
	ビ ジ ネ ス 法 規			2			2			2		
ビ ジ ネ ス ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン			2			2			2			
ビ ジ ネ ス ・ マ ネ ジ ム ン ト			2			2			2			
観 光 ビ ジ ネ ス			3			3			3			
家 庭	生 活 と 福 祉		2・4			2・4			2・4			
	フ ー ド デ ザ イン		2	3		2	3		2	3		
	保 育 基 礎		2	2		2	2		2	2		
	住 生 活 デ ザ イン		2			2			2			
	フ ァ ッ シ ョ ン 造 形 基 礎		2			2			2			
	保 育 実 践			2			2			2		
	課 題 研 究			4			4			4		
介 護 福 祉 演 習			6			6			6			
情 報	情 報 デ ザ イン			2			2			2		
体 育	ス ポ ー ツ Ⅱ	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	スポーツⅡ、スポーツⅢは、1～3年次継続履修。
	ス ポ ー ツ Ⅲ	10	10	10	10	10	10	10	10	10		
英 語	英 語 演 習			3			3			3		
	総 合 英 語 演 習			4			4			4		
人 文	国 語 演 習			3			3			3		
	世 界 史 演 習			3			3			3		
	日 本 史 演 習			3			3			3		
	表 現 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン			2			2			2		
理 数	数 学 演 習		1	3・5		1	3・5		1	3・5		
	総 合 数 学 演 習		2・3	3・5		2・3	3・5		2・3	3・5		数学演習は、2年次に1単位履修した者は3年次に3単位の継続履修(計4単位)、3年次に履修の者は5単位履修。
	応 用 数 学			2			2			2		
	微 分 積 分 演 習			3			3			3		
	数 理 数 学			5			5			5		
	化 学 演 習			2			2			2		総合数学演習は、2年次に2単位履修した者は3年次に5単位の継続履修(計7単位)、2年次に3単位履修した者は3年次3単位の継続履修(計6単位)。
	生 物 演 習			2			2			2		
	地 学 演 習			2			2			2		
物 理 演 習			2			2			2			
理 科 総 合 演 習			3			3			3			
産 業	ス ペ ー ヲ リ ス ト 基 礎	2			2			2				
	Webデザイン&Webプログラミング			2			2			2		
農 業	葉 子 演 習			2			2			2		
工 業	地 域 エ ネ ル ギ ー			2			2			2		
保 健 体 育	ト ッ プ ア ス リ ー ト 概 論		2	1		2	1		2	1		
情 報	W W L 情 報			1			1			1		
探 究	地 域 創 造 と 人 間 生 活	2			2			2				産業社会と人間の代替科目として履修。
総 合	産 業 社 会 と 人 間											
総 合 的 な 探 究 の 時 間		1	3	2	1	3	2	1	3	2		
小 計			74			74			74			
ホ ー ム ル ー ム 活 動		1	1	1	1	1	1	1	1	1		
合 計			77			77			77			
組 編 成			5			5			5			

【資料2】ルーブリック表

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 人材育成要件・ルーブリック(6 April 2021 Ver.)

学力概念	No	学質・能力・態度(まとめと)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	
知識 Knowledge "What we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やそその課題を理解するための知識を身に着ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深掘し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。	
	B	英語活用能力 英語を使ってのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとろうとする関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(GEFR A2レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(GEFR B1レベル)	地域や研究内容について、スピーチ、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(GEFR B2レベル)	地域や研究内容について、スピーチ、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(GEFR B2レベル)
	C-1	思考力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理でき、考えられる。	目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げて考えられる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考え、本質を追求することができ。	未知のことについて粘り強く考え、自分の考えや常識のことからわかれず、本質的・根源的な問いを立て、多面的に考えることができる。	未知のことについて粘り強く考え、自分の考えや常識のことからわかれず、本質的・根源的な問いを立て、多面的に考えることができる。
	C-2	創造力 自分なりの見方や好奇心を持って試行錯誤し、社会に新たな独自の価値を創造することができる。	アイデアを生み出すこと、自分なりの見方や考え方に基いた観察や思考を行うことができる。	好奇心をもつて、他者との違いを楽しみながら自分なりのアイデアを生み出すと行動できる。	目の前の課題に対して、これまで得た知識や技術に関連づけながら、自分なりのアイデアを実現しようとする行動できる。	行動する中で、出会いから得られた知見や発想を取り入れ、自分なりのアイデアを社会的に価値あるものに高めることができる。	試行錯誤(創造のスパイラル)を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな独自の価値を創造することができる。	試行錯誤(創造のスパイラル)を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな独自の価値を創造することができる。
	D	養育・養育力 どのような場でも慮することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	突然指名されたときでも慮せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。	自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考慮し、テラロジールを適用したりしながら、分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考慮し、テラロジールを適用したりしながら、分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って胸に落ちる形で説得力ある発信を行う、共感を得ることができる。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。異文化・異なる感覚の人・異年齢等乗り越え、仲間と協力・協働する。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたこと一人で行うことができる。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけて、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者の中で、他者の良さに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かつて活動を進め合意形成を目指すことができる。	集団や他者との中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる。	分断・対立、文化・国境を越えて、社会を革新する行動につき、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。	分断・対立、文化・国境を越えて、社会を革新する行動につき、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。
	F	マネージメント力 自分や組織での取り組みを計画性を持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、解決に向けた適切な目標を設定し、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体にとって必要な作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対処することができる。	作業の繋がりが、全体スケジュールを意識し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担して目標に向けた行動ができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
	G	前向き・チャレンジ 自分を意味する存在として考え自信を持ち、課題解決のために自分自身を奮起させることができる。	自分を意味する存在として考え自信を持ち、課題解決のために自分自身を奮起させることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者との中で、自分の役割を果すことができ、積極的に解決方法が分からなくても考え続けることができる。	困難にぶつかっても自分の責任を果す努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果す努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果す努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。
	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやる態度が持てる。	集団や他者の中で、他者を気遣うことができる。	集団や他者に対して、思いやりを持って行動し、周囲の幸せを考えられる。	集団や他者に対して、思いやりを持って行動し、周囲の幸せを考えられる。	考えの違う他者に対して、思いやりを持って接するなど、ユニークな意見やアイデアを積極的に受け入れ、社会や環境の変化を前向きに捉えられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分の責任を果す努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分の責任を果す努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。
	I	能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼすことができる。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼすことができる。	社会の中で自分の役割や意義を俯瞰して考え、自分の目標や将来の夢と関連づけて大高的に行動できる。	社会の中で自分の役割や意義を俯瞰して考え、自分の目標や将来の夢と関連づけて大高的に行動できる。
J	自らを振り返り変えていく力(メタ認知) Metacognition "How we reflect and learn"	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる。	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づこうと努力し、自ら行動することができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直し、次の行動につなげて取り組むことができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直し、次の行動につなげて取り組むことができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直し、次の行動につなげて取り組むことができる。	

協創
協働

自立

【資料3】運営指導委員会

令和6年度 WWLコンソーシアム構築支援事業 第1回運営指導委員会記録

1 期日 令和6年9月10日(火) 16:00~17:30 オンライン開催

2 出席者(敬称略)

(1) 運営指導委員

田熊美保委員(OECD教育スキル局シニア政策アナリスト)

鈴木寛委員(東京大学公共政策大学院教授)

(2) ふたば未来学園中学校・高等学校(校長、副校長、企画研究開発部主任)

(3) 認定NPO法人カタリバ双葉みらいラボ(拠点長)

(4) カリキュラムアドバイザー

(5) 管理機関(福島県教育庁高校教育課)

3 開会行事

(1) 主催者挨拶(高校教育課長)

(2) 事業拠点校校長挨拶

(3) 出席者紹介

(4) 委員長及び委員長代理選出

4 報告及び協議

(1) 令和6年度上半期の取組について(事業拠点校)

・探究学習を前倒しし、生徒研究発表会を5月に開催した。ポスターセッション部門、対話交流部門、コンテスト部門に分かれて発表した。県内外の事業連携校も参加したり、卒業生によるポスター発表も初めて実施したりした。

・早稲田大学、福島大学、国立環境研究所、福島高専と連携してゼミを開催した。

・ふくしま演劇教育シンポジウム、イスラエルの学生との交流研修なども実施した。

(2) 令和6年度事業実施計画について(事業拠点校)

・最終年度に向けた準備。10年という節目を迎えることから今後の10年を考える。

・事業連携校や事業協働機関との連携について、教育評価をどう行うか検討したい。

・海外研修の成果を他の生徒にも波及させたい。

・令和7年度以降の教育課程においては、探究の単位数が減となるように見えるが、マイナスのイメージにならないようにしたい。

・令和5年度のルーブリック評価が、その前年度より下がった原因を調査している。

(3) 東北大学との連携について(管理機関)

・令和5年度は、東北大学「学問論演習」の合同履修を1講座において試行的に実施した。ふたば未来学園高校2年生5名、福島高校1年生8名の2校13名が参加し、オープンバッジが発行された。

・令和6年度は、対象講座が7講座に増え、ふたば未来学園高校2年生6名、福島高校1年生3名、会津学鳳高校1年生1名、2年生3名の3校13名が10月から受講することになっている。

(鈴木寛委員)

・学校全体で探究に取り組んでいるのは、ふたば未来学園だけである。取組や成果の横展開が必要。探究活動や様々な講座を放課後にも実施しているという発信が必要であり、日本の探究のモデル校として人材を輩出しているので引き続き頑張ってもらいたい。AAR(After Action Review)を回していくことが大切。

・ふたば未来学園で学んだことが卒業後の人生において、どう影響を与えたのか、卒業後も内発的動機付けや学び続けるアティチュードがあるのかという観点からのレビューが必要。

(事業拠点校校長)

・令和7年度以降の教育課程については、放課後や主体的な学びができる時間の確保を

目指して、単位数や科目の変更をしている。

・他校に比べて、卒業生が地域に戻ってきていたり、地域に貢献していたりする率が高い印象。

(田熊美保委員)

・卒業生が今の中高生と交わるのはとても良い。卒業生の経験は、中高生にとって勇気づけられるものである。

・ふたば未来学園の10年の知見が県内外の事業連携校にとって必要なものである。

・日本の傾向は、学力が高いが、自分自身で学んだ経験が少ないというデータがある。

整理されていない環境の中だと貪欲的に学ぶのではないか。

・東北大学における取組では、能登や熊本などの他県の高校生と同じテーマでつながる場になるとますます良いのではないか。

(4) 協議題「令和7年度開催の高校生国際会議を今後の探究学習にどうつなげるか」

(事業拠点校)

・福島で行う高校生国際会議の開催趣旨・目的を明確化した。高校生達が会議当日にだけ集まって話をするのではなく、当日までに、オンラインを駆使しながら、お互いの地域の課題を持ち寄って協働探究するような形にしたい。メインテーマは「災害や厄災をしなやかに乗り越える力(レジリエンス)」で、分科会のテーマを5つ考えている。高校生だけで学ぶだけではなく、大学や留学生にも入ってもらいたい形を考えている。2日間の中で、基調講演、グループセッション、宣言文作成、フィールドワークを検討している。学校の枠を超えた学び、学びのリソースの共有ができればいいと考えている。

・海外連携校やこれまで交流したことがある所から来てもらえるように声をかけているが、費用が工面できないことが課題。

(鈴木寛委員)

・万博の開催時期と同じなので、万博とオンラインでつながるのもありではないか。

・海外から来る人にとって、万博も入れたコースを提示すると希望が増えるのではないか。

(田熊美保委員)

・10月に東北大学でOECDグローバルフォーラムが開催されるので、国際会議の視察に来たらどうか。

・打ち上げ花火で終わらないように、会議後の目的も併せて考えた方がいい。

・発表慣れしている生徒が多くなってきているが、対話になるとおとなしくなる傾向がある。アウトプットが発表ありきでなくてもいいのではないか。

(カリキュラムアドバイザー)

・事業拠点校におけるルーブリック評価が低くなったことについて、能力の高い生徒ほど自己評価が低くなる傾向があることが影響していることが考えられるのではないか。

・教員が準備をしすぎると生徒自ら学ばなくなるということについて、教員は、抽象的なテーマを与えると收拾がつかなくなるのを恐れ、具体的なテーマを与えがちなため、教員の意識改革も必要だと思う。

(カタリバ)

・本事業においては、コンテンツが先にでてくるので、何を指すのかがわかりづらくなりがちではある。本事業を実施することで、県の中で、学校間連携や協働的な学びがより強化された、あるいは、多様な学びをより伸ばせる学校間のリソースシェアの仕組みができたというWWLの成果の最大の象徴が高校生国際会議ではないかと考える。その支えとなるのが主体的な学びと自律的な学びである。生徒が、放課後の余白を使ってどう選び取るのかといったこと(学ぶ姿勢)をどう育てていくかが、各学校と学校間連携で試されていることではないか。

【資料4】生徒探究テーマ一覧（高校2年次）

会場	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	選択2	選択8	選択10	シアター1	シアター2	シアター3	シアター4
① 14:10-14:22	遠藤風雅 ひみつ道具は、使用できるのか？	佐藤大聡 高橋通仁 羽根田大心 宮城向	荒川莉彩 食物アレルギープロジェクト	西間木祐輔 松下純知 渡辺虎太郎 森林永夢	スピードアップ	坂本莉乃 鈴木夢清	浜通りのスイーツ作り	法社会と人のコネクタプロジェクト	化野町の化石 見川と北迫川の北石の運い	矢口瞳真 食事制限されてもスポーツはできる	木について	sleep sleep ロジエクト
② 14:22-14:34	工藤成成 系列を超えよう	大山慶 柴夏帆	鈴木咲羅 玉井優莉	渡邊聖乃 箭内佑衣	世界の言語について	林七菜	警察犬について	演劇で繋がるプロジェクト	子供の成長	食事バンの可能性	神社の輪プロジェクト	基礎運動能力が低下した人へのサポート
③ 14:34-14:46	筒井双 早川怜奈	遠藤綾乃	片岡紗弥	猪狩浩紗	怪我なく動き続ける下半身を上手に入れるために	門馬沙央	福島の海で釣れる魚と美味しい食べ方を調べる	ロングキックの精度	甲子園に行く為には(桂壺編)	先生の権威も促進	練習強度にあったケア	睡眠改善
④ 14:55-15:07	本郷孝生 高齢者と若者の交流	松本ゆめ	赤塚優翔	車田秀雄	アスリートの食事	林花音	レスリング強化	双葉郡の魅力伝える	保護犬を捜し、補助犬を増やすための	外遊び班	K-POPアイドルから字が「隣国」とは	フライビンの底層格差
⑤ 15:07-15:19	井根陽希 先取豊雅 氏家知 鈴木悠斗	相馬野馬 追を未永く	青山悠珠 坂本凱音 船木幸輝	渡邊永愛	自分に自信を持つためには	山澤陽和 泉沢敬 大山知輝 吉田朝陽 齋藤聖士	目指せスポートスター	ストレス解消	勉強法のナンパワ	制限食がある人も食べたものが食べられるようにするには	英語力向上	双葉郡のキーホールターをつくらう
⑥ 15:19-15:31	齋藤琴音	大橋の梨 復活！大作戦	甲子園に行くと打撃班	鈴木里桜	世界の難民問題について	長谷川翔哉	クリオネの糸類及び成長過程に探究	体にいいお菓子作り	自分の体の栄養と食事	将来を考える	演劇×発信 双葉郡の今を伝承していく～	原子力を考える
⑦ 15:31-15:43	山野辺翔大	SNSで地域発信	伊原希美	坂本知優	グリーンカーボンによるCO2減少	救命と医療	双葉郡を推し活で盛り上げるには？	親と子供の繋がり	障がい者に対する差別や偏見をなくす高には	発達障がい者が楽しく学校に通えるには	繋がる「将来の東北」	西丸姫菜
⑧ 15:55-16:07	五土麗美 菜	二酸化炭素を減らすには	小谷野真央	横山心絆 菊池和葉	人を笑顔にしよう！	バストコン デザインコンに近づけるための補食	コミュニケーションプロジェクト	紙芝居で伝承活動	子ども×社会問題	筋肉量(LIM)とフィジカル測定との関係性	睡眠の質について	プロバツカー選手 の食事
⑨ 16:07-16:19	佐藤莉心 武井廣吉	常盤線活性化	原ひばり 鳥尾芽生	前十字朝 帯須橋を減らすために	子どもと災害時の避難	子どもと	子どもと					

【資料4】生徒探究テーマ一覧（高校3年次）

コンテスト部門1	コンテスト部門2	コンテスト部門3	対話交流部門A	対話交流部門B
多目的1	多目的2	多目的3	みらいシアター(A~D)	
PHと疲労について	手話	幼少期からの英語教育	発達障害者認知度上昇プロジェクト	ディベートから始まる「おしゃべり」
星莉音	阿部一葉	大内萌楓	阿部采音	石上琴乃
スポーツ医・科学	原子力災害・伝承	共生社会	共生社会	原子力災害・伝承
疲労 アスリート PH	手話 伝承 表現	異文化交流 英語 教育	発達障害 支援 知的障害	競技ディベート 対話
五社山おろしの研究	大人と私たちのすれちがい	双葉郡の水生昆虫	障がい者の偏見や差別をなくすには	話しやすい環境づくりのために
紺野一剣	佐藤優香	林佳瑞	八嶋心	八木香穂
自然科学・地球環境	人間科学・文化・芸術	自然科学・地球環境	共生社会	共生社会
未知の風 災害対策 五社山おろし	対話	水生昆虫 環境保全 生物多様性	障がい 差別 知識	対話 グラレコ 海外研修
Reflower おおくま	効果的な補食の取り方と簡単に作れる補食	WSP(ウッドストロープロジェクト)	対話(30分) #Diversity&inclusion (多様性と社会的包摂)	対話(30分) #対話 場づくり
星野寿々花・山崎こはる	小野葵唯	金澤煌大 遠藤誇幸		
自然科学・地球環境	スポーツ医・科学	地域社会・経済産業		
大熊町 土壌 花	捕食、アスリート、栄養	間伐材利用 SDGs 林業		
Full of Fun!	小川町を知ろう!	自己主張ってむずかしい?	障害を越えていくために私たちに出来ること	あつまれ! てつがくカフェの森
黒木笑夏	石森大翔	川崎葉子	小嶋彩由実	渡部咲希
人間科学・文化・芸術	地域社会・経済産業	共生社会	共生社会	人間科学・文化・芸術
ライブ 芸術 地域機会格差	地域活性化 魅力発信 観光	子ども 交流 自己主張	発達障害 共生社会 学校生活	#てつがく #対話 #カフェ
Novel Create	対話のユニバーサルデザイン化	体力を効率よく使うには	The "difference" among us	演劇教育の推進
島田風花 遠藤愛果 泉水佑果奈 名木翠	谷聖彩	木村未来	酒井菜々子	岡村 麻里華
地域社会・経済産業	共生社会	スポーツ医・科学	人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術
居場所、大熊町、アイデア			差別 文化 多様性	演劇 対話 教育
神社を使って地域のつながりを作りたい	ふるさとを語り継ぐ	Let's sport	対話(30分) #Diversity&inclusion (多様性と社会的包摂)	対話(30分) #対話 場づくり
中井直歩	中島空音	諸橋蓮 荒川鈴 阿部友哉		
原子力災害・伝承	原子力災害・伝承	スポーツ医・科学		
地域 神社 つながり	伝承、表現、郷土、幸福	運動 楽しさ 子供		
FATABA CRAFT	大熊いちごプロジェクト	シュート決定率をあげるためには?		
大沼昊汰 佐々木大斗	菅波楽々	山岡七海		
原子力災害・伝承	地域社会・経済産業	スポーツ医・科学		
Minecraft 双葉郡 魅力発信	いちご、魅力発信、復興	スポーツ サッカー シュート		
元犯罪者の社会復帰支援	ホテル保護のためのカワノナの生体調査	カンケイナイイ=カンケイアル		
阿部 柊	古山 寿智、齋藤佑磨	佐藤心花		
共生社会	自然科学・地球環境	原子力災害・伝承		
社会復帰 元犯罪者 相互理解	自然、生物、実験	対話 家族 コミュニケーション		

ポスター A1	ポスター A2	ポスター A3	ポスター A4	ポスター A5
対話の地図	うみ	小学生の運動習慣化プロジェクト	アニマルセラピーについて	医食同源! ~食から健康を考える~
磨琉花	神田美優 白土莉緒来 幾田天音	下山田紬	松本真依 新妻薫実	山形遥
原子力災害・伝承	原子力災害・伝承	共生社会	共生社会	共生社会
ポスター A11	ポスター A12	ポスター A13	ポスター A14	ポスター A15
10代が暮らしやすい社会づくり	原発事故と食	海洋汚染について関心を持ってもらうには	ザリガニをたべたい	カメムシの香水を作る
佐久間 暖	鈴木七海(なつみ)	松本珠夏	永田和大	菅波海斗
人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術	自然科学・地球環境	自然科学・地球環境	自然科学・地球環境
ポスター B1	ポスター B2	ポスター B3	ポスター B4	ポスター B5
本の未来を考える	私の住んでいる町	自己理解	高校生にヘアアレンジをしてあげよう!	LGBTQ~同性愛について~
木村彩乃	新谷真子	新妻華歩	佐藤凜花 根本花菜 上村志歩	大竹礼子
原子力災害・伝承	原子力災害・伝承	共生社会	共生社会	共生社会
ポスター B11	ポスター B12	ポスター B13	ポスター B14	ポスター B15
起きやすい目覚まし音	学習サポートプロジェクト	微生物発電	狩猟の魅力について	魚っ! 海洋ギョミだ!
新谷凱士	蒲生謙心	四家遙、猪狩驍	高萩颯人	鈴木優那、橋本明佳
人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術	自然科学・地球環境	自然科学・地球環境	自然科学・地球環境
ポスター C1		ポスター C3		ポスター C5
身近な熱を直接電気に。~夢の発電の実現を目指して~		ダイコンの皮からCNFを取り出し、ポリ袋の代替品を作成する		カンボジア農村部における繊維濾過浄水機の普及を目指して
山形県立東桜学館高校		山形県立東桜学館高校		宮城県立仙台二華高校
五十嵐 耀 佐藤 秀徳 木下 真遥		藤平 恭子 和田 小紋 泉 椿咲		奥山 和季 室谷 あい
ポスター C11	ポスター C12	ポスター C13	ポスター C14	ポスター C15
焚火が微生物に及ぼす影響		いわきの食のブランドの提案	Ca化合物添加スギの炭化における水素生成量への影響と反応速度論解析	社会のことをみんなで考える 社会科を目指して
福島県立福島高校		福島県立磐城高校	(卒業生1期生)	(卒業生2期生)
高橋かな恵 永福絃		佐藤 遥磨 吉田 葵 門馬 心春	遠藤 健次	永井健一郎

【資料4】生徒探究テーマ一覧（高校3年次）

対話交流部門C	対話交流部門D	対話交流部門E	対話交流部門F	対話交流部門G
みらいシアター(A~D)		地域協働スペース(E~G)		
保育士が他職と平等な仕事になるためには	犬の幸せ	ゲーマーズ	未来を抱きしめて/ Embracing (the Past for) the future	スピードを上げて競技力向上
齋藤恵蓮	木村麗華 野口唯花	斎藤新太、佐藤晴心	中原悠紀	仲田海吾、落合源斗、田端友貴
人間科学・文化・芸術	共生社会	原子力災害・伝承	原子力災害・伝承	スポーツ医・科学
保育士 給料 休み 仕事量	毛布・おもちゃ募集 犬の幸せ 寄付	震災、伝承、ゲーム	#伝承、#語り部	スピード、サッカー、筋トレ
現実と理想のギャップを無くすには	捨て犬捨て猫をゼロにするには？	UPCYCLE	福島の現状	目指せフリーキックマスター
平田 天馬	矢内蓮	五十嵐 瞳生	八巻南星	武山鉄治 渡辺元気
共生社会	自然科学・地球環境	原子力災害・伝承	原子力災害・伝承	スポーツ医・科学
離職率 高齢化社会	マイクロチップ 捨て犬猫 殺処分	廃棄物、UPCYCLE、サッカー用具	風評被害 経済被害	
対話(30分) #ウェルビーイング ソーシャルワーク	対話(30分) #アニマルウェルフェア(動物福祉) アニマルライツ	対話(30分) #付加価値 かけ合わせ	対話(30分) #復興 震災伝承	対話(30分) #スポーツ アスレティック トレーニング(競技力向上)
虐待について	承認欲求について	AIと生きる社会	復興の需要と供給	筋トレで競技力向上！
小林 有紀	村岡拓海	秋元盛広	猪狩佑紀	岡田一沙 早田凌
人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術	共生社会	人間科学・文化・芸術	スポーツ医・科学
#子ども #支援 #安心できる社会づくり	生きがい コミュニケーション 集団	AI イラスト	復興 住民自治 合意形成	筋トレ、サッカー
福島の肥後県内児童をスポーツを使って救う	自己覚知の可能性	社会問題 on TRPG	震災から学ぶ地域医療	ジャンプ力向上
森田優雅	山野迎聖	石井友菜	小野雄太郎	中本徹平 影山輝心
共生社会	人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術	原子力災害・伝承	スポーツ医・科学
英語 コミュニケーション グローバル	自己覚知 夢 悩み	社会問題 TRPG 理解体感	地域医療 災害関連死 災害医療	筋トレ ジャンプ フォーム
対話(30分) #ウェルビーイング ソーシャルワーク	対話(30分) 心理学 コミュニケーション 自己内省(リフレクション)	対話(30分) #デジタルテクノロジー	対話(30分) #復興 地域づくり	バドミントンの面白さや知ってもらおう バドミントン部 スポーツ医・科学 メジャースポーツ バドミントン 地域活性化

ポスター A6	ポスター A7	ポスター A8	ポスター A9	ポスター A10
子どもの発達によりそったおもちゃを作ろう！	トウカンカロンで広野町を盛り上げよう	やぎp	居心地のよいクラス環境にしよう！	サスティナブルアートで知る海
雲藤彩葵、小松美優	根本陽葵	南郷真帆 神谷春花	鈴木亜佑菜	坂本陽香、古小高愛、鎌倉優香
共生社会	地域社会・経済産業	地域社会・経済産業	人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術
ポスター A16	ポスター A17	ポスター A18	ポスター A19	ポスター A20
意識啓発のためにできること	心身に負担なく、自然かつ効果的な研修をするためには	サッカーと紫外線について	ドリブルの能力をさらに高めるためには	初速度を上げるには
伊藤珠弓	市川玲音	田中優奈	板村 真央	長縄 莉央
自然科学・地球環境	共生社会	スポーツ医・科学	スポーツ医・科学	スポーツ医・科学
ポスター B6	ポスター B7	ポスター B8	ポスター B9	ポスター B10
韓国と日本	フードロス	ふたばエシカル	スポーツや運動における音楽の役割	わたしたちだってできるもん!!
柳沢桃香	五十嵐琉 猪狩陽斗 新妻拓己	鈴木初美	堀田柚希	菅野胡桃 鈴木七海(ななみ)
共生社会	地域社会・経済産業	地域社会・経済産業	人間科学・文化・芸術	人間科学・文化・芸術
ポスター B16	ポスター B17	ポスター B18	ポスター B19	ポスター B20
アンケートの探究	アスリートのコンディションについて	スポーツが社会にもたらす影響とは	ジャンプ力を向上させるには	スピードを上げるには
大越佑哉	宍戸 中野 藤井	吉田魅夢心	名木野 桃嘉	樋口 梨花
自然科学・地球環境	スポーツ医・科学	スポーツ医・科学	スポーツ医・科学	スポーツ医・科学
	ポスター C7		ポスター C9	
	サイクルツーリズムで日本を救う		言葉の変化で起こる問題の発生と抑制案の提言	
	福島県立会津高校		福島県立福島高校	
	湯田 護		馬場悠那 佐久間紘	
ポスター C16	ポスター C17	ポスター C18	ポスター C19	ポスター C20
FOOT TREASURE -地域の宝をフットボールで結ぶ- (卒業生4期生)	ヨモギマッチング (卒業生4期生)	大学生×小学生で英語にDIVE-IN! -英語と地域「愛着」のきっかけづくり- (卒業生5期生)	卒業してから今まで！ (卒業生5期生)	(卒業生6期生)
山澤世和	横須賀未蘭	小野澤彩乃	諏訪光	浦山夏美